

独立行政法人国立美術館に係る業務の実績に関する評価（平成13年度）

全体評価

評価項目	評価の結果
事業活動	<p>国立美術館の本来の業務である収集・保管、公衆への観覧、調査研究及び教育普及等の国民に対して提供するサービスについては、質・量ともに充実した業務を実施し、中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p>
収集・保管	<p>国立美術館は、近現代の日本美術及び外国美術に関する作品等を恒常的に展示するため、これまでに収蔵品55,525点、寄託品984点を収集している。平成13年度は、各館の収集方針に基づき購入527点、寄贈1,360点、寄託60点の合計1,947点を新たに収集し、その散逸、破壊、海外流出が問題とされる中で、優れた美術作品を後世へ継承するという極めて重要な役目を果たした。寄附・寄贈は有効な収集方法の1つであるため、文化庁と連携協力し税制問題を含めたその推進方策を検討することが望ましい。</p> <p>美術作品は、不適切な温湿度管理、かび、光、汚染物質などによる劣化、脆弱化、破損あるいは虫害等の生物被害を起こしやすい。国民の貴重な財産を後世に永く伝えていくため、美術作品を健全な環境で保管する努力をしなければならない。保管に関しては、各館とも施設の構造、収蔵庫や展示室等の違い、絵画、彫刻、書、写真、工芸及び映画フィルム等の種類の違いに応じて、科学的データ及び経験に基づき細心の注意を払い温湿度、照明、空気汚染及び防犯・防災等の管理を実施している。今後さらに、それぞれの美術作品に適した保存環境について、各館において研究を進め4館の連携協力を図りながら、より適切に管理するとともに保存修復部門の整備についても検討することが望ましい。また、研究員や運送業者等が展示・梱包・運搬等を行う際には、美術作品の取り扱いの知識と技術が重要であるため、正しい取り扱いについて研究員や運搬業者の指導に努めることが望ましい。</p> <p>現在建設中の国立国際美術館新館については、これまでの各館における実績を活かし空調設備や収蔵庫の構造などが適切な保存環境となるよう配慮が必要である。</p> <p>美術作品は最善の保存方法と保存環境を整えた上で、劣化に備えて定期的に点検を実施し、状況に応じて早急に対処できるようにしておく必要がある。平成13年度は修理を必要とする美術作品のうち緊急度の高い150点を実施した。また、美術作品の修理データは、将来、再び修理する際の貴重な情報として役立つため記録することが望ましい。保存カルテや修理データなど美術作品に関する情報については、各館の特性を踏まえつつ、共通規格によるデータベース化が望ましい。</p>
公衆への観覧	<p>平成13年度、国立美術館は展覧会事業として常設展、企画展32回、地方巡回展4回を実施した。</p> <p>常設展においては、美術作品の劣化等の状態を勘案しつつ研究員が蓄積した研究成果を活かし、学術的に高い水準を保ちながら、広く観覧者の興味を喚起させるためテーマを設定するなど陳列の工夫が行われた。</p> <p>企画展については「ルネ・ラリック1860-1945」「イタリア・ルネサンス」「エジプト文明展」など国民の関心に応えるものや、「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」「現代の布」「日本映画の発見」「京都の工芸-1945~2000」「田中信太郎」など各館の研究成果が活かされた学術的意義の高いものなど、企画および展示内容を十分検討し、多くの人々に優れた美術作品を鑑賞する機会を提供した。広報活動については、マスコミとの連携等により一層の強化を図ることが望ましい。</p> <p>地方巡回展については、国立美術館の優れた美術作品を地方の人々が鑑賞する機会を提供するものとして有効であった。また、海外交流展については、共催者と連絡調整を綿密に行い、中期的な展望の下に企画及び実施することが望ましい。</p> <p>以上のように国民の関心に応えたものや学術的意義の高いものをバランスよく実施し、目標入館者数を約23万人超える成果を上げた。また、入館者に対するアンケート調査の結果では、概ね8割の肯定的な回答を得ており、展覧会に対する満足度は高い。</p> <p>今後は、展覧会に関する費用対効果やアンケート等の分析を行い、展覧会の企画・内容、適正な展覧会数・入館者数の設定及び入場料金を含めた予算の設定などに活用することが望ましい。その際に、展示における教育的効果が十分発揮されるよう、そのための予算の確保を検討することが望ましい。</p> <p>また、国立美術館では展覧会事業以外の美術作品の活用方策として、平成13年度は、3,356点の貸与を実施した。貸与等については、優れた美術作品を鑑賞する機会を増やし、公私立美術館の発展に大きく貢献する活動として、施設及び美術作品の状態等に留意し、展覧会等の趣旨を考慮しながら、件数を増やしていくことが望ましい。</p>
調査研究	<p>平成13年度、国立美術館では、収蔵品に関する調査研究、特別展に関する調査研究、美術作品の保存等に関する研究、海外の日本の美術作品に関する調査研究、明治時代の工芸概念の胚胎と変貌に関する研究のための資料調査、戦後の工芸運動確立期に関する研究、明治大正期における図案集の研究、映画技術に関する調査研究、ドイツ工作連盟に関する調査研究、神坂雪佳の総合的研究、アメリカの現代陶芸に関する調査研究、中世末期から20世紀初頭の西洋美術に関する調査研究、美術館情報資料に関する調査研究、美術館教育に関する調査研究、日本及び欧米の現代美術に関する調査研究、絵画・版画等に関する調査研究、彫刻・インスタレーション等に関する調査研究など質・量ともに充実した調査研究を実施した。</p> <p>このような日常的な研究員の調査研究は、学術研究上の成果は無論のこと、出品作品の選定、展示の構成や手法、適切な美術作品の収集・保管、教育普及など、美術館活動の基礎となるものであるため今後も確実に継続して実施することが望ましい。</p> <p>また、研究成果については、展覧会図録、紀要、各種調査研究報告書、学会誌講演会等により公表されているが、より広く国民が利用できるような様々な媒体を用いて公表することが望ましい。</p> <p>外部研究者との交流についても積極的に取り組んでおり、引き続き幅広く行うことが望ましい。</p>

教育普及	<p>学習指導要領が改訂され小中学校の週5日制の完全実施や総合的な学習の時間の新設などの状況の下、美術館が社会に学習の機会を提供することが求められており、国立美術館においても教育普及活動の充実が期待されている。</p> <p>国立美術館では、その充実を図るため、資料の公開、ワークショップや子どものためのビデオ上映等の児童生徒を対象とした事業、講演会、シンポジウム、スライドトーク、ギャラリートーク、イヤホンガイド、映画・ビデオ上映、専門家養成講座、パフォーマンス、音楽会、学芸担当職員の研修、博物館実習生の受入等大学との連携、「現代の眼」等の刊行物の発行、デジタル化した美術作品等の情報の館内及びインターネットでの公開などを実施し、概ね平成12年度の実施回数や参加者数を超える成果をあげた。</p> <p>しかしながら、多岐にわたる教育普及活動については、限られた人員と予算の中で充実した事業を行うため、国立美術館として果たすべき役割について検討し、そのうえで全般にわたる見直しを行うことが望ましい。特に、博物館実習生の受け入れについては、他の業務とのバランスを勘案のうえ、目的の明確化と内容を見直す必要がある。</p>
その他	<p>国立美術館では、高齢者や身体障害者等のためのトイレ、エレベータ、スロープ及び車椅子等を設置している。また、入館者の要望の多様化・高度化に応えるため、小中学生の常設展観覧料の無料化、夜間開館、会場ガイド等の配布、フリーゾーンの活用、展示説明及びキャプションの変更、休憩室の整備、ベビーカーの貸出、レストラン・ミュージアムショップの充実などを実施し、積極的に入館者サービスに努めた。</p> <p>今後も、アンケート結果の分析やモニター制度を検討するなどの確に入館者のニーズを把握し、きめ細かなサービスを提供することが望ましい。その際には、すべての要望に答えるのは難しいため優先順位をつけメリハリのあるサービスを心がける必要がある。</p> <p>特に、国立美術館を世界に開かれたものとするために、インフォメーション、解説等について複数の外国語を使用するなど、より一層、外国人にも親しまれるための改善が必要である。</p>
<p>業務運営</p> <p>国立美術館の業務運営については概ね中期計画に基づく年度計画を履行したが、業務の効率化、人事など、まだ改善可能な点があると思われる。今後、より効率的な運営を実施するためには、運営責任者が財務諸表等経営に関するデータを分析したうえで予算・事業を計画し、法人の持っている資源を最大限に活用する必要がある。</p>	
運 営	<p>平成13年度は、法人設立の年ということもあり、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館の4館が統合したことによる本部機能の設置など組織の体制整備を図るとともに、設立前から実施していた事業を確実に実施し、必要な事業の拡張についても可能な範囲で行われた。特に、小中学生の常設展観覧料の無料化は、今後の教育普及事業との相乗効果を期待する。</p> <p>今後、さらに国立美術館が発展するためには、事業の重点的な実施など、思い切った決定が必要と考えられる。そのためには、法人の組織力を高め法人が一体となって業務を遂行していく必要がある。組織力を高めるためには、人材の育成を目的とした研修と共に、組織の目的に関する共通認識を得るための法人内教育や研修が必要である。</p> <p>また、新たな課題として、危機管理や著作権への対応についても検討することが望ましい。</p>
財 務	<p>展覧会内容の充実、夜間開館の実施、広報の充実など国民に対するサービスの向上に努めたことにより、展覧会、図録、著作権使用料、寄附金等において、予定収入の約3億円より約7千万円の増を図ることができた。</p> <p>また、給与計算事務、共済組合事務、保険契約事務等の一元化を図り、光熱水量の節約、廃棄物の分別等によるリサイクル、看視業務等の外部委託、OA化によるペーパーレス化、一般競争入札の実施により、平成13年度の運営費交付金のうち約1.37%の効率化を行った。</p> <p>今後は、各事業の実績評価や財務諸表等を正しく分析したうえで適切に予算を配分し、独立行政法人制度のメリットを活かし柔軟で弾力的な経営を行い、業務への支障やサービスの低下を招くことなく、さらに効率化を図ることが望ましい。</p>
人 事	<p>業務運営の効率化及びサービスその他の業務の質の向上を図るには、法人内の人材を適切に配置し、十分に活用する必要がある。</p> <p>事務職については、文化庁、文部科学省及び国立大学との定期的な人事交流により、安定した人員の供給と組織の活性化がなされているが、美術館業務固有の専門分野における人材育成において困難な面がある。今後はさらに事前の調整を十分に行うなど改善を図る必要がある。</p> <p>また、事務職・研究職共に、組織としての意思決定の統一、ネットワーク財産の蓄積、組織の活性化を図るため、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館の4館における人事交流を積極的に行う必要がある。</p> <p>さらに、研究職については、経験と知識の専門性を尊重しつつ、地方とのネットワーク財産の蓄積と活用及び異種混成による組織の活性化を図るため、公私立美術館、大学、文化庁及び民間企業等との人事交流を検討する必要がある。</p> <p>なお、人材育成については、企業会計研修等を実施し、職員の能力開発に努め、事務能率の増進が図られた。</p>
施 設	<p>独立行政法人国立美術館の施設等を計画的に整備充実することは、美術館活動の基盤に関わる重要な課題である。</p> <p>東京国立近代美術館においては、本館の増改築工事が平成13年8月31日に完了し、展覧場及び休憩スペースの増設並びに収蔵庫、アトライブラリ、ミュージアムショップ及びレストランを新設するなど美術館機能がより一層充実され国民に対するサービスの向上が図られた。</p> <p>その他、国立美術館には、東京国立近代美術館フィルムセンター外壁・工芸館増改築、京都国立近代美術館の収蔵庫ラック・中央監視制御装置、国立西洋美術館の新館空気調和設備・版画素描修復室・収蔵庫などの狭隘や改修を要する老朽化が進んでいるものも数多くあり、文化庁を含めて協議を進め早急に対処する必要がある。特に、24時間空調の実施を含めた設備の改修計画を検討することが望ましい。</p>
<p>総 評</p> <p>平成13年度の国立美術館は、本来の業務である収集・保管、公衆への観覧、調査研究、教育普及の質の向上及び業務運営の効率化への取組みに対し努力し、年度計画以上の実績を上げるなど、中期目標を達成するための着実な一歩を踏み始めた。</p> <p>また、貴重な国民的財産である国内外の美術作品を良好な状態で後世に伝え、美術作品を広く国民に紹介し、我が国の顔として国際文化交流を推進するとともにナショナルセンターとして国内外の美術館活動の充実へ寄与する文化の振興を図る活動を通じて、社会に貢献した。</p>	

項目別評価（東京国立近代美術館本館・工芸館）

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評価	
		A	B	C		段階的評価	定性的評価
<p>1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。</p> <p>具体的には、下記の措置を講ずる。</p> <p>(1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>(2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進</p> <p>(3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進</p> <p>(4) 外部委託の推進</p> <p>(5) 事務のO A化の推進</p> <p>(6) 連絡システムの構築等による事務の効率化</p> <p>(7) 積極的な一般競争入札を導入</p> <p>2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。</p>	<p>効率化の状況</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>1.5%以上</p>	<p>1.0%以上 1.5%未満</p>	<p>1.0%未満</p>	<p>本館は平成11年9月から平成13年8月まで増改築工事のため休館し、その間は仮事務所としてフィルムセンター（京橋）に移転しており、美術館がオープンしたのは平成14年1月中旬である。このため平成12年度と平成13年度を数値的に比較対照することは困難であるが、平成13年度は1%の業務の効率化を目指して次のとおり取り組んだ。</p> <p>(1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化 独立行政法人化に伴ない、人事、給与計算事務及び共済組合事務並びに予算要求事務、また契約事務として観覧者保険、自動車保険の保険契約を本部で行うことにより、業務の効率化を図った。</p> <p>(2) 省エネルギー 本館及び工芸館の管理部門において、照明点灯不用個所（廊下、ロビー、退室後のトイレ及び炊事場等）の消灯、冷暖房機器の適正な温度設定、O A機器の不使用时電源OFF等を職員に周知・実施した。また、省エネ意識の浸透を図るため光熱水料の使用状況及び節約状況を周知した。</p> <p>(2) 廃棄物減量化 ゴミの分別収集については、事務所内に燃えるゴミ、燃えないゴミ、カン類の3分別で実施し、ミスコピー等リサイクル可能なものは、分別処理した。会議資料、回覧文書など可能な限り両面印刷にすることで紙の使用量を減らし、ゴミ発生率の低減を図った。</p> <p>(2) リサイクルの推進 トイレトーパー、コピー紙、封筒等は全てリサイクル製品を選択し、トナーカートリッジ等その他の事務用品についても、購入品選択の際にリサイクル商品、グリーン調達物品を優先し可能な限り環境に配慮した。消耗品及び事務用品等物品の購入に当たっては、製品の選択発注は工芸館も含め本館で集中して行うことにより経済的な製品選択と事務の効率化を図った。</p> <p>(2) ペーパーレス化の推進 館内LAN（イントラネット）を活用し、本館、工芸館、フィルムセンター及び相模原分館の全職員への通知文書、会議開催案内等の連絡調整についてペーパーレス化を実施した。</p> <p>(3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進 平成14年1月まで増改築工事により休館していたが、再開後は展覧会事業に関する講演会を開催した。平成13年度の講堂利用状況は次のとおりである。 平成13年度の講堂を使用した講演会等の実施状況 特別展「未完の世紀：20世紀美術」 講演会4回 展示会場においてギャラリーガイド等 9回 共催展「カンディンスキー展」 講演会3回</p> <p>(4) 外部委託の推進 工芸館は平成13年度当初より会場看士業務、受付・券売業務について6ポストを外部委託し、本館においても1月のオープニング展より展示室等の看士業務、受付業務（イフォメーション）、券売業務を15ポストを外部委託とした。上記業務の外部委託に伴ない、各館に現場責任者を配置したことにより、会場管理及び指揮系統の職員にかかる事務的効率化を図った。 労務・技能業務については工事竣工後に工芸館を含め、清掃作業員3ポストを外部委託した。また設備管理3ポストについては、外部委託していたが、中央監視装置の更新に伴い、24時間遠方監視を実施したことにより、1ポスト削減して管理の効率化を図った。</p> <p>(5) 事務のO A化の推進 全職員にパソコンを配置し、館内LAN（イントラネット）を事務連絡等に活用し、また電子メールで国立美術館内の連絡調整も行っている。 会計事務処理を電算化するとともに専用ソフトを導入したことにより、各伝票作成時の事務処理の正確化、迅速化及び効率化を図った。</p> <p>(6) 連絡システムの構築等による事務の効率化 館内LAN（イントラネット）を活用し、事務文書をメール配信することにより、職員間の事務処理が円滑化した。これにより、不在時の連絡漏れ、各係間の連絡調整並びに係内の事務処理の迅速化・業務全体の効率化を図った。</p> <p>(7) 積極的な一般競争入札の導入 展覧会等事業に関する契約については、競争入札を実施する場合、美術館という特殊性から指名競争の割合が多くなるざるを得ないが、契約内容を常に見直しできる限り一般競争を導入した。また、随意契約を行う場合も複数の会社から見積書を提出させるなど経費の削減を図った。</p>	<p>B</p> <p>業務運営の効率化を図るため給与計算事務、共済組合事務、保険契約事務などの事務の一元化、不用な個所の消灯等による省エネルギー化、O A化によるペーパーレス化及び会場看視業務等の外部委託等を実施し、法人全体の運営費交付金の1.37%の効率化に積極的に貢献するなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。 しかし、まだ改善可能な点があると思われるので、美術館本来の業務に支障のない程度に一般競争入札や外部委託を実施するなど、引き続き積極的に取り組む必要がある。</p>	
	<p>効率化の達成率</p>	<p>1.5%以上</p>	<p>1.0%以上 1.5%未満</p>	<p>1.0%未満</p>	<p>平成13年度は、独立行政法人国立美術館全体で1.37%の効率化を達成した。 平成13年度予算・運営費交付債務繰越額 = 平成13年度執行予算額（平成13年度執行予算額 - 決算額） / 決算額 = 効率化率 4,726,536千円 - 74,848千円 = 4,651,688千円 4,651,688千円 - 4,588,482千円 / 4,588,482千円 = 0.01377</p>	<p>B</p>	

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評価	
		A	B	C		段階的評価	定性的評価
<p>1 収集・保管</p> <p>(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な購入を図る。また、そのための情報収集を行う。</p> <p>(東京国立近代美術館) 近・現代の絵画・水彩・素描、版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。 美術・工芸に関してはコレクションにより近代美術全般の歴史的な常設展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。 また、映画フィルム等については、残存するフィルムを可能な限り収集するとともに積極的に復元を図る。</p> <p>(京都国立近代美術館) 近代美術史における重要な作品など、近・現代の美術・工芸・写真・デザイン作品等を収集する。その際、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した収蔵品の充実にも配慮する。</p> <p>(国立西洋美術館) 中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れの概観が可能となるように、松方コレクションを中心とした近代フランス美術の充実、近世ヨーロッパ絵画の充実及びヨーロッパ版画の系統的収集を行う。</p> <p>(国立国際美術館) 日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、主に1945年以降の日本及び欧米の現代美術並びに国際的に注目される国内外の同時代の美術を系統的に収集する。</p> <p>(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている部分を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。</p>	美術作品の収集（購入・寄贈・寄託）の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	(1) 美術作品等の購入 〔本館〕 当館のコレクションは、明治40年の文部省美術展覧会（文展）の開設以来、文部省が買上げ保管してきた作品230点を文部省より移管されたことから出発している。開館した昭和27年度に、土田麦僊、村上華岳、安井曾太郎、萬鉄五郎、野田英夫、松本竣介らの作品を購入したことにみられるように、その後の当館の作品収集の基本は、その偏りを正し、欠を補うことに努め、明治以後の日本美術が歴史的に展観できるコレクションの形成をめざして継続的な収集を行ってきたと言える。開館から50年を迎える今日まで、収蔵作品も漸次充実をみているが、なお欠けている部分はいくつかあり、その部分の補填は、当館の収集活動の重要な課題となっている。具体的に言えば一つは、伝統的絵画の近代化という点で欠かせない美術史上の意味をもつ大正期の院展系の作家たち（今村紫紅や遠見御舟ら）の作品の収集である。もう一つは、大正期の新興美術や昭和戦前期の前衛美術に関わる作品の収集である。この点については、これまでフィールドワークが十分であったとは言えず、また作品が残存すること自体が困難であったという事情もある。近年、松本竣介や香月泰男の作品が加わったが、更に作品の調査が必要と考えている。 もう一つは海外作品の収集である。近代日本の美術が西洋の近代美術と密接な関係に成立したものであれば、歴史的な展観をめざす限りは、海外の作品もあわせて展示されることが望ましい。だが、当館が海外の20世紀美術をも収集の対象として購入したのは、昭和50年度が最初であり、以後企画展の開催などを機に、当館のコレクションにふさわしい作品を選んで収集してきているが、外国作品に関してはコレクションとして特徴あるまとまりをなすものとは言えない状況にある。ここ数年、当館はこのような認識の下に収集に努めてきた。平成13年度についても同様の考えに立って収集に努めた。その結果、平成13年度の収集活動の概要は、次のとおりである。まず、鍋木清方の作品3点を収蔵したことである。当館では平成11年度に同画家の回顧展を開催したが、いずれもその折に出品されたもので、所蔵家が画家から直接譲り受け、愛蔵されてきたものならではの作品である。その内、《明治風俗十二月》（1935）は購入し、画卷《目黒の柏庭》（1933）と屏風《初冬の花》（1935）の2点の寄贈を受けた。 当館では、昭和戦前期を日本的な絵画、すなわち明治以後の洋画と日本画の成熟・完成期と考え、鍋木清方はそこにかかわる主要な画家の一人と位置づけている。これらの作品は、すでに収蔵されている《三遊亭円朝像》（1930）と交替で展示できる作品であり、今後、常設展示に細やかな工夫を促す効果が期待できる。この収蔵は、展覧会活動と収集活動が効果的に連携した成果だと考えている。 リニユール・オープン記念展「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」は、単に展示活動にとどまらず、計画の段階から、これまでの収集を見直し、具体的にその欠落を確認する機会とすることを企図していた。そのため、400点近い展示作品の半数を他館や個人所蔵家から借用したが、その際には収集の可能性も視野にいれ、個人所蔵家には譲渡の意向をうかがうケースもあった。本年度は、それら出品作の中から、麻生三郎の残存する数少ない戦前作である油彩画《自画像》（1937）、田中信太郎と高木修の彫刻、海外作家ではイギリスの彫刻家リチャード・ロングが日本で制作した大作《東京の石の線》（1983）、および石元泰博・細江英公の写真作品をコレクションに加えることができた。 伝統的絵画の革新という点で今村紫紅は重要な作家であるが、当館のコレクションには、この画家の特質を示す作品が欠けている。平成13年度はその最晩年の画風をよく伝える《春さき》（1916）を収蔵品に加えることができた。また、当館のコレクションでは国吉康雄も同様の事情にあり、新たに収蔵した2点目のタブロー《イーグルズ・レスト》（1941）は、小ぶりの作品ではあるが、画家の生涯において、また歴史的な面でも意味のある作品と考えている。日米開戦に前後する時代に、アメリカで敵性外国人と見られたなかで制作された国吉の作品は、戦時期の美術を紹介する上で、もうひとつの切り口を提示することを可能にするものとなる。 当館では、当面、上記の三つの領域の充実を課題として、コレクションの充実に努めていきたいと考えている。 作品の収集活動は継続的な調査・研究の上に成り立つものであり、次年度に向けて、上記収集方針にかなう洋画数点について調査を進めており、また、現代の作家については、平成14年度に予定されている展覧会「写真の現在2」及び「現代美術への視点」のための調査とも連携しつつ、計画的な収集を進めていく考えである。	〔工芸館〕 もともと日本伝統工芸展からの文化庁購入作品の管理換で出発した工芸館コレクションは、昭和50年代後半から徐々に他の分野、日展系、工芸におけるオブジェ、クラフトなどに範囲を広げてきた。この10年、走泥社を中心とした陶磁器、日展の金工による立体造形作品が充実し、またスタジオグラス活動の調査・研究を踏まえて、内外の現代ガラス作品の収蔵も進展をみた。またこの間、陶磁器、染織、木工の各分野については、欧米の現代工芸作品の収集にも着手し、国際的な比較展示が一応可能ともなった。これまで皆無であった染織の立体造形作品（日本）もわずかだが収蔵したことで、コレクションの領域を広げる足がかりができたと考えている。 デザインについては平成7年度に、デザイン部門を発足させて以後グラフィックデザイン作品の収集に努め、これに従来から少しずつ収集してきた工業デザイン作品を加えて、今日モダンデザイン作品の展示が行えるようになってきている。 工芸館は、近代の工芸、デザインの体系的なコレクションの一層の充実をめざすことを基本方針として、作品の収集を行っているが、平成13年度は大正から現代までの各時代の工芸作品とアール・ヌーヴォー期以来のポスター作品を購入した。なかでも近代的な工芸作家が登場したという意味で重要でありながら、当館のコレクションでは手薄であった大正から昭和初期の、富本憲吉や浜田庄司、香取秀真の作品を収蔵できたことは、当館のコレクションの骨格を太くする上で意義があると考えられる。 また平成13年度特別展「現代の布」出品作品の中から、一つは新しい傾向を示す上原美智子、須藤玲子の作品を、もう一方は伝統的傾向の北村武資、小宮康正らの作品を購入して、現代染織のコレクションを充実させることができた。 モダンデザインではここ数年、これまで最も中心的な時代である19世紀末から20世紀初頭にかけてのポスター作品（19世紀末から1930年代）を中心に収集してきたが、平成13年度はその中で欠落していたアール・ヌーヴォー期の主要作家であるピアズリーのポスター作品を購入した。 また、少し収集の範囲を広げ、戦前から戦後にかけて（1940年代から60年代）の作家の中から、戦後のグラフィックデザイン界の旗手、レイモン・サヴィニャックとノーマン・ロックウェルの作品を購入した。 寄贈を受けた作品として、漆芸の音丸耕堂や染織の伊砂利彦の代表作をはじめ、初めての収蔵品となる金工の増田三男や染織の皆川泰蔵ら、近代を代表する作家の作品が加わった。 今後工芸館としては、コレクションが手薄な明治から昭和初期の作品収集に重点を置いて、工芸の通史をたどることができるコレクションの充実に力を入れていく方針である。 （平成13年度購入作品リストは実績報告書別紙1-1、別紙1-2参照）	A	東京国立近代美術館の収集方針に基づき、鍋木清方作「明治風俗十二月」など質の高い美術作品を113点購入し、新たに寄贈33点、寄託9点を受入れるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。また、展覧会活動を通じて収集が行われた。 今後も、引き続き収蔵品の体系的・通史的なバランスの欠けている部分から収集することが望ましい。 寄附・寄贈は有効な収集方法の一つであるため、文化庁と連携協力し税制問題を含めたその推進方策を検討することが望ましい。 美術作品の散逸や海外流出について、文化庁、国立博物館等との連携を図り情報収集など迅速に対応することが望ましい。	

<p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。</p> <p>(2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。</p>	<p>保管の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(2) 作品の保存管理</p> <p>作品を安全に展示するために館内の温度・湿度を次のとおり常に適正な数値で管理した(温・湿度測定ポイント 会場：8カ所、収蔵庫：13カ所)。また、空気汚染については炭酸ガス、一酸化炭素濃度、浮遊粉塵等の測定を行い、照明については輝度、照明範囲などを検討の上、仕様に工夫し、作品管理と鑑賞環境に配慮した。防災対策・保安対策については、警備員の配置や夜間はもとより閉館時間中であっても無人となる部屋の機械警備を実施し、作品管理に万全を期した。</p> <p>空調稼働時間は会場、収蔵庫ともに本館は24時間、工芸館は午前9時～午後6時</p> <table border="1" data-bbox="1110 262 1676 436"> <thead> <tr> <th></th> <th>季節</th> <th>温度</th> <th>湿度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">本館</td> <td>夏期</td> <td>26 ± 0.5</td> <td>52% ± 3%</td> </tr> <tr> <td>冬期</td> <td>20 ± 0.5</td> <td>60% ± 3%</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">工芸館</td> <td>夏期</td> <td>26 ± 1</td> <td>60% ± 5%</td> </tr> <tr> <td>冬期</td> <td>22 ± 1</td> <td>60% ± 5%</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">金工室</td> <td>夏期</td> <td>25 ± 1</td> <td>50% ± 5%</td> </tr> <tr> <td>冬期</td> <td>18 ± 1</td> <td>50% ± 5%</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1" data-bbox="1110 457 1676 661"> <thead> <tr> <th></th> <th>季節</th> <th>温度</th> <th>湿度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">本館</td> <td>夏期</td> <td>20 ± 0.5</td> <td>55% ± 3%</td> </tr> <tr> <td>冬期</td> <td>20 ± 0.5</td> <td>55% ± 3%</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">工芸館</td> <td>夏期</td> <td>25 ± 1</td> <td>60% ± 5%</td> </tr> <tr> <td>冬期</td> <td>18 ± 1</td> <td>60% ± 5%</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">金工室</td> <td>夏期</td> <td>25 ± 1</td> <td>50% ± 5%</td> </tr> <tr> <td>冬期</td> <td>18 ± 1</td> <td>50% ± 2.5%</td> </tr> </tbody> </table>		季節	温度	湿度	本館	夏期	26 ± 0.5	52% ± 3%	冬期	20 ± 0.5	60% ± 3%	工芸館	夏期	26 ± 1	60% ± 5%	冬期	22 ± 1	60% ± 5%	金工室	夏期	25 ± 1	50% ± 5%	冬期	18 ± 1	50% ± 5%		季節	温度	湿度	本館	夏期	20 ± 0.5	55% ± 3%	冬期	20 ± 0.5	55% ± 3%	工芸館	夏期	25 ± 1	60% ± 5%	冬期	18 ± 1	60% ± 5%	金工室	夏期	25 ± 1	50% ± 5%	冬期	18 ± 1	50% ± 2.5%	<p>A</p> <p>収蔵品の保存及び管理環境の維持充実を図るため美術作品の種類、保管場所等の違いにより、温湿度や照明等を適正に管理し、また、本館においては収蔵庫及び空調の設備を充実するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>今後も、年間を通して適正な温湿度の管理をすることが望ましい。</p> <p>また、保存カルテを作成するとともに、長期的に保存環境を整備することが望ましい。</p>
	季節	温度	湿度																																																			
本館	夏期	26 ± 0.5	52% ± 3%																																																			
	冬期	20 ± 0.5	60% ± 3%																																																			
工芸館	夏期	26 ± 1	60% ± 5%																																																			
	冬期	22 ± 1	60% ± 5%																																																			
金工室	夏期	25 ± 1	50% ± 5%																																																			
	冬期	18 ± 1	50% ± 5%																																																			
	季節	温度	湿度																																																			
本館	夏期	20 ± 0.5	55% ± 3%																																																			
	冬期	20 ± 0.5	55% ± 3%																																																			
工芸館	夏期	25 ± 1	60% ± 5%																																																			
	冬期	18 ± 1	60% ± 5%																																																			
金工室	夏期	25 ± 1	50% ± 5%																																																			
	冬期	18 ± 1	50% ± 2.5%																																																			
<p>(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。</p> <p>緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。</p> <p>伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。</p> <p>(3)-2 国内外の美術館等の修理、保存処理の充実に寄与する。</p>	<p>修理の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(3) 収蔵品修理</p> <p>[本館]</p> <p>平成13年度は、常設展示や貸出に備えて早急に修復措置を要する作品の中から、日本画4点、洋画2点、水彩・素描ほか15点、版画4点、彫刻3点の修理を行った。</p> <table border="1" data-bbox="1110 814 1914 1092"> <thead> <tr> <th>件名</th> <th>修復者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>田辺三重松作品修復</td> <td>渡辺健一</td> </tr> <tr> <td>「岸壁」小松均筆 修理</td> <td>(株)半田九清堂</td> </tr> <tr> <td>彫刻「キアロスクロー」ネオパリエ新規製作</td> <td>多田美波研究所 多田美波</td> </tr> <tr> <td>彫刻「キアロスクロー」研磨</td> <td>多田美波研究所 多田美波</td> </tr> <tr> <td>「2.5mの犬」修復作業</td> <td>ユミコチバアソシエイツ(有)</td> </tr> <tr> <td>日本画「ダイオゼニス」他修復</td> <td>(株)半田九清堂</td> </tr> <tr> <td>「スーダンの少年」修復</td> <td>(有)山領絵画修復工房</td> </tr> <tr> <td>「笑えぬ事実」他18点修復</td> <td>(有)山領絵画修復工房</td> </tr> <tr> <td>「メキシコ静物」修復</td> <td>(有)山領絵画修復工房</td> </tr> <tr> <td>昆野恒作品修復</td> <td>(有)山領絵画修復工房</td> </tr> </tbody> </table> <p>[工芸館]</p> <p>工芸館においては、陳列等に比較的繁多に活用され、早急に保存修復の措置が必要となった戦後の伝統工芸の作品の中で、漆工14点の修理を行った。</p> <table border="1" data-bbox="1110 1207 1914 1270"> <thead> <tr> <th>件名</th> <th>修復者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>「曲輪造彩紅盛器」他13点修復</td> <td>(株)目白漆芸文化材研究所</td> </tr> </tbody> </table>	件名	修復者	田辺三重松作品修復	渡辺健一	「岸壁」小松均筆 修理	(株)半田九清堂	彫刻「キアロスクロー」ネオパリエ新規製作	多田美波研究所 多田美波	彫刻「キアロスクロー」研磨	多田美波研究所 多田美波	「2.5mの犬」修復作業	ユミコチバアソシエイツ(有)	日本画「ダイオゼニス」他修復	(株)半田九清堂	「スーダンの少年」修復	(有)山領絵画修復工房	「笑えぬ事実」他18点修復	(有)山領絵画修復工房	「メキシコ静物」修復	(有)山領絵画修復工房	昆野恒作品修復	(有)山領絵画修復工房	件名	修復者	「曲輪造彩紅盛器」他13点修復	(株)目白漆芸文化材研究所	<p>A</p> <p>傷みの著しい日本画、洋画、版画、彫刻等42点を修理するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>修理報告書を作成しデータベース化することは、美術作品を再修理する際の貴重な記録となるため、積極的に取り組むことが望ましい。</p> <p>また、多くの美術作品が修理を必要とする中で、中・長期的な修理計画を立てることが望ましい。</p>																								
件名	修復者																																																					
田辺三重松作品修復	渡辺健一																																																					
「岸壁」小松均筆 修理	(株)半田九清堂																																																					
彫刻「キアロスクロー」ネオパリエ新規製作	多田美波研究所 多田美波																																																					
彫刻「キアロスクロー」研磨	多田美波研究所 多田美波																																																					
「2.5mの犬」修復作業	ユミコチバアソシエイツ(有)																																																					
日本画「ダイオゼニス」他修復	(株)半田九清堂																																																					
「スーダンの少年」修復	(有)山領絵画修復工房																																																					
「笑えぬ事実」他18点修復	(有)山領絵画修復工房																																																					
「メキシコ静物」修復	(有)山領絵画修復工房																																																					
昆野恒作品修復	(有)山領絵画修復工房																																																					
件名	修復者																																																					
「曲輪造彩紅盛器」他13点修復	(株)目白漆芸文化材研究所																																																					
<p>2 公衆への観覧</p> <p>(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。</p> <p>(1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。</p> <p>(1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。</p> <p>なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図ると</p> <p>(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。</p> <p>(1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。</p>	<p>展覧会の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>[本館]</p> <p>平成13年度は増改築工事に伴い9ヶ月間休館したことから特別展を1回開催した。また、年度末からは放送会社と共催展を1回と、これにあわせて常設展を開催した。また、写真展として所蔵作品展を1回開催した。</p> <p>[工芸館]</p> <p>常設展を4回、特別展1回、京都国立近代美術館と共同主催事業として交換展1回、デザイン展として所蔵作品展を1回、特別展1回を開催した。</p> <p>なお、巡回展は京都国立近代美術館及び国立国際美術館で、優秀映画鑑賞会はフィルムセンターで開催した。</p> <p>当館の常設展示は、明治から現代までの近代日本の美術の流れが俯瞰できるよう構成している。増改築工事による施設の充実により、日本画等慎重な管理が必要とされる作品を洋画などとともに年代順に展示できることとなったことや会場を大きくいくつかの章立てにすることにより、来観者に分かりやすい展示に心がけた。また、平成13年度からは、戦後以降の日本美術の展示スペースを増やすなど展示構成の見直しを行った。</p>	<p>B</p> <p>広く国民に優れた美術作品を観覧する機会を与えるため、国民の関心に応えたものや学術的意義の高いものなどバランスに配慮しながら、常設展、企画展6回を開催し、目標入館者数以上の実績を上げるなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>入館者に対するアンケート調査の結果では、概ね8割の肯定的な回答を得ており、展覧会に対する満足度は高かった。</p> <p>なお、広報活動については、さらに充実を図る必要がある。</p>																																																		
	<p>本館常設展</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>入館者数：594人</p>	<p>B</p>																																																		
	<p>入場者数</p>	<p>650人以上 450人以上650人未満 450人未満</p>																																																				

(1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。

なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。

また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。

(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

写真再発見2	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	『写真再発見』のシリーズは当館の所蔵品によるもので、写真がもたらすもう一つの眼を気軽に味わってもらうことを企図した、写真入門的な意味あいをもった展覧会である。今回は2回目で、「ヒト」、「モノ」、「場所」の三つのテーマから展覧会を構成したが、テーマの立て方をできるだけ平易になるようにしたほか、パンフレットに章解説を掲載したり、解説プレートに掲示するなどした結果、観覧者に理解されやすい展示になり好評を得た。しかし、この種の所蔵品を中心とした展示は、特段新しい動向を紹介したり、新しい視点を提示したりするものとは異なり、話題性に欠けるためか、観覧者の少ないことが今後の課題であり、広報のあり方、解説の仕方等に更に工夫をしたいと考えている。	A	話題になりにくいテーマだが、これまで東京国立近代美術館が収集した成果を企画展として公開した、写真展の1つの典型として評価する。特に小冊子の解説は解りやすい内容で、展覧会を格調高いものとすることに貢献した。
入場者数	2,640人以上 1,848人以上2,640人未満 1,848人未満	入館者数：3,118人	A	
未完の世紀 20世紀美術がのこすもの展	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	美術館のリニューアル・オープンの告知も兼ねて、ポスターを交通機関に掲出したり、ホームページ・情報誌への掲載、リリースの配布などを行って、従来以上に広報に力をいれたこと、新設されたレストランが話題を呼んだこと、会期中にNHKの「日曜美術館」が本展に取材した番組を制作放映したことなどもあって、予想を上回る反響を得た。企画についても一定の評価を得たと考えている。本展の構成にあたっては、既存の美術史を前提にして20世紀芸術の主要な流れを示すことを控え、より一般的な歴史区分で20世紀を輪切りにし、それぞれの時代の美術の多面性を提示して、歴史的な展開に幅を持たせた展示を試みた。このことによって、観客それぞれに少なからぬ発見があったことが、大方の評価を得ることにつながったと考えている。壁に沿って歴史的に整然と進むのではなく、400点近い作品を8つのブロックに区分した展示には、会場が倉庫のようだという声も聞かれたが、この100年の美術の目まぐるしいほどの変貌ぶりや多様な表現から、創造へのエネルギーを感じとられた方には、会場からひとつの肯定的な力を受取ってもらえたようである。ただ、8ブロックのそれぞれが、個々のテーマをもった展示であり、その意味では8つの展覧会の集合体と言っても過言ではないこの全館陳列については、一度で見る限度をこえていたとの指摘もある。そのため、関心の高い人たちのなかには二度三度と来館した人も少なくなく、今後はこうした人々には入館料の軽減等の便宜も必要かと考えている。おおむね20世紀の美術を対象とする当館としては、準備の段階からこの展覧会を、リニューアル後の常設展示のありかたを検討する機会ともとらえて取り組んだが、その点でも得たものは少なくなかった。従来常設展示が単線的な美術史になりがちなことへの見直しは、この展覧会の展示が生み出した肯定的な力によって、ひとつの方向性を与えられた感があり、当館の展示、とりわけ今後の常設展示を考える上で示唆を得た。今回のような展示ができるくらいの奥の深いコレクションをめざし、その充実に努めることが館の責務であるとの認識を新たにした。また、この展覧会は、美術を美術史の枠にとどめず、20世紀文明の歴史的現実のなかで見ていこうという考えをもって企画したが、その解説が不十分であったことを反省している。この外、キャプションに材質を明記してほしいとの声も多く寄せられ、改善を図ることとした。アンケート結果：80%の肯定的意見があった。	A	東京国立近代美術館本館のリニューアル・オープン記念として、美術館の全ての展覧会場を使用した意欲的なものであり、企画・内容ともに充実した見ごたえのある展覧会であった。
入場者数	51,900人以上 36,330人以上51,900人未満 36,330人未満	入館者数：74,058人	A	
カンディンスキー展	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	抽象芸術の先駆者ワシリー・カンディンスキーは20世紀を代表する画家のひとりであり、その強烈な色彩による表現によって、知られている。ロシア、ドイツ、フランスにその足跡を残すカンディンスキーの今回の展覧会は、彼がミュンヘンとモスクワを舞台に、徐々に抽象の道へと踏み込んでいった1900年から1920年までの期間に焦点をあて、その作風の変貌ぶりや画面のはしばしにまでみなぎる生き生きとした力を体感してもらうことを目的として開催されたものである。幸運にも、今回、ロシア連邦内美術館と旧ソ連諸国の各美術館から出品されることになった74点は、ほとんどが日本初公開であり、また世界的に見ても目にする機会に限られてきた多くの重要作品を含んでいる。今回何より特筆されるべきは、カンディンスキー自身が生涯彼の芸術の集大成として位置付けていた「コンポジション」シリーズの頂点をなす「コンポジションVI」(1913年、エルミタージュ美術館蔵)と「コンポジションVII」(1913年、トレチャコフ美術館蔵)の2点がともに出品されることであり、この2点は彼のミュンヘンにおける抽象絵画探求の到達点といえ、2m×3mという巨大な画面の中、さまざまな形が、明るく鮮やかな色彩に輝きながら乱舞する様はまさに壮観といえる。本展は、ロシア連邦と旧ソ連諸国の美術館に所蔵されている作品のみ74点によって構成されたが、これまで世界各地で開かれた多くのカンディンスキー展が、ロシア内の作品が出品されにくいためいずれも彼の画業の完全な紹介がなされたとはいえないものとなっていた。当館では1987年にもカンディンスキー展を開催しており、2度目となる今回の展覧会により、カンディンスキーの画業を網羅的に紹介できたものと考えられる。	A	平成14年5月26日まで開催する展覧会であり、平成13年度末の時点では実績が十分に把握できないため平成14年度に評定する。
入場者数	6,000人以上 4,200人以上6,000人未満 4,200人未満	入館者数：6,598人	A	
工芸館常設展	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	工芸館は独立行政法人化を機に職掌分担を、素材別(陶磁係、漆工係、染織係、金工係)から、実際の仕事内容の機能別(工芸係、デザイン係、展示係、教育・資料係)に変更した。このこともあって、常設展の展示作品の選別も各担当ごと素材別に行われていた従来の方法を、歴史意識を持った作品選択作業へと変更した。美術館の基本である常設展示の企画には、常に歴史性を持つこと、また、明確な意思を持つことが要求されると考える。このことはまた、工芸の近・現代史を築いていく調査・研究活動にも要求されるものと考えている。このような考えに立って次年度以降の工芸館の常設展示は、歴史展示、近代工芸名品展、所蔵品を中心に何らかのテーマを設けて構成した展示、以上三つの性格をそれぞれに打ち出した展示を行っていきたい。アンケート結果：80%の肯定的意見があった。(「近代工芸とデザインの東西」)	B	所掌分担を陶磁・漆工・染織・金工の素材別から工芸・デザイン・展示・教育資料の機能別に変更したことに伴い、展示の構成に歴史意識を持たせ国民により解りやすい展示へと改善した。質の高い収蔵品を持ち、魅力ある展示とするよう努力しているが、集客での効果が上げられておらず、広報活動の検討が必要である。
入場者数	27,000人以上 18,900人以上27,000人未満 18,900人未満	入館者数：18,865人	C	
現代ポーランド・ポスター展	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	戦後のグラフィックデザインの領域において特異な存在として注目されてきたポーランドのポスターの所蔵品による展示で、日本ではほとんど紹介されることのない、稀な機会であった。にもかかわらず見込んだほどの入館者を得られなかったことは、広報活動の不足に起因するものと考えている。今後は所蔵作品展の普及広報のあり方を見直し、その充実に努めたいと考えている。	B	日本でほとんど紹介されていないポーランド・ポスターを取り上げた大変意義のある展覧会であった。今後は、多くの人々の関心を呼ぶよう展覧会の魅力を訴える積極的な広報活動が必要である。

		入場者数	780人以上	546人以上780人未満	546人未満	入館者数：763人	B	
	1930年代日本の印刷デザイン - 大衆社会における伝達	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。				この展覧会は、これまでほとんど省みられることのなかった1930年代のグラフィックデザインに焦点を当てたものである。それを「踊り出す文字」、「社会生活の標語化」、「グラフィズムの新感覚」、「商品化される市民生活」という4つの視点から探り、近代社会に登場した大衆にヴィジュアル・デザインがいかにして訴えかけたかという観点からデザインの意味を問うた。この時代には、大衆的なレベルにまで伝達的手段としてのグラフィックデザインが浸透し、具体的には、チラシ、リーフレット、入場券などの小さなメディアにまで伝達のためのデザインという思考が広がっていく。デザインを図柄、文様、色彩などの造形的観点にとどまらず、コミュニケーションの手段という、より社会的な視点を持つことによって、展覧会の内容により広がりを持たせることができたと考えている。 工芸館では日本のグラフィックデザインについてはこれまで、デザイナー個人の業績に焦点を当て、まず現代の代表的デザイナーの展覧会、次いでグラフィックデザイナーのパイオニアである杉浦非水の回顧展(2000)を開催した。今回は視点を変えて、1930年代という時代に焦点を当ててみたのであるが、今後は、デザイナー個人の仕事に焦点を当てたもの、ある特定の時期に焦点を当てたものなど、複数の視点を持ち、展覧会内容を豊かにしていくことを検討してみたい。	A	これまで省みられることのなかった1930年代の印刷デザインを取り上げた大変意義のある展覧会であった。 今後は、多くの人々の関心を呼ぶよう展覧会の魅力を訴える積極的な広報活動が必要である。
		入場者数	2,310人以上	1,617人以上2,310人未満	1,617人未満	入館者数：3,169人	A	
	現代の布	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。				「用」をもたない工芸作品の出現によって、今日ほど工芸のアイデンティティーが問われていることはない。このことは「布」の作品についても言えることで、これまで、布は単なる素材、フォルム以前の単なる材料とみなされてきた。本展では、第一に布を作る過程そのものを表現として捉えている作家、第二に自ら制作した布を様々な加工し作品を制作する作家、すなわち布制作と布加工を連続した作品制作の過程としてとらえている作家の、二系統に属する作家の作品を展示し、その意味を捉え直そうとした。これまでの現代染織展、染織造形展、あるいはファイバー・ワーク展といった展覧会では、表現内容や作り出したい形を作り出す手段としてのみ扱われてきた。これに対し、今回の展覧会は、布を作り上げていく過程、すなわち糸を用いて織り進んでいく過程で作られる形、さらにその形を加工してつなげ、組み上げて出来上がる形(ないし空間構成)のあり方を問おうとしたのである。今回の展覧会を通じて、布そのものの美、布・染・織にもっと関わることによって生み出される造形の独自性、存在意義をまがりなりにも示すことができたとも考えている。 今後は、このような視点を他の素材、技法の分野に広げていきたいと考えている。	A	布の造形を明確な2つの視点でとらえた着想が良く、学術的にも質の高い展覧会であった。 今後は、多くの人々の関心を呼ぶよう展覧会の魅力を訴える積極的な広報活動が必要である。
		入場者数	6,600人以上	4,620人以上6,600人未満	4,620人未満	入館者数：7,534人	A	
	京都の工芸 1945 - 2000	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。				この展覧会は、京都国立近代美術館の平成13年度特別展として企画されたものを引き継ぎ、交換展として当工芸館で開催したものである。両展示場の広さの違いから、工芸館での展示は、京都の場合の3分の2に縮小し、それを前・後期に分けて展示した。そのため、工芸館の観覧料を半額以下に設定した。また、作品の選定等に当たっては、主題となる1945年から2000年の京都の工芸が理解できるよう工夫したが、前・後期の2回にわたる展示は観覧者には不都合なことであり、今後、交換展の場合の展覧会規模の調整は必須の検討課題と考えている。	A	京都国立近代美術館で実施した特別展の交換展であり、内容的にも優れたものであった。 ただし、出品作品に対して展示面積が狭いことから、一つの展覧会を、前期・後期と二回に分けて展示するなど、課題が残った。
		入場者数	8,350人以上	5,845人以上8,350人未満	5,845人未満	入館者数：9,012人	A	
(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。	貸与の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。				[本館] 増改築工事による本館の休館中は、日本画・版画の一部および寄託品の大部分をフィルムセンターの作品収蔵庫に収容し、一部を民間の倉庫に預けた。そして、それ以外の所蔵品はすべて、全国のいくつかの美術館に長期貸与のかたちで保管してもらった。そのため平成13年6月1日から14年5月末日まで、すでに貸与の回答をしたものを除き、貸出し業務を原則停止した。 貸出し件数78件、2,607点のうちには、上記のような長期貸与として、東京芸術大学853点、愛知県立美術館746点、新潟県立近代美術館548点、千葉市美術館163点が含まれている。貸与作品のふりわけは、貸与先館のコレクションの特色及び希望を考慮して行った。この方法により、貸与先館の展示作品として活用していただくとともに、民間の倉庫を借りることでの多額の出費を免れた。 [工芸館] 平成13年度は、国内については全49件、165点の作品貸出を行った。国外については1件、5点の貸出を行った。	A	美術作品の効果的活用を図るとともに、他館との相互活用を促進するため、美術作品2,501点を貸与するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 今後も、貸与等の要望が増えると思われるが、収蔵品の保存状態に留意し、展覧会の趣旨を考慮しながら、幅広くその要望に答えることが望ましい。
3 調査研究 (1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。 収蔵品に関する調査研究 美術作品に関する調査研究 収集・保管・展示に関する調査研究 美術史、美術動向、作者に関する調査研究 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等 (1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。	調査研究の実施状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。				(1) 調査研究の実施及び成果の発表 [本館] 『20世紀美術に関する総合的調査研究』 本研究は、リニューアル・オープン展「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展の開催を目的に行われたもので、美術館本館だけでなく、工芸館、フィルムセンターを含め、全館あげて取り組んだ点に大きな意味があった。ここではこれまでの蓄積のうえに、単なる様式史としての美術史を越え、文化状況や社会情勢を視野に入れることで、従来の近代美術史の枠組みを再検証し、それを展覧会だけでなくその後の常設展示に反映させることが課題であった。この研究の結果、「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展では美術や工芸だけでなく、映画上映をも含めた総合的な展示が可能となり、20世紀美術の多面的な性格を浮かびあがらせることができた。 また、カタログにはテキストや章解説のほかに、さまざまな切り口から美術をみたコラムはさみ、美術を語る語り口に工夫をこらした。この総合的な調査と検証の結果は、まず「未完の世紀」展の展示とカタログの刊行において示されたが、今後も継続して、その成果を随時常設展示「近代日本の美術」に反映させていく外、コレクション展示のたえざる見直しに活かしていきたいと考えている。 研究者 本館・工芸館の学芸職員全員 展覧会「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」のカタログに、テキスト、時代区分の章解説、コラムを分担執筆。 市川政憲「20世紀文明と文化のはざまに」同展カタログのテキスト 松本透「戦後美術の同時代性について」同展カタログのテキスト 鈴木勝雄『現代の眼』532号で同展の特集を編集	A	収集・保管、公衆への観覧、教育普及の事業など美術館活動の推進を図るため、20世紀美術に関する総合的調査研究、ロシアにあるカンディンスキーの作品に関する調査研究及び明治時代の工芸概念の胚胎と変遷に関する調査研究等を実施するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。また、科学研究費補助金の獲得に努め、調査研究の充実を図った。 調査研究については、今後も幅広く外部研究者との交流を促進し、積極的に取り組むことが望ましい。 なお、研究成果については、図録等の刊行物のみならず、学会等においても幅広く積極的に発表することが望ましい。

(2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。
また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

『小倉遊亀に関する調査研究』

平成13年度は、小倉遊亀の画業の全体について資料収集を行った。とりわけ、その絵画に見られる近代的な性格の原点を探る意味で、これまでいくつかの作品をのぞいてさほど重視されなかった戦前期の画業について、昭和戦前期のモダニズムとの関連に注目しつつ、滋賀県立近代美術館と共同で、業績や出品作品の調査、および関係資料の収集に努めた。

研究者 尾崎正明、古田亮
調査継続中。平成14年度の展覧会で成果発表

『ロシアにおけるカンディンスキー作品の調査研究』

本研究は、これまで正確な実態が知られていなかったロシア国内、とりわけ地方美術館所蔵のカンディンスキー作品を精密に調査研究し、これまで主として、アメリカ合衆国と西ヨーロッパ諸国に所蔵される作品のみに準拠して行われてきたカンディンスキー研究を補い、修正することを最終的な目標としていた。今回、当館のスタッフが二度にわたってロシアおよびグルジア共和国(旧ソ連邦)に赴き、作品の調査及び資料の収集を行い、また美術館スタッフらと意見交換を行った。「カンディンスキー展」において、これらロシア所蔵の重要作品の8割近くにあたる74点の作品の出品が実現し、実作の精査が可能になったことは、何よりも大きい成果であった。とりわけ、これまで見る機会の限られていた、カンディンスキーのロシア時代の作品(1914~1921年)の中核部分を同時に比較検討し得たことで、従来過小評価されてきたこの時代の作品に、独自の様式的展開を見出す端緒を得たと考える。

研究者 中林和雄、鈴木勝雄
中林和雄「カンディンスキー、時代の子」カンディンスキー展カタログのテキスト
鈴木勝雄「カンディンスキーとロシア - 1913年の戦略」同展カタログのテキスト

『明治大正期におけるロマンティズムの水脈の検証』

新しい美術様式の摂取も異文化交流の一形態ではあるが、異文化交流というものをもっと幅広くとらえ、文化や社会の底流を探ると、明治以降の美術には、表面的な美術様式によって区分された時代の相では明らかにされることのなかったロマンティックな創造のエネルギーを湛えたひとつの地下水脈につき当たる。本研究は、これまでの美術史では、時代の潮流からはぐれ、孤立的に異端視されてきた青木繁、中村彝、村上華岳、関根正二、村山槐多といった芸術家たちによって育まれたロマンティックな地下水脈について考察しようとするものである。平成13年度は、久留米の石橋美術館と共同して、具体的に作例にあたりながら、この水脈の切り口として、(1)神話的混沌、(2)海のフォークロア、(3)他者としてのインド、(4)東西交渉、あるいは奈良時代の発見、(5)自画像の画家と礼拝像、(6)恋愛あるいは永遠の女性、(7)晩年あるいは故郷という作業仮説を設定するところまで、研究を進めた。

研究者 市川政憲、蔵屋美香
継続中。平成14年度の展覧会で成果発表

『海外における近代日本美術の研究成果・態勢の調査並びに内外の共同研究の促進』

(科学研究費補助金、研究代表者 松本透)
本研究は、平成11年度以来の継続研究である。海外における近代日本美術研究の現状についての基礎調査の一環として、平成13年度は、ドイツの日本美術研究家イルムトラウト・シャルシュミット=リヒター氏を招聘し、平成10、11年に、同女史をゲスト・キュレーターとして当館ほかの協力のもとにドイツ2都市で開催された「もう一つの近代 日本の絵画 1910 - 1970」展の反響や受容について報告を受け、今後の海外における近代日本美術の紹介のあり方について協議した。また、別途来日した国立エルミタージュ美術館アジア部アレクセイ・ボゴリューボフ氏(日本美術担当学芸員)を招いて研究会を開き、ロシアにおける日本美術研究の現状・態勢について口頭発表いただき、意見交換を行った。招聘者からの報告等をもとに、引きつづき文献その他の収集に努める。

研究代表者 松本透
平成13年度科学研究費補助金研究成果報告書

(2) 他機関の研究者との共同研究で次の研究を行った。

『展覧会場用映像ソフトについての調査研究』

凸版印刷との共同研究による本研究では、今回『未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの』展にあわせ、最新の映像ソフトをもちいたコンテンツを制作することができた。このソフトは展覧会の各章の簡単な内容説明と代表的な作品からなるもので、展覧会の構成と趣旨をわかりやすく解説しており、鑑賞への導入ガイドとして機能したものをと考える。また、このソフトは多少の改編を加えた上で、その後の常設展示用の解説ソフトとしても使えるようになった。

研究代表者 尾崎正明

[工芸館]

(3) 工芸館では展覧会開催に向けての調査・研究と、より長期的な展望に立った近代工芸研究の二つの視点から以下の調査・研究を進めている。

テーマとしては、次の四つである。

現代的造形表現としての布の可能性についての調査研究

研究者 今井陽子
「現代の布 - 染と織の造形思考」展カタログのテキストを執筆
『現代の眼』530号で特集を編集。
「今日の染織造形」、大阪芸術大学通信教育教科書『繊維基礎実習』

明治時代の工芸概念の胚胎と変遷研究のための資料調査

研究者 金子賢治、北村仁美
金子賢治「海外に渡った明治の染織」『ドレスタディー』40号
北村仁美「クリストファー・ドレッサーへの視点」『現代の眼』527号

			<p>戦後工芸運動確立期の研究 研究者 金子賢治、諸山正則、今井陽子、木田拓也 金子賢治「現代陶芸の理論 - 西洋世界と日本」『現代の眼』529号 諸山正則「漆工品の補修と大場松魚《金銀平文鶴文箱》」『現代の眼』531号 「河井寛次郎の木彫」千葉市美術館展覧会カタログ 今井陽子「友禅における染の現代 - 森口華弘の作品をめぐる」『現代の眼』532号 木田拓也「昭和の桃山復興(三) 備前・金重陶陽」『陶説』586号</p> <p>1930年代日本のポスターの主要作家、作品の調査 かつての御道具的な骨董趣味的工芸観からはなれ、近代工芸を近代的な造形美術として捉え直すことは、工芸のアイデンティティーがなくてあいまいになっている今、ますます重要になっている。このような認識の下に平成13年度の調査・研究は、次の三つの時期の工芸観に焦点を当てた。一つは「用」を持たない工芸が出現した時期であり、また、現代工芸の基本的な考え方が成立した時期でもある1950年代から60年代の工芸観について()。第二は、第一のルーツとなった明治時代の近代的工芸観の成立と展開について()。第三は第一から生み出されてくる今日の工芸的造形の独自性を捉えようとする制作活動について()。</p> <p>(4)「現代の布」展開催によって、糸・布・織りという優れて工芸的な素材・技術、それが統合され、一定のプロセスを通して何かを作り出し表現するという一連の流れを検証することで、工芸的造形の独自性を捉えることを試みた。明治の産業工芸から近代的な意味での個人作家が登場し、それが戦後の工芸界を生み出していく過程の調査・研究は今後も継続していく考えである。</p> <p>(5)デザイン関係ではこれまで亀倉雄策、福田繁雄ら戦後のデザイナー、また大正から昭和初期に活躍した杉浦非水などの、個別的な作家研究を行ってきたが、今回は少し視点を変えて、1930年代という時代のグラフィックデザインをテーマとし、それを展覧会に結びつけた。デザインを単に様式史的な点からのみ見るのではなく、より社会的な視点を取り入れ、本来の伝達という側面から見直しを試みた。30年代という、社会の大衆化と戦争の足音が近づく、時代とデザインの関連を研究することで、デザイン本来の役割である伝達ということをより鮮明に捉えていくことができると考えている。</p> <p>(6)東京藝術大学など、他組織の研究者との共同研究で次の研究を行った。</p> <p>研究者 樋田豊次郎 「大衆社会におけるデザイン」「1930年代日本の印刷デザイン」展カタログのテキスト</p> <p>『明治・大正における図案集の研究 世紀末デザインの移植とその意味』 (科学研究費補助金、研究代表者 樋田豊次郎) この研究は、明治後半から、大正、そして昭和戦前までに出版された図案集を網羅的に発掘し、日本の近代美術の形成に与ってきた「民意」を捉えようとするものである。「図案集」とは、工芸職人や大工、地場産業のあいだで製作下図として利用された本や雑誌などの刊行書である。調査地は東京芸術大学付属図書館、東京国立博物館資料館、芸粋堂(うんそうどう)その他の9ヶ所で、図案集の総数は約1,600点である。今日ではあまり話題にもならない図案集は片々たる資料に過ぎないが、そのことがかえって、政府や学校の方針によって形成された近代美術よりも、庶民が自ら求めた近代美術の生の姿を推測させる手掛かりになると考えた。多量の図案集を整理分析し、「古典的図案の復興」、「美術書出版の歴史」、「京都における図案の変遷」、「西洋で出版された図案集の受容」、「工業(工芸)学校における図案集」、「アール・ヌーヴォーの受容」などの視点から研究した。図案集には西洋デザインを紹介したものや、日本的意匠を回顧したものもあったが、これらの研究を更に進めることで、異文化を受容したり、古典文化を再認識する際に、当時の庶民がどのようなアプローチを見せたのかということが浮かび上がってくるものと期待している。</p> <p>研究代表者 樋田豊次郎 平成13年度科学研究費補助金研究成果報告書</p>		
	客員研究員 招聘人数		平成13年度はフィルムセンター及び国立西洋美術館で招聘した。	-	
<p>4 教育普及</p> <p>(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。</p> <p>(1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。</p>	資料の収集及び公開(閲覧)の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>平成13年度には、次のような各教育普及事業を実施した。</p> <p>(1) 資料収集及びレファレンス機能の充実 本館及び工芸館のアーカイブライブラリーについては平成13年度中に合わせて13,497冊の収蔵を図り、平成13年度末現在の総所蔵冊数は69,629冊となった。 平成13年度中に行った資料の交換件数は国内機関との間で265件、国外機関との間で206件であった。</p> <p>(2) 資料閲覧室等の整備 本館の改修に併せ、アーカイブライブラリーと情報コーナーを新設し、広く一般にも美術情報を提供できるようにした。レファレンスの機能性を考慮し、美術館に関わる一般的な情報や、美術についての初歩的な疑問について調べる情報コーナーと、より専門的な知識を得るためのアーカイブライブラリーとに分けたことで、利用者のニーズにより適切に対応し、美術への一層の興味を喚起することができると考えている。ただ開室して日も浅く、こうした施設が設置されたことが一般に知られていないくらいがあり、今後一層広報に力を入れていきたいと考えている。</p>	A	<p>新たに美術作品に関する図書を13,497冊を収集し、新設したアーカイブライブラリーにおいて一般に公開するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。アーカイブライブラリーを研究者等に対する日本近代美術研究の中心的な資料室として整備することが望ましい。今後も、4館の資料を登録及び検索できる現代的システムの開発や広報の強化を図り、より一層、資料を活用することが望ましい。</p>
<p>(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。 また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。</p>	児童生徒を対象とした講座等の実施状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>(3) 児童生徒に対する教育普及事業の実施 [工芸館] 児童生徒に美術や工芸に対する関心を一層高めてもらうため、例年通り、夏休み期間中に「鑑賞教室」を開催した。平成13年度は本館が工事中のため、本館の所蔵品を活用しながら、工芸館で行われた「近代日本の美術と工芸」展を「くらしをいぞる」というテーマの下、鑑賞教室向けに編成して実施した。鑑賞ポイントを付した子供向けセルフガイドを無償で配布するとともに、また工芸作品に触れる体験コーナーを設けたが、普段触れることのできないものを手にとったり、制作の工程なども学ぶことができたことで、子どもばかりでなく、引率の母親たちにも好評であった。当館では、夏休み以前にこの種の企画の開催情報を学校あてに送っているが、残念ながら参加者のほとんどが親子連れで、学校単位の参加はなかった。 当館では、教育普及事業として一般の来館者向けにギャラリー・トークを、また、児童生徒むけに夏休み鑑賞教室を毎年度の計画に織り込んで行ってきた。これらはいずれも生涯学習時代に対応し、また、学校の土曜日休業等の社会の変化に対応するものである。今回の本館の改修工事で、アーカイブライブラリーと情報コーナーを新設したのも、同様の認識に立って社会の要請に対応したものである。</p>	A	<p>教育普及の取組みの充実や学校教育における美術館の活用の推進を図るため、限られた人員と予算で積極的に小中学生向け鑑賞教室を実施し平成12年度以上の実績を上げるなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p>

			<p>[本館・工芸館]</p> <p>美術館の教育普及事業として今日求められるところは、大別二つのサービスであると考えている。一つは、美術館の情報関連施設の利用提供であり、施設を利用して自ら学ぼうとする来館者を対象としたものである。こうした要請に対しては、アートライブラリや情報コーナーなどレファレンス機能の充実を図ることで対応することになると考える。もう一つは、鑑賞教室やギャラリー・トーク、講演会、さらにはスタッフによる説明等を期待するもので、これは、美術館側が組んだプログラムに参加して学ぼうとする来館者を対象としたものと言える。</p> <p>このうち、前者の自由に自分で学ぶ人々に対するレファレンス機能の備えは、当館としては、今度の工事でまずは整ったものと考えている。一方、後者の対象者に対しては、現在のところは事前に連絡のあったグループに限って、可能な範囲で対応しているが、十分に対応しているとは言えない。いわば美術館の方で時間を限定して行われるもので、現状は、来館の折に解説を希望する人は増えており、また、ニーズの多様化という点からも、できるだけ多く多様な機会を提供することが望まれるが、組織の規模からして、おのずから限界があると言わなければならない。今後どのように対応していくかは重要な課題と考えている。</p> <p>ところで、こうした随時の解説を希望する来館者が解説者に求めるところは、必ずしも作品に関する専門的情報ということではないと考えている。例えばギャラリー・トークなどに参加する来館者の場合にも当てはまるが、鑑賞体験について語り合い、語り合うなかで言葉にして、自らの体験を確認したいと思っている人々も多いように思われる。言い換えれば、鑑賞体験について、コミュニケーションのとれるパートナーが望まれているということである。こうした期待には、美術に関心を持ち、美術館に社会参加の場を見出すボランティアの方が、美術館の専門家以上にふさわしいものとも考えられる。このような認識を持ちつつ、社会の要請をふまえて、次年度から、ボランティアを導入することを目途に、平成14年度中に、そのあり方を検討しつつ導入体制を整えたいと考えている。</p> <p>(事業の実施の詳細については実績報告書11ページ参照)</p>		
<p>(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。</p> <p>それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。</p> <p>また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。</p>	<p>講演会等の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(4) 講演会等の実施</p> <p>[本館]</p> <p>本館では「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展で講演会とギャラリー・トークを行った。講演会は展覧会の担当者がこの展覧会の内容や構成の意図について説明するもの、外部の研究者が日本の近・現代美術について違った角度から問題点を提起するものを各2回開催した。展覧会の性格上、20世紀についての歴史認識がないと理解が難しかったところもあったが、広い視野から20世紀美術を俯瞰してもらえ、有意義であったと考えている。その開催案内を、新聞、チラシ、ホームページ、会場等で広報に努めたが、残念ながら聴講者はあまり多くなかった。演者の決定が遅れ、周知期間が少なかったことも大きな原因と考えており、今後改善したいと考えている。ギャラリー・トークは今回の展覧会での注目すべき幾つかの事象や作品に焦点をあて、当館の学芸員や外部の専門家が会場内で作品に即しながら全8回にわたって行った。聴く人にとってはより具体性があり、興味をもちやすかったようである。そのせいかギャラリー・トークは予想外に多くの聴講者が集まって大変好評であった。今回は、夜間開館の周知のためにも、「イブニング・ギャラリー」と名付けて、金曜日の夜間開館の時間帯に行ったが、それでも聴講者以外の観覧の邪魔になる場合も若干あり、この点は今後ギャラリー・トークを実施してゆく上での検討課題であると考えている。</p> <p>[工芸館]</p> <p>工芸館では、例年通り常設展では当館研究官が、特別展では外部からも講師を招いてギャラリー・トークを行った。講演会と違って、作品そのものを前にして、聴講者と近接して話をする中で、一種独特のコミュニケーションの場が生まれることは、ギャラリー・トークならではの長所である。例えば、工芸の場合ももっとも多いのが「どんな技法で作られているのか」と言うことを細かく質問されることである。技法は工芸にとってもっとも基本的なことであり、その疑問に答えることは当館の重要な役割であるが、こうした質問にギャラリー・トークはすぐ答えられるということである。もちろん、言葉だけでは説明が難しい場合も多々ある。かつて外部講師である作家が材料、道具を持ち込んで解説したことがあったが、より分かりやすい解説のためには、ギャラリー・トークに加えて、デジタルカメラやノートパソコンの画像で技法の工程を示しながら作品解説をするなど、より有効な方法を工夫していきたいと考えている。</p> <p>なお、質問で次に多いのが「どう使うのか」というものである。近代工芸では必ずしも「用」を想定しないものが多数あり、特に戦後はその傾向が顕著である。こうした多様な工芸の歴史を解説していくことも当館としての重要な役割であるが、</p> <p>それには明確な歴史観を持つことが不可欠で、ここにも御道具的工芸観からの脱皮、近代工芸史の形成が急がれるところである。</p> <p>工芸館のスペースを考えると、現在の聴講者は少し多め(20数名というのが一番多いが、中には50名を越えた回もある)で、なかには講師の話が届かない場合や、他の観覧者の邪魔になる場合もあった。今後、ギャラリー・トークの持ち方としては、一回の聴講者の数をこれ以上増やすのではなく、開催回数を増やす方向で検討したい。またその際、何回かまとめてトークのテーマ、題目などを事前に広報することに留意したい。</p> <p>(講演会等の実施の詳細については実績報告書13ページ参照)</p>	<p>A</p>	<p>美術作品等の理解促進を図るため、限られた人員と予算で積極的に講演会やギャラリートークを実施し平成12年度以上の実績を上げるなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>また、講座等については、年齢・性別・学歴を問わず、幅広い国民各層を対象とするよう配慮し、その他の業務に支障を来たさない程度に充実を図ることが望ましい。</p>

		<table border="1"> <tr> <td>講演会等の回数 講演会等</td> <td>2回以上</td> <td>1回</td> <td>0回</td> <td>[本館]: 4回 計: 4回</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>ギャラリー・トーク</td> <td>13回以上</td> <td>9回以上13回未満</td> <td>9回未満</td> <td>[本館]: 8回 [工芸館]: 10回 計: 18回</td> <td>B</td> </tr> <tr> <td>講演会等の参加者数 講演会等</td> <td>183人以上</td> <td>128人以上183人未満</td> <td>128人未満</td> <td>[本館]: 328名 計: 328名</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>ギャラリー・トーク</td> <td>348人以上</td> <td>244人以上348人未満</td> <td>244人未満</td> <td>[本館]: 375名 [工芸館]: 241名 計: 616名</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>講演会等に対するアンケート結果</td> <td>80%以上</td> <td>56%以上80%未満</td> <td>56%未満</td> <td>アンケート結果: 80%の肯定的意見があった。 (「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」ギャラリートーク)</td> <td>A</td> </tr> </table>	講演会等の回数 講演会等	2回以上	1回	0回	[本館]: 4回 計: 4回	A	ギャラリー・トーク	13回以上	9回以上13回未満	9回未満	[本館]: 8回 [工芸館]: 10回 計: 18回	B	講演会等の参加者数 講演会等	183人以上	128人以上183人未満	128人未満	[本館]: 328名 計: 328名	A	ギャラリー・トーク	348人以上	244人以上348人未満	244人未満	[本館]: 375名 [工芸館]: 241名 計: 616名	A	講演会等に対するアンケート結果	80%以上	56%以上80%未満	56%未満	アンケート結果: 80%の肯定的意見があった。 (「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」ギャラリートーク)	A		
講演会等の回数 講演会等	2回以上	1回	0回	[本館]: 4回 計: 4回	A																													
ギャラリー・トーク	13回以上	9回以上13回未満	9回未満	[本館]: 8回 [工芸館]: 10回 計: 18回	B																													
講演会等の参加者数 講演会等	183人以上	128人以上183人未満	128人未満	[本館]: 328名 計: 328名	A																													
ギャラリー・トーク	348人以上	244人以上348人未満	244人未満	[本館]: 375名 [工芸館]: 241名 計: 616名	A																													
講演会等に対するアンケート結果	80%以上	56%以上80%未満	56%未満	アンケート結果: 80%の肯定的意見があった。 (「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」ギャラリートーク)	A																													
<p>(4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。</p> <p>(4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員(キュレーター)の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。</p> <p>(4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。</p> <p>(4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。</p>	<p>研修等の取組み状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(5) 他機関の研修への協力 平成13年度キュレーター研修を京都国立近代美術館で実施した。</p> <p>次のとおり、大学生の学芸員資格取得のための博物館実習等に協力した。 名古屋市立宝神中学校東京分散学習への協力 工芸館において4名を受け入れ。</p> <p>大学生の学芸員資格のための博物館実習への協力 工芸館において4名を受け入れ。 千葉県市原市立海上小学校の美術鑑賞教育への協力 工芸館において30名を受け入れ。 早稲田大学国際部プログラム「日本美術調査研究」への協力 工芸館において42名を受け入れ。</p>	<p>B</p> <p>美術館関係者等の人材育成及び人的ネットワークの形成を図るため、博物館実習生等を80名受け入れ、美術館の職場を体験する機会を提供するなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>学芸担当職員については、今後も、受入可能な人数の範囲内で積極的に取り組む必要がある。ただし、博物館実習生については、美術館側の負担にならないよう、受け入れ状況を常に見直す必要がある。</p> <p>なお、外国美術館の学芸員との交換研修なども検討する必要がある。</p>																														
<p>(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。</p> <p>また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。</p>	<p>広報活動の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(6) 出版事業等</p> <p>[本館] 展覧会に伴う図録発行について カタログは展覧会終了後、唯一資料として残るものである。その作成に当たっては、それぞれの研究成果を出来る限り反映することに努めた。同時に、多くの読者により美術に興味を抱いてもらえるような編集にも留意した。本館の「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展では、主要なテキスト2本と各章の章解説のほか、図版中に32本のコラムを加えて内容にふくらみをもたせることで、楽しみながら20世紀美術に興味をもってもらう工夫をこらしたつもりである。</p> <p>「カンディンスキー展」は、当館の研究員2名による論文のほか、ロシア科学アカデミー会員ドミトリー・サラビアノフ氏、ロシア美術史家新田喜代見氏による論考をも掲載し、カンディンスキーのロシアとの多面的なつながりを紹介できるように留意した。また、作品解説はロシア側からの視点も反映したものとなるよう、ロシアの美術館関係者との分担執筆とした。</p> <p>現代の眼 『現代の眼』は、年6回発行する当館の広報誌であり、これまで当館が開催する展覧会にあわせて特集を組み、カタログとは別の切り口で、館内外の見解を紹介してきており、平成13年度末で532号を数える。平成13年度は、本館が閉館中のこともあり、美術館の当面の課題やリニューアルに際しての問題などをテーマに特集を組み、美術館の考えを積極的に社会に発信することに努めた。『現代の眼』は現在、定期購読者の数が年々低落傾向にあるという問題を抱えている。その理由の一つは、専門的な記事と一般向けのガイドや紹介が混在して、美術館の刊行物としての性格があいまいなことにあると分析している。その対策として、読者対象を限定することもあるが、このことが望ましいことかどうか、もう少し検討する余地があり、本館の活動が通常に復する次年度1年間、現在の方針を維持しつつ、一年の間に、方向を明確にしたいと考えている。</p> <p>[工芸館] 展覧会カタログについて 工芸館では「現代の布」展、「1930年代の印刷デザイン」展カタログを刊行した。「現代の布」展カタログでは、布そのものに焦点をあてた展覧会ということもあって、特に布の魅力を引き出す写真撮影、図版構成に配慮した。「1930年代の印刷デザイン」展カタログでは、当館研究員のテキストの他に、当時の時代背景、並びに印刷技術について、それぞれの専門家の論考を掲載し、デザインと社会との関わりについて理解を深められるよう配慮した。</p> <p>専門誌への掲載 専門誌に所蔵品を取り上げた連載を展開し、広く公衆に対し、近現代工芸及び東京国立近代美術館の活動の周知に努めた。</p> <p>刊行物の名称 a 「平成12年度年報」 b 「東京国立近代美術館概要」 c 「独立行政法人国立美術館概要」 d 展覧会、企画上映に伴う図録の発行 企画展等 ア. 「1930年代 日本の印刷デザイン 大衆社会における伝達」 29×22.2cm/82P 本文: 大衆社会におけるデザイン(樋田豊次郎) 1930年代の日本の印刷技術(本多真紀子) 戦前日本社会運動の足あと 1930年代ポスターの背景(梅田俊英) 編集: 樋田豊次郎、諸山正則</p>	<p>A</p> <p>文化、美術作品及び国立美術館について国民の理解促進を図るため、展覧会図録、年報、「現代の眼」等を発行するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>より一層、国民に美術館活動が理解されるよう内容を工夫し、今後も積極的に実施することが望ましい。</p> <p>また、インターネットを積極的に活用した広報について検討することが望ましい。</p>																														

			<p>イ、「現代の布 染と織の造形思考」 28×22.7cm/96P 本文：「布」というかたち（今井陽子） 編集：金子賢治、今井陽子、北村仁美</p> <p>ウ、「京都の工芸[1945-2000]」 30×20cm/272P 本文：京都の工芸[1945-2000]（松原龍一） 編集：松原龍一、土岐加寿子、南野朋子</p> <p>エ、「未完の世紀」展図録 29.8×22.5cm/48P+280P 本文：20世紀文明と文化のはざまに（市川政憲） 戦後美術の同時代性について（松本 透） 編集：東京国立近代美術館（市川政憲，松本 透，尾崎正明，鈴木勝雄，保坂健二郎）</p> <p>オ、常設展等 「常設展 近代工芸の百年」 28×21cm/12P 本文：所蔵品でたどる近代工芸の百年（樋田豊次郎） 出品目録 「常設展 [近代の工芸] 1991-2000年の新収蔵作品から」 29.6×21cm/24P 本文：1991-2000年の新収蔵作品について（諸山正則） 図版 出品目録 制作： 印象社 「所蔵作品による近代日本の美術と工芸 暮らしをいどる」 28×21cm/12P 展示解説 出品目録</p> <p>「現代の眼」 第527号 4-5月号 特集：建築への / からのまなざし 第528号 6-7月号 特集：写真史研究の現在 第529号 8-9月号 特集：現代陶芸の現在地 第530号 10-11月号 特集：現代の布-染と織の造形思考 「現代の布」展によせて 第531号 12-1月号 特集：本館リニューアル 第532号 1-2月号 特集：未完の世紀-20世紀美術がのこすもの 「未完の世紀-20世紀美術がのこすもの」展によせて</p>			
<p>(1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。</p> <p>(5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。</p> <p>(5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。 また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。</p>	<p>収蔵品の情報デジタル化及びその活用状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(7) 作品データ等のデータベース化の推進 当館では、収蔵作品について文字情報、デジタル画像情報のデータベース化を行ってきたが、平成13年度は、本館の作品に関しては、文字データについては全収蔵作品の、画像データについては7割の入力を行った。工芸館の作品に関しては、文字データについては全収蔵作品の、画像データについては3割の入力を行った。また、画像情報については未入力部分の入力作業を進めるとともに、モノクロ・ネガから作成したデジタル画像については、今後財政の許す範囲で、カラー化を進めていく。工芸館については画像データの未入力部分が多く、引き続き入力作業を進める。デジタル画像の利用については、特に情報コーナー来館者システムでの表示のため、著作権者への許諾申請に着手した。許可が得られたものから順次公開してゆく予定である。</p> <p>(8) ホームページの活用 美術館の概要、企画展を含む活動一般、所蔵作品に関するデータ等の情報をホームページを活用して広く社会に伝えるとともに、ホームページは職員募集など事務的な活動にも幅広く活用した。アクセスの件数は189,924件（含むフィルムセンター）と、かなりの利用があったと判断している。また、小中学生に美術館に親しんでもらうために、所蔵作品を紹介する「子どものページ」を設けているが、こちらも多くのアクセスを得た。</p> <p>展覧会及び教育普及事業の多角的な展開に伴い、ホームページで提供すべき情報も格段に多くなり、ホームページからの情報収集も一般化している中、今後は今まで以上に迅速な内容更新を行うことが必要であると考えている。また、常設展示場での展示予定といった、何がいつ見られるのかという情報も含めた当館の所蔵作品情報の提供を、より充実させることも課題として考えている。 デジタル化した利用方法、有料提供等の取り組みについて検討中である。</p>	<p>A</p>	<p>文化、美術作品及び国立美術館について国民の理解促進を図るため、平成13年度末までに、文字情報については全て、画像については本館7割、工芸館3割のデジタル化を終了し、美術館情報についてホームページで公開するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>また、美術作品に関する情報のデータベース化にあたっては、標準化を検討するなど国民が簡便な方法でアクセス出来るシステムの開発を常に心懸けることが望ましい。</p> <p>美術作品がコンテンツの素材として注目される中で、著作権について慎重に取り組むことが望ましい。</p> <p>ホームページについては、さらに内容、デザイン、外国語版など充実させることが望ましい。</p>	
	<p>出版件数 「現代の眼」</p>	<p>6回以上</p>	<p>4回以上6回未満</p>	<p>4回未満</p>	<p>出版件数：6回</p>	<p>A</p>
	<p>展覧会案内</p>	<p>2回以上</p>	<p>1回</p>	<p>0回</p>	<p>出版件数：1回</p>	<p>B</p>
	<p>ホームページのアクセス件数</p>	<p>129,614件以上</p>	<p>90,730件以上129,614件未満</p>	<p>90,730件未満</p>	<p>ホームページのアクセス件数：189,924件（フィルムセンターを含む。）</p>	<p>A</p>

(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。	ボランティアの活用状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	(9) ボランティア ボランティア制度を平成15年度から導入することとし、平成14年度中に具体的な作業に入ることにした。	B	ボランティアの受入れについては、その方針をよく検討したうえで実施する必要がある。
(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。	渉外活動の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	企業との連携については、凸版との共同研究のかたちで『未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの』展と、その後の常設展示用のコンテンツを制作できたことは、今後の企業との連携のあり方を探るうえで、非常に参考になったと言える。	B	国立美術館の業務の充実を図るため民間企業との協同研究により常設展のガイドの充実を図るなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。今後も、引き続き検討する必要がある。
5 新たな美術館施設の円滑な運営について (1) 東京国立近代美術館本館については、平成14年の開館に向けて、体制整備、展示等の実施準備を進め、開館後は円滑な事業実施に努める。特に、展示面積の増加を機に展示内容の一層の充実を図る。 (2) 国立国際美術館新館については、平成16年の移転に向けて、体制整備、展示等の実施準備を進め、開館後は円滑な事業実施に努める。具体的な管理運営のあり方等については開館までに検討を進める。	開館への準備状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	増改築工事前の建物は、1969(昭和44)年、故石橋正二郎氏の篤志によって、現在地に建てられた。建築後30年を経過し、収集作品の増加や現代作品の大型化等によって収蔵庫や展示場の不足が顕著になってきたことや現在の建築基準法上の耐震基準を満たすこと。また、来観者から要望の強かった、情報コーナー、アートライブラリ等の情報提供機能の拡充、レストランやミュージアムショップという鑑賞環境の充実を目指して工事を行った。 この結果、収蔵庫は300㎡増床され1.2倍に、展示場も約1,500㎡増床され1.5倍となったほか、現行の建築基準法の耐震構造となった。また、60席のレストランを皇居のお堀に面した2階テラスに、ミュージアムショップを前庭にそれぞれ新設するなど、施設面で所期の目的を達成した今回の工事は、平成13年8月に無事竣工した。 事業面でも、平成11年の工事着工に伴い一時移転していた所蔵作品の収蔵庫への搬入や全館をあげて開催される開館記念展の準備も順調に進行し、平成14年1月16日「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」展で本館を再開館した。	A	東京国立近代美術館本館は増改築工事が平成13年8月31日に完了し、開館に向けて、着実に体制整備、展示等の実施準備を進め、平成14年1月16日にリニューアルオープンした。
6 新国立美術展示施設(ナショナル・ギャラリー)(仮称)の開設に向けた準備について 文化庁が平成18年を目途に開設を予定している新国立美術展示施設(ナショナル・ギャラリー)(仮称)について、文化庁と連携・協力し、その円滑な開設に向けた体制整備、展示事業等の準備を推進する。		法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	平成14年度から実施。	-	(平成14年度から評定する。)
7 その他の入館者サービス (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。 (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。 (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的を実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。 (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。 (2)入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。 (3)ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。	その他の入館者サービス	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	(1) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実等 本館では車椅子で利用できるエレベーター2基の増設、工芸館では車椅子用リフトの設置等により高齢者・身体障害者等に対するバリアフリーに配慮し、今後、看士員による誘導等とあわせて、サービスの向上に努めた。 (2) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実 本館では案内情報のためのカウンターを設けるとともに、展示作品のキャプションを見やすいように大きくした。本館、工芸館とも1階受付に車椅子を常備した。 (3) 鑑賞環境の充実 本館では展覧会内容に応じ、「会場ガイド」等を無償配付した。本館、工芸館でギャラリー内に休憩用の椅子を増設した。 (4) 小中学生の常設展入場料の無料化、観覧時間の拡充 小中学生の常設展入場料の無料化を次のとおり実施した。なお、共催展であるカンディンスキー展についても小中学生の入場を無料とした。 本館 平成14年3月26日からの「カンディンスキー」展期間中の常設展から実施 工芸館 平成14年2月21日からの「近代工芸とデザインの東西」展から実施 また、本館は、平成14年1月16日のリニューアル・オープン展「未完の世紀」展から従来の金曜日に加え、木曜日も午後8:00までの開館を実施した。 会期中、一日の入館者数に対して夜間開館時間帯の入館者数の占める割合は、木曜日(8日間)が平均8%(最大12%)、金曜日(8日間)が平均13%(最大18%)であった。今後とも、観覧者ニーズを踏まえつつ、財政的状況も勘案しながら、無料化する展覧会を増やすこと、夜間開館時間のあり方等について検討していきたい。 (5) フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実など附属施設の充実 本館においては今回の改修にあわせレストラン(60席)とミュージアムショップを開設した。いずれも、アートライブラリとともに、入館せずに利用できるものである。レストランは土・日・火・水曜日は午後6:30まで、木・金曜日は午後9:30まで営業し、ミュージアムショップは本館開館時間にあわせ、木曜日、金曜日は夜8時まで営業し、入館者へのサービスに努めた。 工芸館においては、館全体が狭隘のため、ミュージアムショップ等のスペース確保は難しいが、館内スペースを活かして、グッズの販売を行い、来館者へのサービスに努めた。 今後、本館については、講堂(153席)の外部活用の積極的な推進を図ること、工芸館については、建物の増築等の中期的な計画が検討課題と考えている。	A	入館者に対するサービスの向上を図るため高齢者、身体障害者のためのトイレ、エレベータ及びスロープ等の設置、小中学生の常設展の無料化、キャプションの変更、夜間開館、レストラン・ミュージアムショップの新設など中期目標に向かって着実に成果を上げている。 特に、小中学生の常設展の無料化は、今後の教育普及事業との相乗効果を期待する。 今後も、アンケート結果の分析やモニター制度を検討するなどの確に入館者のニーズを把握し、きめ細かなサービスを提供することが望ましい。

項目別評価（東京国立近代美術館フィルムセンター）

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評価	
		A	B	C		段階的評価	定性的評価
<p>1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。</p> <p>具体的には、下記の措置を講ずる。</p> <p>(1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>(2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進</p> <p>(3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進</p> <p>(4) 外部委託の推進</p> <p>(5) 事務のOA化の推進</p> <p>(6) 連絡システムの構築等による事務の効率化</p> <p>(7) 積極的な一般競争入札を導入</p> <p>2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。</p>	効率化の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評価を決定する。			<p>フィルムセンターは東京国立近代美術館の中の映画部門としてその事業を行い、上映活動、展示活動、図書閲覧等の一般への観覧サービスはフィルムセンター（京橋）で行い、所蔵作品である映画フィルムについては、フィルムセンター相模原分館においてその保存・保管を行っている。</p> <p>入館者等に対するサービスの向上のため、独立行政法人化に伴い4月8日から日曜開館を実施し、これまで火曜日から土曜日の週5日間の開館を週6日間の開館とした。開館日数を増やすことにより、経費的な面からの効率性を検討した結果、原則として月曜日を完全休館とする職員の勤務時間の見直しを行った。</p> <p>あわせて、9月の独立行政法人本部及び美術館本館の竹橋への移転により、10月からフィルムセンター外注職員の待機場所の集約化を行い、管理体制の強化並びに効率化及び省エネルギー化を図った。</p> <p>独立行政法人本部及び美術館本館が9月まで施設を利用していたために過去の実績との数値的な比較データは得られていないが、平成13年度は1%の業務の効率化を目指して次のとおり取り組んだ。</p> <p>(1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化 契約事務、支払事務等について、美術館庶務課で集中して行うことにより、業務の効率化を図った。</p> <p>(2) 照明灯の不必要箇所の不点灯、誘導灯の夜間無人時における不点灯などを実施し、職員及び外注職員への周知徹底を行い省エネルギー化を推進した。また、廃棄物の分別処理を行い、内部資料等の両面コピーやミスコピー裏面の再利用を行うなど紙類のゴミ発生率を縮減した。</p> <p>事務連絡等については、メールの使用により、ペーパーレス化を実施した。</p> <p>(3) 次の業務について外部委託を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・清掃作業について業務委託 ・設備維持及び運転管理について業務委託 ・受付、出札、警備等の会場管理についての業務委託 ・夜間及び休館日の警備の機械警備 ・大ホールの映写業務委託 ・その他、設備関係のメンテナンスの業務委託 	B	業務運営の効率化を図るため給与計算事務、共済組合事務、保険契約事務などの事務の一元化、不用品の消灯等による省エネルギー化、OA化によるペーパーレス化及び会場監視業務等の外部委託等を実施し、法人全体の運営費交付金の1.37%の効率化に積極的に貢献するなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。 <p>しかし、まだ改善可能な点があると思われるので、美術館本来の業務に支障のない程度に一般競争入札や外部委託を実施するなど、引き続き積極的に取り組む必要がある。</p>
	効率化の達成率	1.5%以上	1%以上 1.5%未満	1%未満	平成13年度は、独立行政法人国立美術館全体で1.37%の効率化を達成した。 平成13年度予算-運営費交付債務繰越額=平成13年度執行予算額（平成13年度執行予算額-決算額）/決算額=効率化率 4,726,536千円-74,848千円=4,651,688千円 4,651,688千円-4,588,482千円/4,588,482千円=0.01377	B	

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評価	
		A	B	C		段階的評価	定性的評価
<p>1 収集・保管</p> <p>(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な購入を図る。また、そのための情報収集を行う。</p> <p>(東京国立近代美術館) 近・現代の絵画・水彩・素描、版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。 美術・工芸に関してはコレクションにより近代美術全般の歴史的な常設展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。 また、映画フィルム等については、残存するフィルムを可能な限り収集するとともに積極的に復元を図る。</p> <p>(京都国立近代美術館) 近代美術史における重要な作品など、近・現代の美術・工芸・写真・デザイン作品等を収集する。その際、京都を中心とする関</p>	美術作品の収集（購入・寄贈・寄託）の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評価を決定する。			<p>(1) 映画フィルム等の購入・寄贈</p> <p>当フィルムセンターにおける映画フィルムの収集状況は、平成13年度末現在、日本映画は741本増の21,387本、外国映画は325本増の6,833本である。これらの映画は、劇文化・記録 ニュース アニメーション テレビといった分野別に収集されている。美術作品と異なり、映画フィルムは複製物であるという物理的な特質から、本来は残存している全ての映画フィルムを収集することが可能であるが、限られた予算の範囲で収集を行う必要から、散逸又は劣化が懸念されるものの購入や不燃化を優先的に行いながら、映画芸術的に優れた作品、映画史的に重要な作品及びフィルムセンターの事業を実施する上で必要な作品等を収集するという基本的方針に基づいて収集を行っている。</p> <p>平成13年度は、日本映画の黄金期を担った各社の劇映画を中心とした購入を行うとともに、日本映画新社等の文化・記録映画の購入を行った。また、平成8年及び平成10年に調査・確認されたロシア所在の戦前日本映画の購入も前年に引き続き行った。</p> <p>映画フィルムの寄贈に関しては、日本劇映画についてはこれまでと同様、文化庁優秀映画作品や日本芸術文化振興会で助成された作品の中で、寄贈に応じていただけたもの収集することができた。この中で特筆すべき成果は、社団法人映像文化製作者連盟を通じた呼びかけに応じていただいた当該連盟加盟の製作会社から、戦後製作された日本文化・記録映画の原版フィルムの226作品（508本）にのぼる大量一括寄贈を受けたことである。このことは、日本文化・記録映画について将来の活用にも備えることになるとともに、他の製作会社からの寄贈を促すことにより、映像文化・映像資料としての相当部分が、散逸をまぬがれることになると考えている。</p> <p>また、映画関連資料に関しては、フィルムセンター創立以来、映倫管理委員会、東宝東和株式会社、東映株式会社、御園京平氏、竹崎清彦氏などから大量に寄贈を受け、これまでに約42,000点のポスター、約30,000冊のシナリオ等を収集しているが、ここ数年大量な寄贈が相次いでおり、常時数年越しの整理作業を並行して行っているが、平成13年度は水谷浩氏（美術監督）のデスマスク、横山実氏（撮影監督）旧蔵の撮影台本117点の受け入れ、整理、登録及び寄贈手続きを終え、映画製作に関連する資料の充実と7階展示室における展示候補資料を充実することができた。</p>	A	フィルムセンターの収集方針に基づき、貴重な映画フィルムを185点購入し、新たに寄贈881点を受入れるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 <p>特に、戦前の貴重な資料として価値の高い、ロシア所在の戦前日本映画の収集を高く評価する。</p> <p>寄附・寄贈は有効な収集方法の一つであるため、文化庁と連携協力し税制問題を含めたその推進方策を検討することが望ましい。</p>

<p>西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した収蔵品の充実にも配慮する。</p> <p>(国立西洋美術館) 中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れの概観が可能となるように、松方コレクションを中心とした近代フランス美術の充実、近世ヨーロッパ絵画の充実及びヨーロッパ版画の系統的収集を行う。</p> <p>(国立国際美術館) 日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、主に1945年以降の日本及び欧米の現代美術並びに国際的に注目される国内外の同時代の美術を系統的に収集する。</p> <p>(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている部分を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。</p>							
<p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。</p> <p>(2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。</p>	保管の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>(2) 映画フィルムの保存管理</p> <p>映画フィルムは化学的に脆弱なため、映画フィルム専用の保存庫を備えるフィルムセンター相模原分館の地下1階及び地下2階の保存庫において24時間体制で収納している。具体的にはモノクロ・フィルムは室温摂氏10±2、湿度40%±5%に設定し、カラー・フィルム及びネガティブ・フィルムは室温摂氏5±2、湿度40%±5%に設定して保存している。また、アセテート・ベースのフィルムに顕著な劣化現象である「ビネガー・シンドローム」に冒されたフィルムについては、独立の空調設備を備え、室温摂氏20±2、湿度35%±5%に設定された専用室において保存をしている。</p> <p>企画上映に使用するフィルムは、定期的な搬送計画に基づいて、ならし室で温度・湿度を調整の上、専用の搬送ケースにより、美術品専用車で輸送を行い、温度20±2、湿度55%±5%に設定されたフィルムセンター地下3階の収蔵庫へ一時保管を行っている。</p>	A	収蔵品の保存及び管理環境の維持充実を図るため映画フィルムの種類や状態に応じて温湿度を適正に管理し、また、綿密な計画に基づいて輸送するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。		
<p>(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。</p> <p>緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。</p> <p>伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。</p> <p>(3)-2 国内外の美術館等の修理、保存処理の充実に寄与する。</p>	修理の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>(3) 映画フィルムの修理、保存処理等</p> <p>フィルムセンターにおける映画フィルムの修復、保存処理等は、1本しか所蔵していないプリント、もしくは状態の不安定なプリント等からネガティブ、マスター等の保存用フィルムを作製し、そこから上映用プリントを複製するものであり、現像会社の技術者との緊密な協力の下に、フィルムの化学的な側面と映画作品の内容的な側面を精査しつつ行っているものである。本年度は、前年度にロシアから収集した国内に存在が確認できていない戦前期の日本映画のうち、8作品について保存用ネガフィルムを作製することができた。また、保存用マスターフィルムは所蔵しているものの、上映用35mmプリントを作製していなかった文部省製作作品及び東映ニュース映画について、上映企画にあわせてネガフィルムと上映用プリントを作製し、今後の上映活動等への対応をはかった。</p> <p>無声映画9本に英語字幕を付けたプリントを作製し、今後、海外からの出品依頼には支障なく対応する準備がなされた。また、平成12年度に購入した中国映画フィルムに日本語字幕を附し、今後の企画上映に備える体制を整えた。</p>	A	映画フィルムの保存処理としてプリントからネガティブ及びマスターを作成することを実施しており、平成13年度は国内で他に確認できない8作品の保存用ネガフィルムを作製するなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。		
<p>2 公衆への観覧</p> <p>(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。</p> <p>(1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。</p> <p>(1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。</p> <p>(東京国立近代美術館) 本館 年3～5回程度 工芸館 年2～3回程度 フィルムセンター 年5～6番組程度</p> <p>(京都国立近代美術館) 年6～7回程度</p> <p>(国立西洋美術館) 年3回程度</p> <p>(国立国際美術館) 年5～6回程度</p>	<p>展覧会の状況</p> <p>「中国映画史の流れ - 無声後期からトーキーへ」</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>年間を通じて、日本映画と外国映画、劇映画と記録映画、作家主義とテーマ主義、大衆性と芸術性、といった映画評価上の対立項目間のバランスのとれた企画になることに留意し、企画上映数は4企画5番組を実施した。</p> <p>また、その他に映画関連資料の展覧会として2回、地方巡回上映事業である「優秀映画鑑賞推進事業」と「国際映画祭への出品事業」を行った。</p> <p>企画上映の観客数については当初の目的である数値を達成したものと考えるが、フィルムセンターの観客数に占める学生の比率は、近年、漸次低下の傾向にあり、フィルムセンターが新開館した平成7年度の16%に比べ、平成13年度の実績では全体の7%にまで下落した。こうした明らかな若者の映画離れを憂慮すべき課題ととらえ、今後、フィルムセンター催事情報が青少年層により多く頻繁に伝達されるような広報のあり方を模索していくことが必要である。</p> <p>1920年代の半ばに産業として成立した中国映画は、監督孫瑜(スン・ユイ)らをはじめとする数々の映画人の貢献によって1930年代には上海を中心に花開き、第一期黄金時代と称されるに至った。聯華影片公司、明星影片公司といったプロダクションの精力的な活動により、映画を近代芸術として成立させた「上海映画」は、フィルムセンターの外国映画コレクションの中でも近年重要な位置を占めるようになっている。この企画は、1992年にフィルムセンターで特集を組んだ巨匠孫瑜の外、『桃花泣血記』(1931年)などのメロドラマに力量を見せたト萬蒼(ブー・ワンツァン)や怪奇映画の傑作『深夜の歌声』を送り出した異才馬徐維邦(マーシュイ・ウェイパン)といった映画作家にも新たにスポットを当て、『新女性』(1935年)などの作品を残して夭折した伝説のスター女優阮玲玉(ロアン・リンユイ)、『夜明け』(1933年)や『スポーツの女王』(1934年)で知られる女優黎莉莉(リー・リーリー)、『銀幕の皇帝』と呼ばれた二枚目の金焰(チン・イエン)など、キャストの面にも配慮しながら、無声時代後期から1940年代初頭に至る「黄金時代」を構成した多様な潮流を照らし出す日本未公開作品を含む31本の秀作を連続上映することにより、これまでにない切り口による企画となったものである。</p>	A	<p>広く国民に優れた映画を観覧する機会を与えるため、日本映画と外国映画、劇映画と記録映画などバランスに配慮しながら上映会を実施し、目標入館者数以上の実績を上げるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>入館者に対するアンケート調査の結果では、概ね7割の肯定的な回答を得ており、展覧会に対する満足度は高かった。</p> <p>映画を近代芸術にまで押し上げることに貢献した中国映画の第一期黄金期と呼ばれる1930年代から1940年代初めにかけての秀作を、日本に紹介した。</p>		
	入場者数	6,000人以上	4,200人以上6,000人未満	4,200未満	入場者数：6,052人	A	

<p>(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。</p> <p>(1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。</p> <p>(1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。</p> <p>なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績者数となるよう努める。</p> <p>また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。</p> <p>(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。</p>	<p>「日本映画の発見：1960年代（1）（2）」</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>1996年から継続している長期企画「日本映画の発見」シリーズの企画は、日本社会において映画というメディアが置かれた位置を明らかにするとともに、「大衆娯楽」から「主張する芸術」へと転換してゆく当時の作品傾向をも浮き彫りにすることを企図したものである。今回の特集で第1期「1960年代」へと歩を進めることになった。</p> <p>日本が高度経済成長を遂げた1960年代は、映画産業にとっては劇的な凋落を体験する時代であり、映画館数は7000館超から3000館台へと落ち込み、年間延べ入館者数も10億人超からその4分の1となる2億5000万人台へと激減することになった。「娯楽の王者」の地位を他に譲った映画は、しかし、なおも以前と大きくは変わらない製作本数を維持し、サラリーマン喜劇や特撮・怪獣映画、仁侠・ヤクザ映画といったシリーズ物の「プログラム・ピクチャー」を多数製作することによって、世界映画史にも稀な娯楽映画ジャンルの系譜を生み出していった。また、『紀ノ川』（1966年、中村登監督）や『飢餓海峡』（1964年、内田吐夢監督）のように、かつて黄金時代を築いた巨匠たちが円熟味を見せ、あるいは総決算に踏み出す中で、スクリーンが若者の思想表明や芸術表現の場になったのもこの時期である。大島渚、今村昌平に代表される野心的なフィルム・アーティストの登場、羽仁進、黒木和雄らドキュメンタリーの分野からの新風、そして若松孝二らの新たな視点によって、1960年代はまた一つの絢爛たる映画の時代となっている。そうした10年間の秀作、話題作96本を、1964年までと1965年以降の公開作品（48本ずつ）という2期に分けて紹介した。第1期から第V期までと同様、きわめて長きにわたって上映されなかった作品を選定することにより、日本映画史を学ぶ学生・研究者らには欠かすことのできないう貴重な上映の機会となったと思われる。</p>	<p>A</p>	<p>日本映画史を系統的にたどる貴重な企画であり、バラエティ豊かな娯楽映画のジャンルを生み出した1960年代の日本の映画を国民に提供した。</p>	
	<p>入場者数</p>	<p>27,000人以上</p> <p>18,900人以上27,000人未満</p> <p>18,900人未満</p>	<p>(1) 入場者数：28,254人</p> <p>(2) 入場者数：27,884人</p>	<p>A</p>	
	<p>「イタリア映画大回顧」</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>無声時代から今日までアメリカ、フランスと並んでわが国にとって三大映画国ともいべきイタリアは、多様なジャンルからその豊かな映画史を構成してきた。スペクタクル史劇、艶笑喜劇、メロドラマ、歴史大作、政治映画からマカロニ・ウェスタンにまで及ぶ広がりを持ち、ソフィア・ローレンやマルチェロ・マストロヤンニに代表される国際スターを生み出しながら時代ごとに華やかな魅力を振りまいてきた。同時に、敗戦後の荒廃したイタリア社会を見つめた「ネオレアリズモ」は、ロッセリニ、デ・シーカ、フェリーニ、ヴィスコンティといった個性的な映画作家を輩出し、戦後の世界映画史を牽引する原動力にもなっている。この特集は、そうしたイタリア映画の連続上映企画として、わが国の歴史上、最長最大のもので、1910年代から80年代に至る日本未公開の33作品を含む55本の作品で構成し、イタリア映画史の全体像を体験できる空前絶後の機会となった。本企画（共催：朝日新聞社、チネテカ・ナチオナーレ）は、うち53本がイタリアから提供を受けたものであり、中でも『カピリア』（1914年）に代表される無声期の作品は、イタリア各地のフィルム・アーカイヴが近年復元を行った最良の画質を有するプリントの提供により上映し、日本の観客にあらためて映画復元の重要性を知らしめることになった。なお、企画の初期（11月17日）にはチネテカ・ナチオナーレ副館長セルジョ・トフェッティ氏の、締めくくり（2月24日）には同館長アドリアーノ・アブラ氏の講演会を実施し、本企画のコンセプトを明らかにしていただいた。また無声映画の上映にイタリアを代表する伴奏ピアニスト（アントニオ・コッポラ、ステファノー・マッカーニョの両氏）の創造的な演奏を付したことも、イタリア無声映画の豊穡さを際立たせ、高い評価を得た。</p>	<p>A</p>	<p>「日本におけるイタリア2001」の事業として、日本未公開の33作品を含む55作品により、イタリア映画史の全体像を鑑賞できる貴重な機会を国民に提供した。</p>	
	<p>入場者数</p>	<p>32,000人以上</p> <p>22,400人以上32,000人未満</p> <p>22,400人未満</p>	<p>入場者数：33,977人</p>	<p>A</p>	
<p>「フィルムで見る20世紀の日本」</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>当館本館のリニューアル記念展「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」の関連企画として開催された本企画は、コレクションの重要な部分をなす日本の記録映像に照準を当てながら、激しい変化を体験した日本の政治、社会、文化を18の切り口を軸に俯瞰する試みである。映画史の文脈をいったん離れ、映画カメラが各時代に捉えてきた大小さまざまな出来事、人物、風物などを主題別に並びかえて18の番組に組み全体で99本の短篇（文化・記録映画、ニュース映画）を上映した。</p> <p>プログラムの構成にあたっては、関東大震災（『関東大震大火実況』など）や太平洋戦争での占領地（『大東亜ニュース』など）といった、いわば「大文字で書かれた歴史」の記憶をなすテーマばかりでなく、産業や運輸、さらには暮らしや衛生生活、教育といった人々の日常的な営みに由来するテーマにも注意を払い、少数民族や女性の地位といった視点にも配慮した。</p> <p>過去の動く映像に接することが観客にとって貴重な機会となった外、本企画は近代史研究者からも、文献資料では測り得ない映像による具体的な事象に触れ得る貴重な機会として、高い評価を得ることができた。短期の企画ながらマスコミからの反応も大きく、過去の映像を積極的に活用するテレビ・ドキュメンタリーが増えている昨今、記録映像の保存に関する意識を高める役割も担ったと考えている。</p>	<p>A</p>	<p>「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」の関連企画として、20世紀の日本の政治、社会、文化を知る上で貴重な資料として価値を持つ記録映像を鑑賞する機会を国民に提供した。</p>		
<p>入場者数</p>	<p>3,300人以上</p> <p>2,310人以上3,300人未満</p> <p>2,310人未満</p>	<p>入場者数：3,719人</p>	<p>A</p>		
<p>「イタリア映画大回顧」ポスター展</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>上映企画「イタリア映画大回顧」の開催にあわせ、7階展示室で開催した所蔵品によるイタリア映画ポスター展では「イタリア映画と日本」の関係をたどることを基本コンセプトに、ポスターの配列も映画の製作年順ではなく、日本での封切順を軸としたほか、選定にあたっては極力初公開時のポスターを選び、リバイバル公開時のポスターについてはその旨を明記するなど、我々日本人がいかにイタリア映画を受容し、またこれらの映画を通していかにイタリアのイメージを形成してきたのか、その道のりを分かりやすく提示することに留意した。なお、本展では、イタリアという「映画大国」のフィルムグラフィアーを所蔵ポスターで構成するという試みを行ったが、これはフィルムセンターにおけるこれまでの映画資料の収集・保存を展覧会という成果で示す機会ともなった。</p>	<p>A</p>	<p>「イタリア映画大回顧」の開催に合せ、これまで日本において公開されたイタリア映画のポスターを展示したものであり、映画を通じて日本とイタリアの文化交流の歴史を再認識させるものであった。</p>		
<p>入場者数</p>	<p>3,850人以上</p> <p>2,695人以上3,850人未満</p> <p>2,695人未満</p>	<p>入場者数：4,320人</p>	<p>A</p>		
<p>「資料で見る日本映画史：みそのコレクションより」</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>御園京平（本名・月村吉治）氏が生涯をかけて収集した膨大な映画資料は、とくにポスター、スチル写真、プログラム（チラシ、パンフレット）の三分野で他を圧倒する質と量を誇り、「みそのコレクション」の通称で広く知られている。このうち、ポスター類は1995年の新館オープンを機にフィルムセンターに寄贈され、我が国の映画史をひもとく貴重な文化遺産となっているもので、当展示室でも映画生誕百年を記念した「ポスターでみる日本映画史」以来、さまざまな展示で活用している。本展は同氏の死後、遺族から当センターに寄贈されたスチル写真、プログラムのコレクションを加えた1,000点近い「みそのコレクション」により、我が国の日本映画史をたどろうとするものである（平成14年5月26日まで開催）。</p>	<p>A</p>	<p>御園京平氏が収集したポスター、スチル写真、プログラムにより、日本の映画史をたどる貴重な機会を国民に提供した。</p>		
<p>入場者数</p>	<p>720人以上</p> <p>504人以上720人未満</p> <p>504人未満</p>	<p>入場者数：1,307人</p>	<p>A</p>		

<p>優秀映画鑑賞推進事業</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>「優秀映画鑑賞推進事業」は、文化庁とフィルムセンターが日本映画製作者連盟、全国興行環境衛生同業組合連合会などの協力のもと、全国各地の公立文化施設などと共同して、優れた日本映画の良質な35mmプリントを提供する巡回上映事業のプログラムである。今年度の上映作品は4作品を1プログラムとし、20プログラムでの実施となっており、実績は次のとおりである。</p> <p>・実施期間：平成13年7月4日(水)から平成14年2月24日(日)まで ・実施会場数：154会場/都道府県数：44都道府県/入場者数計：72,943人</p>	<p>A</p>	<p>フィルムセンターが所蔵する優れた映画を広く国民に公開する機会を提供し、平成12年度の実績を超える154会場で実施するなど、映画の振興に資する事業であった。</p>
<p>映画文化に関する国際交流事業の実施(国際映画祭出品協力事業)</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>本事業は、広く世界の人々に日本映画を紹介し、映画芸術の向上と発展に資するために、海外で開催される国際映画祭のコンペティション部門に選定された日本映画を出品する事業である。作品には外国語字幕を付され、最初に招待されたコンペティション部門において上映される。作品は、その後2年間、各地で開かれる国際映画祭にも出品されることとなっている。今年度は、あわせて10作品を出品した。「いちばん美しい夏」は、上記映画祭のアジア映画を対象とするNETPAC賞において優秀作(スペシャルメンション)と認められた他、ハワイ国際映画祭最優秀作品賞、マンハイム-ハイデルベルグ国際映画祭国際批評家(FIPRESCI)審査特別賞を受賞した。また、「害虫」は、上記映画祭に出品された後、ナント三大陸国際映画祭(フランス)審査員特別賞を受賞した。「かあちゃん」の市川崑監督は、上記映画祭においてライフ・アチーブメント・アワード(功労賞)を受賞した。以下は、平成13年度実績である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「いちばん美しい夏」ジョン・ウイリアムズ 監督 (第36回カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭/2001.7.5~2001.7.14) ・「かあちゃん」市川崑 監督 (モントリオール国際映画祭/2001.8.23~2001.9.3) ・「害虫」塩田明彦 監督 (ベネチア映画祭/2001.8.29~2001.9.8) ・「あしたはきつと・・・」三原光尋 監督 (カルーセル国際映画祭/2001.9.16~2001.9.23) ・「溺れる人」一尾直樹 監督 (バンクーバー国際映画祭/2001.9.27~2001.10.12) ・「新雪国」後藤幸一 監督 (ハワイ国際映画祭/2001.11.2~2001.11.11) ・「ホーム・スイートホーム」栗山富夫 監督 (第20回ファジール映画祭/2002.2.1~2002.2.11) ・「神の子たち」四ノ宮浩 監督 (サンタバーバラ国際映画祭/2002.2.27~2002.3.3) ・「百合祭」浜野佐知 監督 (第9回トリノ女性国際映画祭/2002.3.4~2002.3.10) ・「満山红柿」小川伸介・彭小連 監督 (第24回CINEMA DU REEL映画祭/2002.3.8~2002.3.17) 	<p>A</p>	<p>優れた日本映画を海外の国際映画祭に出品するため、10作品について外国語字幕を付すなどの協力を実施し、日本文化や日本映画の国際的理解を広めた。</p>
<p>(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。</p>	<p>貸与の状況</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(映画フィルム等の貸出)</p> <p>映画フィルムの貸出については、昨年ロシアから収集した日本映画を「第3回京都映画祭」及び「山形国際ドキュメンタリー映画祭2001」(亀井文夫監督特集)に貸出した。また、「第16回国民文化祭ぐんま2001」に対して、当地を舞台にした伊藤大輔監督作品「忠次旅日記」を提供し好評を得た。この映画は、わが国を代表する幻の名画といわれていたもので、10年前に発見され、フィルムセンターによって復元されたものである。海外への貸出としては、イタリアで10月に開かれた世界で唯一最大の無声映画祭である「ボルデノーネ無声映画祭」に32本に及び日本映画を出品し、国際的に大きな反響を得た。</p> <p>フィルムの複製利用については、主に著作権者である製作会社の依頼による良好プリントの作製に協力した。特筆すべきは、東京芸術大学で開催された「デザインの風」展の映像部門の展示に必要とされた、日本の古典アニメーションである「蛸の骨」他3作品の部分映像が複製利用により使用され好評を博した。またNHKのスペシャル番組「特攻」に所蔵作品の一部が使用された。</p> <p>映画関係資料の貸出では、東京都現代美術館で開催された「水辺のモダン-江東・墨田の美術」展の日活向島撮影所コーナーに当時の映画ポスターや写真、撮影機などを提供した。また、TBS創立50周年記念番組「明るいほうへ 明るいほうへ 童謡詩人 金子みすゞ」の小道具作成のために、戦前映画ポスターの図版を、中学校社会科資料集「歴史の資料」(正進社)、「岡田桑三と映像の世紀」(平凡社)作成のために参考図版の提供を行い、映画以外の資料作成に役立てることができた。</p> <p>上記のいずれの場合も、著作権者の権利保護の観点から著作権者の許諾を受けて行っているが、著作権者の不明等によりその許諾に時間を要するため、貸出等の業務の円滑な遂行に支障をきたす場合がしばしばあり、フィルムセンターの今後の業務を進める上で大きな課題となっている。</p>	<p>A</p>	<p>映画フィルムの効果的活用を図るため、映画フィルム84点を貸与するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>また、映画フィルムの貸与については、著作権処理に努め、広く国民に公開できるよう努力することが望ましい。</p>

<p>3 調査研究</p> <p>(1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。</p> <p>収蔵品に関する調査研究 美術作品に関する調査研究 収集・保管・展示に関する調査研究 美術史、美術動向、作者に関する調査研究 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等</p> <p>(1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。</p> <p>(2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。</p> <p>また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。</p>	<p>調査研究の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(1) 調査研究の実施及び成果の発表</p> <p>中国映画史に関する調査研究 研究者 大場正敏 ・「中国映画史の流れ」開催にあたって『NFCニューズレター』第36号(2001年4-5月号) 記録映画に関する調査研究 研究者 入江良郎、岡田秀則 ・三人の女性監督、それぞれの記録映画史(聞き手、構成)『NFCニューズレター』第36号(2001年4-5月号) 研究者 岡田秀則 ・いまだ見ぬ「20世紀」への長くて短い旅『NFCニューズレター』第41号(2002年2-3月号) 映画保存等に関する調査研究 研究者 岡島尚志 ・映画保存の二つの課題:ピネガー・シンドロームとデジタル復元について『NFCニューズレター』第37号(2001年6-7月号) ・FIAFラバト会議報告 フィルム・アーカイヴと“植民地映画”の関係を中心に『NFCニューズレター』第38号(2001年8-9月号) 研究者 入江良郎 ・ドイツの映画保存 ドイツ映画博物館/ドイツ映画研究所(DIF)『NFCニューズレター』第40号(2001年12月-2002年1月号) ・ドイツの映画保存 デュッセルドルフ映画博物館『NFCニューズレター』第41号(2002年2-3月号) 研究者 岡田秀則 ・ベルギー王立シネマテークの現在『NFCニューズレター』第37号(2001年6-7月号) ・砂丘と木立:オランダの映画保存の現在『NFCニューズレター』第38号(2001年8-9月号) 研究者 常石史子 ・第20回ポルデノーネ無声映画祭報告『NFCニューズレター』第40号(2001年12-2002年1月号) 1960年代日本映画に関する調査研究 研究者 佐伯知紀 ・日本映画史のなかの1965年:「その他」の登場と撮影所映画への一視点『NFCニューズレター』第39号(2001年10-11月号) 研究者 岡田秀則 ・日本映画の「不況スパイラル」:数字で見る1960年代日本映画『NFCニューズレター』第39号(2001年10-11月号) イタリア映画に関する調査研究</p> <p>研究者 岡島尚志 ・「イタリア映画大回顧」の意味するもの:フィルム・アーカイヴの保存と上映という視点から『「イタリア映画大回顧」カタログ』 ・吉村信次郎氏に聞く:戦後イタリア映画はいかにして輸入されたか『「イタリア映画大回顧」カタログ』 研究者 岡田秀則 ・吉村信次郎氏に聞く 戦後イタリア映画はいかにして輸入されたか『「イタリア映画大回顧」カタログ』 研究者 入江良郎 ・ポスターでたどるイタリア映画と日本『NFCニューズレター』第40号(2001年12-2002年1月号) 映画技術に関する調査研究 研究者 常石史子 ・シネマスコープの時代(上):草創期『NFCニューズレター』第38号(2001年8-9月号) ・シネマスコープの時代(下):作り手の眼 キャメラマン高村倉太郎氏インタビュー『NFCニューズレター』第39号(2001年10-11月号) 海外の日本映画の所在調査(文部科学省科学研究費補助金) 研究代表者 大場正敏 ・海外に残存する戦前の日本映画に関する調査研究報告書</p> <p>上記のフィルムセンター各研究員の調査研究の成果は、隔月で発行している「NFCニューズレター」に掲載した。NFCニューズレターは、大学等の研究機関、図書館等の団体と映画研究者や評論家等の約700件に配布し、研究者等の参考に資している。</p> <p>(2) 客員研究員の招聘による調査研究活動</p> <p>3名を招聘し、次の活動を行った。</p> <p>所蔵映画フィルムの総合的なデータ分析とカタログ及び目録作成 客員研究員氏名:榎木 章(現職:明治学院大学文学部芸術学科非常勤講師) 研究内容:所蔵日本ニュース映画の目録作成のために、各プリント内容の調査研究、データの集積及び必要に応じて不足分データの補充と、データベースとして全体の統一を図るための調査研究。</p> <p>所蔵映画関連資料に関するデータ構築と総合的な研究調査及び書誌作成 客員研究員氏名:安澤秀太(現職:フリー編集者、翻訳者) 研究内容:平成10年度にNHK放送文化研究所より寄贈された「反町茂雄コレクション」(映画監督・衣笠貞之助の生涯資料ならびに映画会社・大映の内部資料)の整理・特定・分類調査、ならびに登録・データベースの構築(継続)。</p> <p>所蔵映画フィルムの科学的側面からの保存・復元研究 客員研究員氏名:榎木 章 研究内容:内外の各種専門機関・現像所等の研究成果に基づき、所蔵映画フィルムに適応した保存・復元についての調査研究(継続)。</p> <p>映画保存に関する国内外文献の比較調査研究 客員研究員氏名:堀かおり(現職:学習院大学非常勤講師) 研究内容:国際フィルム・アーカイヴ連盟(FIAF)の最新改訂規則及び内規を翻訳し、以前の規則等との比較研究。 平成12年度開催の国際映画シンポジウム「フィルム・アーカイヴの仕事」を再定義するシンポジウムに関する内容についての比較調査(継続)。</p>	<p>A</p> <p>収集・保管、公衆への観覧、教育普及の事業など美術館活動の推進を図るため、中国映画史に関する調査研究、記録映画に関する調査研究及び映画保存に関する調査研究等を実施するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>調査研究については、外部資金の獲得に努め、幅広く外部研究者との交流を促進するなど積極的に取り組むことが望ましい。</p> <p>研究成果の公開については、今後も、幅広く積極的に発表することが望ましい。</p>
---	------------------	--	--	--

				外国映画に関する事業・企画の共同研究 客員研究員氏名：堀かおり 研究内容：共催上映「イタリア映画大回顧」の実施に伴う、チネテカー・ナチオナーレ等イタリア側との事業にかかわる調査、及びFIAF加盟の同種機関との映画史的、アーカイヴ的な事例に関する調査等。 (3) その他、特別映写等による外部への研究協力 大学等の映画に関する研究・教育等及び映画製作等の製作のための調査への協力の一つとして特別映写の機会を提供している。また、この制度を活用して、撮影監督協会、シナリオ作家協会、NPO法人日本映画映像文化振興センターの研究等に協力した。			
4 教育普及 (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。 (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。	資料の収集及び公開（閲覧）の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	3人以上 2人 1人	客員研究員招聘人数：3人	フィルムセンター図書室は、フィルムセンターのみが有する映画関係図書を含め、日本で刊行された映画文献の7割を所蔵し、和書・洋書約20,000冊について閉架式閲覧サービスを行った外、コピーサービスを実施し、今年度は、3,535人が来室し、研究者をはじめ広く活用された。また、新刊図書の収集、整理、公開に加え、特に当時刊行に至らなかった「映画年鑑」(昭和18～20年版)生原稿のマイクロ化を行うなど、未公開資料の整理や利用媒体の作成を行うとともに新刊図書等の収集と開架で閲覧できるスペースの整備を行い、閲覧図書の充実と閲覧環境のより一層の充実に努めた。 閲覧に供している図書数 ・和書 16,064冊 ・洋書 3,394冊	A	日本で刊行された映画文献の7割を所蔵し、その内の19,458冊を図書閲覧室において一般に公開するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。
(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。 また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。	児童生徒を対象とした講座等の実施状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	5回以上 3回以上5回未満 3回未満	上映会：5回 上映会への参加者数：計518人	フィルムセンター相模原分館において地元小・中学校の児童生徒等を対象に上映会を実施した。 これまでは、映画上映の実施のみであったが、今後は、上映前にレクチャーすることを検討していく。	B	教育普及の取組みの充実や学校教育における美術館の活用の推進を図るため、相模原分館において地元の小中学校の児童生徒を対象とした上映会を実施するなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。 今後、映画鑑賞と合せて、映画に対する理解をより深めるための取組みについても検討することが望ましい。
(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。 それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。 また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。	講演会等の実施状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			(講演会) 海外及び国内から専門家を招いて行う国際映画シンポジウムは、平成元年度から実施されているが、これまで世界の映画をめぐる様々な課題を取り上げることで、映画史研究に新しい視点を提供し、また日本のフィルム・アーカイヴ活動に大きな影響を及ぼしてきた。平成13年度は、「イタリア映画大回顧」の企画上映にあわせて開催した。今回は、その共催機関であるイタリアのチネテカー・ナチオナーレから副館長のセルジョ・トフェッティ氏と館長のアドリアーノ・アブラ氏を招聘し、イタリア映画史を鳥瞰する2回の講演会を実施した。多数の日本未公開作品に触れ、伝統的な芸術分野や20世紀イタリア社会との関係にも言及したこれら2回の講演は、従来日本で考えられてきたイタリア映画のイメージを大胆に刷新するものであった。すでに日本でもなじみ深い戦後のネオレアリズモ映画についても、美学的な側面のみならずそれを生み出した映画史的、社会史的な背景が述べられ、その理解を一層促した。また日本ではなかなか全体像を捉えにくい1910年代の無声映画の隆盛ぶり、そして戦後の商業映画の豊かな系譜や「イタリア式喜劇」と呼ばれた独特のジャンル、さらにイタリア映画における地方性の問題などについても、それぞれ鋭角的な分析がなされ有益であった。並行開催の上映企画と密接に連動した内容は来場者に刺激を与えただけでなく、イタリア芸術の大きな柱である映画の研究に新たな橋渡しの役目を果たした。 また本事業は、映画保存の動向、映画史的な研究など、年によってテーマが異なるものの、様々な画像を使った講演の希望が出ており、これらに対応していくための投影機材を充実することが必要と考えている。また映画保存に関するシンポジウムには、文化財関係者、映像や写真に関する各学会員、デジタル技術者など、映画関係者にとどまらぬ多方面の関係者が参加することが重要だと考えている。 (映画製作専門家養成講座) 平成13年度で第5回を数える映画製作専門家養成講座は、平成9年度の第1回より日本映画の黄金時代を築き上げた数々の映画人を講師に迎え、映画をめぐる技と匠を次世代の映画人に継承すべく実施されてきた。第3回までは映画作りの部門別に講座を開催してきたが、第4回からは映画芸術に多大な功績を残した人物の業績をたどりつつ、受講生が映画製作を学べる場を提供している。平成13年度は、松竹大船撮影所のカメラマンとして長年にわたって活躍してきた川又昂氏を総合プロデューサーとして迎え、そのキャリアの中にも映画を作り、「日本映画の黄金時代」を象徴する小津監督、1960年代以降それぞれ「主張する芸術」と「商業映画の軸」という両輪を担った大島監督と野村監督、さらに個人プロダクションで野心的な映画作りに挑む今村監督という4巨匠の映画作法を、川又氏の技術的な貢献を通じてたどった。戦後の日本映画史を技術面から縦断する絶好の機会になったと考えている。ゲスト講師は、撮影現場のセット作りにおける技術的なトラブルシューティングからスタッフ間の人間関係の保ち方に至るバラエティ豊かなテーマで講義を行ったが、これから映画界を目指す受講者に少なからぬインパクトを与えるとともに、現代の映像作りが伝統的な映画製作とどのように接し、どのように未来の映画製作に活かせるかが浮き彫りになったと考えている。 今後の課題としては、低予算化・脱スタジオ化が進む現代の映画製作に対して、それとは反対に「黄金時代」と呼ばれた時代の大予算、撮影所内における人材育成のシステムなどの流儀を、当該養成講座のカリキュラムへの反映とあわせて、具体的にどのように取り入れるかを検討する必要がある。またそれと関連して、現在、映画製作の教育に携わっている団体など、外部機関との緊密な連携も視野に入れる必要があると考える。	A	映画等の理解促進を図るため、限られた人員と予算で「イタリア映画大回顧」に関する講演会や映画製作専門家養成講座を開催するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 特に映画製作専門家養成講座は、撮影現場のセット作りなど日本映画の優れた技と匠を継承し、次世代の映画製作現場を担うことのできる人材の育成に貢献した。

		講演会の回数	1回以上	-	0回	2回	A	
		講演会等の参加者数	351人以上	246人以上351人未満	246人未満	246人(1回目:116人, 2回目:130人)	B	
		映画製作専門養成講座の回数	1回以上	-	0回	1回	A	
		講演会等の参加者数	72人以上	58人以上72人未満	58人未満	118人	A	
		講演会等に対するアンケート結果	80%以上	56%以上80%未満	56%未満	講演会でのアンケート調査未実施 映画製作専門養成講座:記述式のため様々な意見の記入があったが、講座の実施に自体についての肯定的意見が75%を占め、今後の取り上げるテーマや受講資格について要望もあり、実施方法については今後検討する必要があると考える。(62人回収)	B	
(4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。 (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員(キュレーター)の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。 (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。 (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。	研修等の取組み状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。				平成13年度は、美術館本館の増改築工事期間中のため本部及び本館機能がフィルムセンター(京橋)に仮事務所を設置していたため、博物館学実習生の受け入れは行われなかった。 全国の公共施設や映画祭等で映画上映を行っている担当者で構成される「映画上映ネットワーク会議」のための見学研修会を受け入れ実施した。	B	美術館関係者等の人材育成及び人的ネットワークの形成を図るため、「映画上映ネットワーク会議」に協力し、フィルムセンターで研修する機会を提供するなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。 今後も、受入可能な人数の範囲内で積極的に取り組む必要がある。
(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。 また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。	広報活動の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。				(出版事業等) 展覧会、企画上映に伴う図録の発行 [上映関係] ア.「イタリア映画大回顧」上映カタログ 23.0×19.2cm/216P 本文:「イタリア映画大回顧」の意味するもの(岡島尚志),他 上映作品解説 イタリア映画日本公開年表 イタリア映画関係日本語文献目録 上映プログラム 編集:東京国立近代美術館フィルムセンター,朝日新聞社 発行:朝日新聞社 イ.「平成13年度優秀映画鑑賞推進事業」鑑賞の手引 A4判/6P 作品解説、会場一覧、プログラム作品リスト 編集・発行:東京国立近代美術館フィルムセンター [展示関係] ア.「『イタリア映画大回顧』ポスター展-フィルムセンター・コレクションより-」 出品リスト 29.7×21.0cm/4P イ.「資料でみる日本映画史-みそのコレクションより-」出品リスト 22.4×10cm/10P 「NFCニューズレター」 6回発行済(年度計画 6回発行) 第36号 4-5月号 「特集:中国映画への新しい視点」他 第37号 6-7月号 「特集: '60年代の日本映画(1)」他 第38号 8-9月号 「特集: '60年代の日本映画(2)」他 第39号 10-11月号 「特集: '60年代の日本映画(3)」他 第40号 12-1月号 「特集:イタリア映画史探索(1)」他 第41号 2-3月号 「特集:イタリア映画史探索(2)」他 「NFCカレンダー」 5企画すべてで発行(年度計画 企画毎発行) 企画上映「中国映画史の流れ:無声後期からトーキーへ」 企画上映「日本映画の発見 :1960年代(1)」 企画上映「日本映画の発見 :1960年代(2)」 共催上映「イタリア映画大回顧」 企画上映「フィルムで見る20世紀の日本」	A	映画に関わる文化について国民の理解促進を図るため、上映カタログ、NFCニューズレター、NFCカレンダー等を発行するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 より一層、国民に美術館活動が理解されるよう内容を工夫し、今後も積極的に実施することが望ましい。 また、インターネットを積極的に活用した広報について検討することが望ましい。
		「ニューズレター」発行回数	6回以上	4回以上6回未満	4回未満	発行数:6回	A	

<p>(1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。</p> <p>(5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。</p> <p>(5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。</p> <p>また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。</p>	<p>収蔵品の情報デジタル化及びその活用状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>ホームページの活用</p> <p>ホームページではフィルムセンターの概要、企画上映を含む活動一般などの情報の公開に努めるほか、職員募集などの事務的な活動にも積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行った。</p> <p>また、ホームページを新しいレイアウトにするための検討を行い、できるものから順次更新作業を行った。</p>	<p>A</p>	<p>映画に関わる文化について国民の理解促進を図るため、概要、企画上映等の活動、職員募集などホームページを利用して積極的に公開するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>映画のデジタル化に伴う著作権について慎重に取り組むことが望ましい。また、映像のデータベース化については、理工系研究者等との協同研究を行うなど積極的に取り組むことが望ましい。</p> <p>ホームページについては、さらに内容、デザイン、外国語版など充実させることが望ましい。</p>
<p>(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。</p>	<p>ボランティアの活用状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>上映活動や映画の歴史等の解説について、どのような形でボランティア等と連携協力ができるかを検討中である。</p>	<p>B</p>	<p>ボランティアの受入れについては、その方針をよく検討したうえで実施する必要がある。</p>
<p>(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。</p>	<p>渉外活動の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>実績なし</p> <p>企業との連携等については、平成14年度に開室予定である展示室に対する協力等を検討中である。</p>	<p>-</p>	<p>〔平成13年度は、実績がないため評定しない。なお、フィルムセンターの業務の充実を図るため渉外活動について積極的に検討する必要がある。〕</p>
<p>5 新たな美術館施設の円滑な運営について</p> <p>(1) 東京国立近代美術館本館については、平成14年の開館に向けて、体制整備、展示等の実施準備を進め、開館後は円滑な事業実施に努める。特に、展示面積の増加を機に展示内容の一層の充実を図る。</p> <p>(2) 国立国際美術館新館については、平成16年の移転に向けて、体制整備、展示等の実施準備を進め、開館後は円滑な事業実施に努める。具体的な管理運営のあり方等については開館までに検討を進める。</p>	<p>開館への準備状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>東京国立近代美術館及び国立国際美術館で実施。</p>	<p>-</p>	<p>(東京国立近代美術館本館及び国立国際美術館で評定。)</p>
<p>6 新国立美術展示施設(ナショナル・ギャラリー)(仮称)の開設に向けた準備について</p> <p>文化庁が平成18年を目途に開設を予定している新国立美術展示施設(ナショナル・ギャラリー)(仮称)について、文化庁と連携・協力し、その円滑な開設に向けた体制整備、展示事業等の準備を推進する。</p>		<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>平成14年度から実施。</p>	<p>-</p>	<p>(平成14年度から評定する。)</p>
<p>7 その他の入館者サービス</p> <p>(1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。</p> <p>(1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。</p> <p>(1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。</p> <p>(1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。</p> <p>(2)入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。</p> <p>(3)ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。</p>	<p>その他の入館者サービス</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>大ホールの客席への入場開始は、開映時間の45分前としているが、人気の高い作品の場合は早くからエントランスホールに並ぶ場合がある。このため、2階エレベータホール前に18席の椅子及び上映会場入口へ通じる階段の踊り場に椅子を設置し、入場者のサービスに努めた。</p> <p>車椅子で利用できるエレベーターの設置等により高齢者・身体障害者等に対するバリアフリーに配慮し、次のような施設設備の充実がなされている。</p> <p>外部との出入り口を自動ドア化。 車椅子対応エレベーターの設置。 車椅子で利用できる多目的トイレの設置。 手すり付き小便器を設置。 レストランを1階部分に設置し、火曜日から金曜日は午前10時30分から午後8時30分、土曜日及び日曜日は午前10時30分から午後6時まで営業し、入館者へのサービスを行っている。 ミュージアムショップについては、施設規模の面から設置されていないが、会場入口の受付において、出版物等の販売を行っている。</p> <p>また、平成13年度から日曜日も開館したが、平日の2回目の上映開始時間に関して、仕事を持っている人を中心に、もう少し来館しやすい時間帯での開始を望む声が多かったため、試行的に平成14年度から平日2回目の上映開始時間を30分繰り下げて実施することとした。</p> <p>また、これまで当センター7階展示室を利用して行われていた写真・デザイン部門による展覧会事業は、東京国立近代美術館本館の開館により新美術館での実施とし、平成14年度から映画部門の専有化を図った。このことは、これまでの上映・書閲覧事業に新たな公開事業が加わることで、当センターの映画に関する博物館としての位置付けを明確にする一つの核となり、一般の人に映画文化に関する理解と興味を広げる一助にしたいと考えている。</p> <p>映画部門の展示による公開事業を実施するために、映画関連資料の展示に関する整備構想委員会を設置し、当センターが所蔵する映画関連資料の公開を含め7階展示室の活用方法の検討を開始した。</p>	<p>A</p>	<p>入館者に対するサービスの向上を図るため高齢者、身体障害者のためのトイレやエレベータ等の設置、日曜開館、上映時間の変更を実施するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>今後も、アンケート結果の分析やモニター制度を検討するなどの確に入館者のニーズを把握し、きめ細かなサービスを提供することが望ましい。</p>

項目別評価（京都国立近代美術館）

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評定																								
		A	B	C		段階的評定	定性的評定																							
<p>1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。</p> <p>具体的には、下記の措置を講ずる。</p> <p>(1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務効率化</p> <p>(2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進</p> <p>(3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進</p>	<p>効率化の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>独立行政法人国立美術館は、法令及び業務方法書の定めるところに従い、適正かつ確実な運営を行い、貴重な国民的財産である国内外の美術品を良好な状態で後世に伝えとともに、広く国民に紹介し、文化の向上・発展に努めるとともに、国際文化交流を推進すること及び国内外の美術館活動の充実に寄与することをその基本方針としている。この基本方針の基に京都国立近代美術館が果たすべき役割を十分認識し、収集・保管・展示・調査研究及び教育普及などの事業運営に当たるものとした。また、独立行政法人化を踏まえ、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しながらも通常業務経費の1%効率化を目標に以下のとおり事業運営の効率化に取り組んだ。</p> <p>(1)共通的な事務の一元化による業務の効率化 人事、給与及び共済事務の各館から本部への事務一元化を実施するため、専用ソフトを法人本部へ導入し、事務の効率化を推進した。 給与簿の作成、給与明細書の作成、職員別給与簿の作成、年末調整の作成等定員内職員に係る事務を本部へ一元化。また、共済組合事務について、従来行っていた標準報酬の決定事務、転入、転出事務を本部へ一元化し、業務の効率化が図られた。</p> <p>(2)省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進 ・管理部門を中心とした基幹的維持経費の削減に努めたが、1%以上の効率化を図ることができなかった。その要因は以下のとおりである。</p> <table border="0"> <tr> <td>光熱水費の対前年度比：</td> <td>電気経費 104%</td> <td>(参考値)</td> <td>使用量の対前年度比：</td> <td>電気使用量 108%</td> </tr> <tr> <td></td> <td>ガス経費 106%</td> <td></td> <td></td> <td>ガス使用量 99%</td> </tr> <tr> <td></td> <td>水道経費 104%</td> <td></td> <td></td> <td>水道使用量 97%</td> </tr> <tr> <td>廃棄物量の対前年度比：</td> <td>一般廃棄物 83%</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>産業廃棄物 0%</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>リサイクル：ゴミの分別収集、コピー用紙・トナーカートリッジ・トイレットペーパー等の再生紙使用 ペーパーレス化：館内LAN使用による通知文書・連絡案内の情報化</p> <p>1) 電気使用量の増、使用料の増加及び理由について</p> <p>a 今年度の当館単独主催展覧会は、ミニマル・マキシマル、京都の工芸、オーストリアの現代デザイン、シエナ美術展、長谷川潔展と昨年度より開催回数も1回多く実施しているため、使用量・料金とも増加した。</p> <p>b 昨年度と比較して、月平均1KWh当たり0.13円の値上げとなり負担増となった。</p> <p>c 親しみやすい開かれた美術館としての環境づくりのひとつとして平成12年8月からオープンギャラリーとして、エントランスホール等の開放を行ったことによる来館者増加にともなう設備使用量増による要因もある。展覧会観覧者については、昨年度と比較すると45%増の約5.7万人多くなっている。(127,823人 185,603人)</p> <p>d 節電を図るため、各係へ省エネの通知文書を配布し、使用箇所には節電ステッカーを貼付するなど意識の高揚に努めてきた。</p> <p>e 夜間における本館建物周辺の外灯照明時間を、防犯効果に配慮しながら照明時間の短縮を図り節電を行った。(11月から実施し、14年1月からさらに時間短縮)</p> <p>2) ガス使用量の減及び使用料の増について</p> <p>a ガスの使用量については、昨年度に比べ約900m³減量し、効率よい運用を行った。</p> <p>b 昨年度と比べ年間1m³当たり平均3.70円の値上げとなり、減量となっているものの、料金では負担増となった。</p> <p>3) 水道使用量の減及び使用料の増</p> <p>a 水道使用量については、昨年度と比較すれば、オープンギャラリーとしてエントランスホールを解放したこと、及び入場観覧者数が約45%増の中で、若干の減少の状況にあり、節水努力の成果が出た。</p> <p>b 使用料金においては、下水道料金が4月から使用数量段階別使用単価が平均28.6円・上水道料金においても、10月から平均10円の値上げが実施され、使用料金については若干の減量はあるものの負担増となった。</p> <p>c 節水を図るため洗面所等には、節水ステッカーを貼付し、協力を呼びかけた。</p> <p>4) 用紙類関係の減量化推進</p> <p>a OA用紙については、A3を除き軒並み昨年度に比べ減量になっている。これらは、会議用資料等の両面コピーの活用によるもの、また、館内LANを使用することにおいて、従来の簡易な通知文書をメール発信で処理する等ペーパーレス化を図ったことによる。</p> <p>b コピー用紙については、古紙配合率100%・白色度70%の古紙を購入使用、さらに古紙の使用後の再利用を図るため、分別収集を実施した。</p> <p>c 昨年度に比べ用紙の減量を行ったことにより、廃棄物の減量も図られた。</p> <p>(3)施設の有効利用の推進 展覧会事業に関連した講演会・シンポジウム・レクチャーなどに利用し、施設の有効な活用を図った。 1) 講演会：10回(延べ753名参加)(当館施設内で実施した講演会：9回(延べ637名参加)) 2) シンポジウム：1回(62名参加) 3) 音楽会：2回(延べ231名参加) 4) レクチャー：22回(延べ約850名参加) 施設の有効利用を図るため、施設管理規程を整備し、外部の団体等が当館の会議室・講堂を一時使用できる環境にした。</p>	光熱水費の対前年度比：	電気経費 104%	(参考値)	使用量の対前年度比：	電気使用量 108%		ガス経費 106%			ガス使用量 99%		水道経費 104%			水道使用量 97%	廃棄物量の対前年度比：	一般廃棄物 83%					産業廃棄物 0%				<p>B</p>	<p>業務運営の効率化を図るため給与計算事務、共済組合事務などの事務の一元化、水道量の節約、ゴミの分別等によるリサイクル、OA化によるペーパーレス化及び清掃業務の一般競争入札等を等を実施し、法人全体の運営費交付金の1.37%の効率化に積極的に貢献するなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>しかし、まだ改善可能な点があると思われるので、美術館本来の業務に支障のない程度に一般競争入札や外部委託を実施するなど、引き続き積極的に取り組む必要がある。</p>
光熱水費の対前年度比：	電気経費 104%	(参考値)	使用量の対前年度比：	電気使用量 108%																										
	ガス経費 106%			ガス使用量 99%																										
	水道経費 104%			水道使用量 97%																										
廃棄物量の対前年度比：	一般廃棄物 83%																													
	産業廃棄物 0%																													

<p>(4) 外部委託の推進</p> <p>(5) 事務のO A化の推進</p> <p>(6) 連絡システムの構築等による事務の効率化</p> <p>(7) 積極的な一般競争入札を導入</p>			<p>(4)外部委託の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・管理業務の外部委託 従来からの設備管理業務、清掃業務の外部委託について、継続して実施するとともに日々の入場料収入金及び両替金などの取引銀行への集配金業務を防犯上安全確実な警備会社に委託した。 <p>(5)事務のO A化の推進・館内LANを活用した事務情報処理体制を構築し、事務の省力化・迅速化・効率化を図った。 ファームバンキングの導入：観覧料等の収入金及び支出金の会計伝票処理については、取引銀行との電話回線による情報オンラインを敷設し、事務の省力化・迅速化・効率化を推進するとともに、安全性の向上を図った。 新会計情報システム導入</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 当館における財産管理(土地・建物・工作物・備品・美術作品)について、従来は発生の都度帳簿に手書きで記入していたが、本システムを導入することにより、情報を一括管理・利用することができ、事務作業の効率化を図ることができた。 2) 原則として帳簿ペーパーとしての管理がなくなり、保管スペースの有効利用を図ることができた。 <p>(6)連絡システムの構築等による事務の効率化 日常業務のうち、行事予定・文書通知・事務連絡等の事務を汎用ソフトにより情報化した。</p> <p>(7)積極的な一般競争入札を導入 ・広く競争に参加する機会を設けることにより、機会均等・公平な相手方の選定が図れ、経済性においても経費の軽減に反映されるため、従来の単独契約の内容を見直し、可能なものから一般競争契約の導入を推進した。 清掃請負：一般競争入札を導入することにおいて、昨年度の随意契約価格から940千円の安価となった。</p>																									
<p>2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。</p>			<p>2 外部有識者による評価、及び職員の意識改善</p> <p>(1)京都国立近代美術館では適正な事業運営を行うため外部有識者による評議員会を設け、業務の実績に関する評価を行い、意見を聴取するとともに、館内での意見交換を活発に行い、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させるよう努めた。 評議員会を開催 京都国立近代美術館の管理運営に関する重要事項を館長の諮問に応じて審議、館長に助言する委員会として平成13年6月20日から国立美術館組織規程及び京都国立近代美術館評議員会に関する規程に基づき委員を委嘱、設置。第1回を平成14年2月25日に開催した。(会長に梅原猛国際日本文化研究センター顧問・哲学者、委員総数15名) 定例会議を開催 当館では毎月ほぼ2回の割合で定例会議を開催し、活発な意見交換を行い、この会議を通じて事業の改善や職員の意識改革に努めた。</p> <p>(2)聴取した意見の業務への反映 ・評議員から独法化後の事業運営について、現在の美術館を取り巻く厳しい経営環境の中では、観覧者の減少傾向に歯止めをかけ入場者数を増やし、収入増を図らねばならないが、採算性にのみ走るのではなく、芸術的に非常に質の高い展覧会と観覧者増が見込めるものとをうまく組み合わせながら、全体としてバランスのとれた事業運営をしていく必要があるとの意見が出された。このほか、美術館と大学などの研究機関とが協力してワークショップなどの事業を展開できるのではないかとといった意見も出された。 また、定例会議ではアンケート等による入館者の意見等を随時報告し、事業改善等の対応に意見を出し合い検討した。 ・業務改善の取り組み</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 今後の展覧会計画において収入増を図りながら、高い芸術性のある展覧会を計画実施していく。 2) 京都市の主催する「京都シティハーフマラソン」事業や京都着物卸売商業協同組合の「京都有着物パスポート」事業と提携した観覧者誘致の取組みなど地域の各種団体の事業に協力し、柔軟な事業運営への取り組みを行った。 3) 当館では、以前から「常設展示目録」を常設展の観覧者のために作成し、無料配布してきたが、本年度から「常設展示目録英語版」を作成・無料配布した。また、自主企画展である「銅版画の巨匠 長谷川潔展」でも日本語版と英語版の2つの「展示目録」を無料で配布した。 4) 説明文パネルやキャプションなどの会場内表示物の文字を読みやすく大きくすることを順次実施していくこととなった。 <p>(3)会計・人事等の研修を通じて職員の意識改革と資質の向上を図り、併せて組織の活性化を図る。 これまでの官庁会計と異なる独立行政法人会計の基準を基とした会計システム研修、決算実務の研修を公認会計士等専門家の指導のもとに実施した。 また、以下のとおり職員研修を実施するとともに他の機関が実施する研修へ職員を派遣した。</p> <table border="0"> <tr> <td>接遇研修</td> <td>1回実施</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>研修への派遣</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>・人事院研修への派遣</td> <td></td> <td>8回</td> <td>延べ8名派遣</td> </tr> <tr> <td>・文部科学省学芸員等在外派遣研究員として派遣</td> <td>1回</td> <td></td> <td>1名派遣</td> </tr> <tr> <td>・文部科学省研修への派遣</td> <td>3回</td> <td></td> <td>延べ3名派遣</td> </tr> <tr> <td>・他の法人等が実施する研修への派遣</td> <td>3回</td> <td></td> <td>延べ6名派遣</td> </tr> </table> <p>別紙「実績報告書53～54頁参照」</p>	接遇研修	1回実施			研修への派遣				・人事院研修への派遣		8回	延べ8名派遣	・文部科学省学芸員等在外派遣研究員として派遣	1回		1名派遣	・文部科学省研修への派遣	3回		延べ3名派遣	・他の法人等が実施する研修への派遣	3回		延べ6名派遣	<p>B</p>
接遇研修	1回実施																											
研修への派遣																												
・人事院研修への派遣		8回	延べ8名派遣																									
・文部科学省学芸員等在外派遣研究員として派遣	1回		1名派遣																									
・文部科学省研修への派遣	3回		延べ3名派遣																									
・他の法人等が実施する研修への派遣	3回		延べ6名派遣																									
<p>効率化の達成率</p>	<p>1.5%以上</p>	<p>1.0%以上 1.5%未満</p>	<p>1.0%未満</p> <p>平成13年度は、独立行政法人国立美術館全体で1.37%の効率化を達成した。 平成13年度予算・運営費交付債務繰越額 = 平成13年度執行予算額 (平成13年度執行予算額 - 決算額) / 決算額 = 効率化率 4,726,536千円 - 74,848千円 = 4,651,688千円 4,651,688千円 - 4,588,482千円 / 4,588,482千円 = 0.01377</p>																									

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評 定																																										
		A	B	C		段階的 評定	定性的評定																																									
<p>1 収集・保管</p> <p>(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な購入を図る。また、そのための情報収集を行う。</p> <p>(東京国立近代美術館) 近・現代の絵画・水彩・素描、版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。 美術・工芸に関してはコレクションにより近代美術全般の歴史的な常設展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。 また、映画フィルム等については、残存するフィルムを可能な限り収集するとともに積極的に復元を図る。</p> <p>(京都国立近代美術館) 近代美術史における重要な作品など、近・現代の美術・工芸・写真・デザイン作品等を収集する。その際、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した収蔵品の充実に配慮する。</p> <p>(国立西洋美術館) 中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れの概観が可能となるように、松方コレクションを中心とした近代フランス美術の充実に、近世ヨーロッパ絵画の充実及びヨーロッパ版画の系統的収集を行う。</p> <p>(国立国際美術館) 日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、主に1945年以降の日本及び欧米の現代美術並びに国際的に注目される国内外の同時代の美術を系統的に収集する。</p> <p>(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている部分を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。</p>	美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>(1) 美術作品等の収集</p> <p>京都国立近代美術館 特筆すべき成果としては、鈴木治の代表作《雪の中の馬》及び八木一夫の《白化粧 鉄象嵌花生》等を購入するとともに、1960年代から1980年代にかけての木村盛伸、柳原睦夫、松風栄一、深見陶治ら京都の陶芸家の作品、及び《色絵染付並用村落遠望陶額》など富本憲吉作品の寄贈を受け、バーナード・リーチ《生命の樹》、板谷波山《白磁八つ手彫大花瓶》なども購入して陶芸部門が充実した。また、染織部門においても佐野猛夫《波の詩》の購入とともに、森口華弘の《友禅訪問着「双華文」》ほか3領をはじめ、久保田繁雄、黒田暢、中野光雄、福本潮子らの作品の寄贈を受け、ガラス部門においても岩田藤七、久利父子の作品各5点の寄贈を受けて充実することとなった。</p> <p>このほか、所在が不明であった都路華香の第10回文展特選作《埴輪》や、鍋木清方の第11回七絃会展出品作《たけくらべの美登利》が見いだされ、入江波光《南欧の冬》、富田溪仙《清水秋酣図》ほか2点等とともに購入し、明治末の日本画革新運動をリードした千種掃雲の遺作10点、また戦後パンリアル美術協会によって革新運動を展開した大野倣嵩、野村耕らの作品をはじめ、異色の水墨画家山口八九子の遺作16点の寄贈を受けるなど、日本画部門も充実することとなった。</p> <p>また、油彩画部門においてもオノサト・トシノブの第7回日本国際美術展最優秀賞の《相似》のほか、巖光《壺に入った花岸田劉生《窓外風景》、安井曾太郎《少女像》を購入することで欠を補うことができた。さらに、村井正誠《C i t e》ほか4点の油彩画及び5点の版画の寄贈を受けて一気に村井作品の充実に貢献することとなった。さらに比田井南谷の《作品61-7》ほか3点の購入、《作品9「電第2」》ほか1点の寄贈により、当館が収集に努めている前衛書の欠を補うことができた。また都路華香、千種掃雲、猪原大華ら京都の日本画家の、それぞれの制作過程をさぐることができる下図や素描等あわせて約220点の寄贈を受け素描部門が充実するとともに、これらの画家達の基礎的研究の資とすることができた。</p> <p>これら購入及び寄贈による作品を活用することにより、常設展示も少しずつ充実に向かっている。</p> <p>購入・寄贈以外に、寄託によって展示作品の欠を補い、また研究資料の充実に貢献してきたが、陶芸部門では初期のバーナード・リーチの作風をよく示す《失透釉貼付文注瓶》はこの部門を充実させることができた。日本画部門では小倉遊亀《苺》《虫籠》など初期の貴重な作品の寄託を受け、わずか1点だけの所蔵品の欠を補うことができた。油彩部門については小出楯重《卓上草花》、坂本繁次郎《松間馬》《砥石》などそれぞれの画家の代表作、また三尾公三《ヴェネツィアの女》《北白川幻想》などの日本の作家のほか、ルドン《イエスとソマリア人》などの海外作家の優作の寄託を受け、常設展示の充実に貢献することができた。</p> <p>なおまた、登録美術品制度の実施に伴い、ルドン《若き日の仏陀》が登録され当館で公開に至っている。</p> <p>別紙「実績報告書30～31頁参照」</p>	<table border="1"> <tr> <td>購入及び寄贈作品</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>購入作品</td> <td>35点</td> <td>寄贈作品</td> <td>420点</td> <td>分類換</td> <td>1点</td> </tr> <tr> <td>前年度までの収蔵作品数</td> <td>6,632点</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>平成13年度末収蔵作品数</td> <td>7,088点</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td colspan="6">別紙「実績報告書30頁参照」</td> </tr> <tr> <td>寄託作品の受入</td> <td>26点</td> <td>平成13年度末寄託作品数</td> <td>737点</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td colspan="6">別紙「実績報告書31頁参照」</td> </tr> </table>	購入及び寄贈作品						購入作品	35点	寄贈作品	420点	分類換	1点	前年度までの収蔵作品数	6,632点					平成13年度末収蔵作品数	7,088点					別紙「実績報告書30頁参照」						寄託作品の受入	26点	平成13年度末寄託作品数	737点			別紙「実績報告書31頁参照」						A	<p>京都国立近代美術館の収集方針に基づき、鈴木治作「雪の中の馬」など質の高い美術作品を35点購入し、新たに寄贈420点、寄託26点を受入れるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。また、登録美術品制度を活用し、ルドン作「若き日の仏陀」を公開した。</p> <p>今後も、「京都派」に限定することなく、幅広く質の高い美術作品を収集することが望ましい。</p> <p>寄附・寄贈は有効な収集方法の一つであるため、文化庁と連携協力し税制問題を含めたその推進方策を検討することが望ましい。</p> <p>美術作品の散逸や海外流出について、文化庁、国立博物館等との連携を図り情報収集など迅速に対応することが望ましい。</p>
購入及び寄贈作品																																																
購入作品	35点	寄贈作品	420点	分類換	1点																																											
前年度までの収蔵作品数	6,632点																																															
平成13年度末収蔵作品数	7,088点																																															
別紙「実績報告書30頁参照」																																																
寄託作品の受入	26点	平成13年度末寄託作品数	737点																																													
別紙「実績報告書31頁参照」																																																
<p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実に図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実に図る。</p> <p>(2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実に図る。</p>	保管の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>会場内では、作品を安全に展示するために年間を通じて館内10数箇所の温度・湿度、空気汚染、照明、防災対策、保安対策などの調査を継続的に実施し、必要に応じた改善の実施を行っている。</p> <p>また、収蔵庫においては、収蔵作品に応じて各室毎に温度・湿度を変え、温度・湿度のデータの管理により、作品への影響を最低限とするよう空調設備の運転を行っている。展示場、収蔵庫の管理状況は以下のとおりである。</p> <table border="1"> <tr> <td></td> <td>温度</td> <td>湿度</td> </tr> <tr> <td>展示場：夏場</td> <td>25</td> <td>55%</td> </tr> <tr> <td>：冬場</td> <td>20</td> <td>55%</td> </tr> <tr> <td>収蔵庫：</td> <td>20</td> <td>60% (日本画、染織、漆芸) 50 - 55% (その他の作品)</td> </tr> </table>		温度	湿度	展示場：夏場	25	55%	：冬場	20	55%	収蔵庫：	20	60% (日本画、染織、漆芸) 50 - 55% (その他の作品)	A	<p>収蔵品の保存及び管理環境の維持充実に図るため美術作品の種類、保管場所等の違いにより、温湿度や照明等を適正に管理するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>今後も、年間を通して適正な温湿度の管理をすることが望ましい。</p> <p>また、保存カルテを作成するとともに、長期的に保存環境を整備することが望ましい。</p>																															
	温度	湿度																																														
展示場：夏場	25	55%																																														
：冬場	20	55%																																														
収蔵庫：	20	60% (日本画、染織、漆芸) 50 - 55% (その他の作品)																																														
<p>(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。</p> <p>緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。</p> <p>伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。</p> <p>(3)-2 国内外の美術館等の修理、保存処理の充実に寄与する。</p>	修理の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修復を行った。</p> <p>次の作品について修理を実施。</p> <p>日本画11点 「八丈島」(池の面)、「秋郊」(以上 千種掃雲 作) 「春の信濃路」(南海の図) (以上 不染 鉄 作) 「舞妓林泉図(下図)」(土田麦僊 作) 「双鳩図」(小茂田青樹 作) 「夏座敷」(磯田又一郎 作) 「埴輪」(都路華香 作) 「竹取物語」(小林古径 作) 「緑陰」(小松均 作) コラージュ 2点 「日本の夏」(小さい傘) (以上 ハンナ・ヘッヒ 作) 素描 1点 「怪奇的なカットA-S」(谷中安規 作)</p>	A	<p>傷みの著しい日本画、コラージュ、素描等14点を修理するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>修理報告書を作成しデータベース化することは、美術作品を再修理する際の貴重な記録となるため、積極的に取り組むことが望ましい。</p> <p>また、多くの美術作品が修理を必要とする中で、中・長期的な修理計画を立てることが望ましい。</p>																																											

<p>2 公衆への観覧</p> <p>(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。</p> <p>(1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。</p> <p>(1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や 時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。</p> <p>なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。</p> <p>(東京国立近代美術館) 本館 年3～5回程度 工芸館 年2～3回程度 フィルムセンター 年5～6番組程度</p> <p>(京都国立近代美術館) 年6～7回程度</p> <p>(国立西洋美術館) 年3回程度</p> <p>(国立国際美術館) 年5～6回程度</p> <p>(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。</p> <p>(1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。</p> <p>(1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。</p> <p>なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。</p> <p>また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。</p> <p>(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。</p>	<p>展覧会の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>京都国立近代美術館では、公衆への観覧を事業を重視し、国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、魅力ある質の高い常設展・企画展を実施するため、最新の研究成果を基に当館の特色を十分に発揮することを念頭に展示事業を展開した。それぞれの展覧会については、以下のとおり。</p> <p>企画展等の開催回数 8回(前年度から継続の「ルネ・ラリック 1860-1945」展及び追加実施した「銅版画の巨匠 長谷川潔展」を含む)</p> <p>4階展示場約1,200㎡を所蔵品及び寄託品による、いわゆる常設展示場にあてており、年間約10回の展示替を行いながら所蔵作品等の各分野-工芸、日本画、油彩画、水彩画、素描、版画、彫刻、写真-にわたって紹介している。基本方針としては、近代日本の美術、工芸、写真について、系統的に展示することになっているが、未だコレクションが十全ではないことと、会場が決して広くはないために、十分な紹介は困難な状態にある。この欠を補うための収集活動(購入、寄贈、寄託)は積極的に行っているが、これは長い時間をかけるべき課題といえる。このような状況を踏まえた上で、当館のコレクションの特徴となっている長谷川潔(版画)、河井寛次郎(陶芸)、世界の写真は常に作品を入れ替えつつ、特設コーナーにおいて常時鑑賞できるよう努めているが、一方、常設展示に魅力を与えるべく小テーマを設定したテーマ展示も行っている。テーマの設定には3階の企画展との関連で決定するものと、全く単独で決めるものの2種類に大別でき、主な内容は次のとおりである。</p> <p>ア 3階の企画展と関連するもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代の生活デザイン(ルネ・ラリック展) ・アメリカの現代陶芸(ミニマル マキシマル展) ・日本画家とルネサンス美術(シエナ美術展) ・洋画家たちの滞欧作(長谷川潔展) ・浜田知明の銅版画(長谷川潔展) <p>イ 単独で企画したテーマ展示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・富本憲吉の陶芸 ・アンセル・アダムスの写真 ・マルセル・デュシャンと森村泰昌 ・京都の洋画家 ・ユージン・スミスの写真 ・北大路魯山人の陶芸 ・日本の現代陶芸 ・谷中安規の版画 ・川西英の版画 ・近代の漆芸 ・近代の水墨表現 ・民芸派の工芸 <p>このようなテーマ展示は毎回好評であるが、終了後に、知らなかったために見られなかったとの声もあり、周知広報についての課題が残る。</p> <p>なお、アンケート調査では、常設展について77%の肯定的意見があった。</p> <p>別紙「実績報告書37頁参照」</p>	<p>A</p>	<p>広く国民に優れた美術作品を観覧する機会を与えるため、国民の関心に応えたものや学術的意義の高いものなどバランスに配慮しながら常設展、企画展8回、地方巡回展2回を開催し、目標入館者数以上の実績を上げるなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>入館者に対するアンケート調査の結果では、概ね8割の肯定的な回答を得ており、展覧会に対する満足度は非常に高かった。</p> <p>なお、広報活動については、さらに充実を図ることが望ましい。</p> <p>京都国立近代美術館では、4階展示場において常設展を実施し、年間を通して10回の陳列替えをしながら、工芸、日本画、油彩画、水彩画、素描、版画、彫刻、写真を公開した。</p> <p>また、企画展と関連させたものや日頃の調査研究を活かしたテーマ展示を行うなど、魅力ある常設展とするため積極的に取り組んだ。</p>
<p>入場者数</p>	<p>120,000人以上</p> <p>84,000人以上 120,000人未満</p> <p>84,000人未満</p>	<p>133,254人(1日平均434人)(目標入場者数:120,000人)</p>	<p>A</p>		
<p>「ルネ・ラリック 1860-1945」</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>日本においてラリックの名は、主にガラス工芸作品、特に優美な香水瓶の制作と結びついて知られている。しかし彼は、19世紀末のいわゆるアール・ヌーヴォーの時代に、従来の因襲にとらわれない素材とモチーフの扱いで一世を風靡した宝飾デザイナーでもあった。本展は、一点ものである宝飾作品から大量生産可能なガラス作品の制作へと移行する過程で、両分野に稀有な足跡を残すとともに、常に芸術と産業の融合という近代デザイン最大のテーマと取り組み続けたラリックの偉業を総覧するために企画された。出品作品として、ジュエリー、ガラス作品そしてデザイン画など約400点がリスボンのグルベンキアン美術館やオルセー美術館、パリ装飾美術館など国内外から集められ、ラリック展としては過去最大規模の展覧会となった。また、小さなジュエリー作品や繊細なガラス作品を効果的に展示するため、陳列ケースを含めた展示設計を岡部憲明アーキテクチャーネットワークが担当し、展覧会コンセプトを的確に伝えつつも、暗闇に光りを帯びて幻想的に作品が浮かび上がる会場空間が大きな話題となった。</p> <p>なお、アンケート調査では、本展について92%の肯定的意見があった。</p> <p>別紙「実績報告書32～33頁参照」</p>	<p>A</p>	<p>ガラス工芸に対する国民の関心に応えた充実した内容の展覧会であった。</p> <p>また、効果的な展示手法を実施するなど意欲的な試みがなされた。</p>	
<p>入場者数</p>	<p>19,000人以上</p> <p>13,300人以上 19,000人未満</p> <p>13,300人未満</p>	<p>30,818人(1日平均2,371人)(目標入場者数:19,000人)(12年度～13年度:68,958人(1日平均1,231人))</p>	<p>A</p>		

「前田青邨展」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>前田青邨(1885 - 1977)は岐阜県中津川市に生まれ、16歳の時画家を志して上京、梶田半古塾に入門する。大正3年には日本美術院の再興に参加して、大和絵の伝統を軸に古今東西の美術を統合した明快でスケールの大きい歴史画や花鳥画を発表し、昭和30年には文化勲章を受章するなど、近代日本画壇を代表する画家として活躍した。本展は、画壇に登場した年に描かれたと推定される《巴》から最晩年作《天正貴婦人像》までの代表作86点に、本画とは別趣の魅力を持つ下絵やスケッチ点をあわせてほぼ年代順に展示し、青邨芸術の全貌を回顧した。なお、本展は当館が中心となって企画実施し、愛媛県美術館、笠岡市立竹橋美術館の両館に巡回した。</p> <p>京都や関西にゆかりのある作家の展覧会を主に開催してきた当館としては、東京の院展作家の個展を開催することは珍しいことであり、京都における前田青邨の回顧展は、昭和54年以来のことであった。青邨の作品を直に見る機会が少ない関西の鑑賞者のために、過去の青邨展にも殆ど出品されなかった大倉集古館の《洞窟の頼朝》を展示するなど、実作品が持つ魅力に少しでも多くふれてもらえるよう努力した。例えば、青邨作品の特徴の一つである画卷形式の作品は、全巻見ることができるよう長めの展示ケースを用意して頻りに巻替えを行い、図録には全図を掲載した。また、ヴァチカンに寄贈された《天正貴婦人像》が青邨展としては久しぶりに里帰りしたことも話題を呼んだ。</p> <p>企画者としては、一般に青邨の知名度は高いと考えて目標入場者数を予測したが、実際には(京都という地域性もある)知らない人が多く、目標に及ばなかった。今後は、美術史上では非常によく知られた作家であっても、広報に力を入れなくてはならないことを強く感じるとともに、若い世代の鑑賞者を近代日本画の展覧会に呼ぶ方策を考える必要があると感じた。</p> <p>なお、アンケート調査では、本展について91%の肯定的意見があった。 別紙「実績報告書33頁参照」</p>	A	京都において東京の院展作家の作品を紹介した、意義のあるものであり、内容も充実して見ごたえのある展覧会であった。今後も、引き続き作家の回顧展を開催することが望ましい。 広報活動については、よく検討した上で積極的に実施することが望ましい。
入場者数	30,000人以上 21,000人以上 21,000人未満	27,473人(1日平均743人)(目標入場者数:30,000人)	B	
「ミニマル・マキシマル・ミニマル・アートとその展開」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>ミニマル・アートは20世紀後半における最重要の美術動向の一つであり、その後の美術に決定的な影響を与えた。1960年代にニューヨークに登場したミニマル・アートは美術が成立する最小限の条件を探求し、無機的で無表情、作家の個性や手わざの跡の感じられない金属の箱や格子、角材や鉄板を作品として提示した。一見何の面白みもないこれらの作品はその単純さにもかかわらず、豊かな視覚体験をもたらし、作品と観者の関係、作品が置かれた場といった多様な問題へと道を開いた。</p> <p>ミニマル・アートの展覧会としては日本でほぼ10年ぶりに開かれた本展は、ドイツ、プレーメンのウエザーブルグ現代美術館によって企画された国際巡回展であり、60年代のミニマル・アートを代表する作家たちと、その影響のもとに独自の表を展開した若い世代の作家たちの作品を共に展示することによって、ミニマル・アートの特質と影響力を浮き彫りにした。</p> <p>日本では見ることのまれなミニマル・アートの代表的な作品とその影響のもとに制作された若手の意欲的な作品によって構成された本展は現代美術に関心をもつ多くの若い人々を引きつけたようである。ノートを片手に熱心に作品を見る多くの来場者が見受けられた。いささか難解な作品を理解してもらうために展覧会企画者、出品作家、担当学芸員によって開かれた三回にわたる連続講演会にも熱心な聴衆が詰めかけ、啓蒙的な意味をもつ展覧会になったように思われる。</p> <p>なお、アンケート調査では、本展について85%の肯定的意見があった。 別紙「実績報告書33～34頁参照」</p>	A	1960年代の重要な美術傾向を紹介した意義のある展覧会であり、内容的にも充実したものであった。特に若い世代の関心を集めた。 入館者の年齢など展覧会の実績を分析し、今後の企画に役立てることが望ましい。
入場者数	10,000人以上 7,000人以上 7,000人未満	16,595人(1日平均346人)(目標入場者数:10,000人)	A	
「京都の工芸 - 1945～2000」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>当館では、美術のみならず工芸の歴史や新しい動向にも絶えず注目し、数多くの展覧会を開催してきた。この展覧会は平成13年度当館の特展として開催し、その後、東京国立近代美術館工芸館に巡回した。</p> <p>本展は、1998年に近代京都の工芸の黎明期から揺籃期を展覧した「京都の工芸1910-1940」展に続き、美術工芸が大きく展開、発展した第2次世界大戦終結後から2000年までの約50年間を前回同様、陶芸、染織、漆芸の3分野に着目し検証した。</p> <p>陶芸では戦後間もない1947年に宇野三吾や林康夫らを中心に結成された四耕会や、中島清、八木一夫、鈴木治、山田光らが結成した青年作陶家集団、さらに1948年、青年作陶家集団の発展的解消として結成された走泥社など、それまでの壺や花瓶とはまったく異なるオブジェ作品が発表された。また、用も意識に入れた新しい意匠の工芸を目指し、1946年に富本憲吉を中心に結成された新匠美術工芸会(後に新匠会)も戦後早くから活動を繰り広げた。さらに抽象主義美術の団体であったモダンアート協会に、1954年、生活美術部が設立され陶芸に限らず工芸家たちが前衛的な作品を発表していたことも見逃せない事実であった。</p> <p>染織では、先にも述べた新匠美術工芸会、モダンアート協会生活美術部などが戦後直ぐには大きな意味を持ち、1963年、京都市立芸術大学を卒業した麻田脩二、志村光広、田島征彦ら若い染色家たちによって既成の団体展に出品しないことを合い言葉に無限大という創造性に力点を置いたグループが結成された。また、1970年代に京都からも多くの作家が出品するようになったスイス、ローザヌの国際タペストリー・ピエンナーレはファイバーワークと呼ばれる新しいジャンルを確立した。</p> <p>このような状況のなかで徐々に工芸と美術との境界が曖昧になっていき旧来の工芸概念ではとらえられないような新しい造形が生まれてきた。</p> <p>漆芸では戦前から活躍していた作家達によって、1945年に番浦省吾を中心に創人社が結成され、若手の作家が増えるとともに朱玄会と改名しましたが、さらに伊藤裕司、鈴木雅也、服部峻昇ら若手の作家により旧来の漆の概念では捉えられない形や手法で前衛的な作品に取り組むグループであるフォルメという会が結成されるに至った。しかしこの会は10年間の活動後に解散し、用の美の見直しをなかであらたに京都漆芸家協会が組織された。</p> <p>本展は、以上のような京都の戦後の工芸の動向を明らかにし、これらの活動に、戦前から巨大全国組織であった日展や、19年に文化財保護法が制定公布されて保護の対象となった伝統工芸の動き、また、手仕事に根ざしながらも優れたデザインによる日用品の制作と普及につとめたクラフトの動きなどにも注目しながら、20世紀後半の京都の工芸の多様な展開を検証する展覧会であった。</p> <p>この展覧会の開催で、今まで埋もれていた資料が発掘され、戦後55年の京都の工芸の歩みを研究する上で貴重な資料が多数見つけ意義のある展覧会であった。また、展覧会終了後、出品作品の中から寄贈作品も数点あり、本来なら購入して集めなければならない作品を所蔵できたことも成果の一つである。</p> <p>なお、アンケート調査では、本展について83%の肯定的意見があった。 別紙「実績報告書34～35頁参照」</p>	B	目標入館者数には届かなかったが、京都国立近代美術館の方針に基づいた企画であり、内容的にも優れた展覧会であった。 また、展覧会の実績を分析し、入館者数を増やすよう検討する必要がある。
入場者数	20,000人以上 14,000人以上 14,000人未満	10,797人(1日平均225人)(目標入場者数:20,000人)	C	

「オーストリア・デザインの現在 - 広がるデザインの世界」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>1960年代末から70年代初頭に建築家ハンス・ホラインやデザイン理論家ヴィクトール・パパネックらを排出し、世界の建築・デザイン界に大きな影響を与えたオーストリアの建築・デザインの現状を紹介するもので、ホラインやパパネックが拓いた理論的地平が、現在のオーストリアでどのように継承・展開されているかを知る興味深い展覧会となった。ともすれば「物の形」として理解されがちな「デザイン」という営みを、音楽や生活システム、環境保全や文化保護まで含めた広範な概念としてとらえ、現実の生活の中に実践しようとしている現代オーストリアの試みは、専門家たちにとって極めて刺激的なものであり、当館が過去に開催してきた建築・デザインの展覧会との一貫性も鮮明に示すことができた。一方で、この展覧会の背景を理解するためにはある程度の建築・デザイン史の知識が要求され、一部の観客から「抽象的すぎて分かりにくい」との指摘があったことも事実である。反省点として、展示作品だけではなく関連資料などを用いて、一般観衆の理解を深める努力をより徹底する必要がある。この意味で、京都大学工学部建築学科と協力して展覧会初日に開催したシンポジウム「オーストリア・デザイン：パパネックの遺産と現在」は、本展の歴史的・思想的背景を周知させる上で大きな成果があった。</p> <p>なお、アンケート調査では、本展について81%の肯定的意見があった。</p> <p>別紙「実績報告書35頁参照」</p>	B	内容は難解だが、斬新で意欲的な企画であった。今後、美術作品の理解促進に対する工夫や積極的な広報活動に取り組む必要がある。
入場者数	5,000人以上 3,500人以上 3,500人未満	4,660人(1日平均155人)(目標入場者数:5,000人)	B	
「小松均展」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>小松均(1902 - 1989)は山形県に生まれ、大正9年上京して川端画学校で日本画を学ぶが、大正13年第4回国画創作協会展に入選すると、翌年京都に移り土田麦僊に師事する。昭和3年の同協会解散後は院展に出品、以後数少ない京都の院展画家の一人として活躍し、昭和61年には文化功労者として顕彰されている。本展は、均の生誕百年を記念し、京都をはじめとするゆかりの地を巡回する没後初の大規模な回顧展として企画した展覧会である。「最上川」「富士山」「大原」の連作に見られるような独自の水墨によるパノラマ式の屏風作品など、大自然を野趣あふれる個性的な画風で表現した小松均の生涯の代表作60点をほぼ時代順に展示し、その全画業を紹介した。特に「大原」「富士山」「最上川」の連作はそれぞれまとめて展示し、簡単な解説パネルをつけて理解を促した。</p> <p>戦後の代表作はほぼ行方が判明しているが、戦前の作品は行方不明のものが多く、探索につとめたが出品できなかったのは残念であった。そこで、今後の調査活動に期待して、図版が残っている行方不明作品については可能な限り図録に掲載した。その過程で現存作品の多くが後年加筆されていたことが分かったのは、思わぬ収穫であった。</p> <p>本展は当館が中心となり企画実施し、宮城県美術館、山形美術館、富山県水墨美術館に巡回したもので、各館担当学芸員が互いに連絡を取り合って準備につとめた。宮城県美術館の担当者は院展の資料をはじめ、過去の美術雑誌等資料に精通しており、文献収集に役立った。山形美術館は均の故郷にあるため、親類縁者の持つ資料や、地元の新聞に載った均関係の記事収集に役立った。また、富山県には均のパトロンが多くおり、均自身戦前から何度も訪れた地であり、作品をはじめ多くの足跡が残っている。今回それらを富山県水墨美術館の担当学芸員が追跡し、不明だった均の北陸滞在中の動向が明らかになるとともに、何点かの行方不明作品の情報が得られた。それぞれの館が単独で企画したのでは、このようなことはあり得なかったであろう。今回は4館で展覧会を開催したことが非常に良い結果を生んだ。時間がなかったために、それらの情報、資料に関する研究は十分に行えなかったが、年譜や参考文献目録として発表しているため、今後の研究の一助にはなっただけである。</p> <p>なお、アンケート調査では、本展について95%の肯定的意見があった。</p> <p>別紙「実績報告書35～36頁参照」</p>	B	<p>目標入館者数には届かなかったが、共催の美術館の学芸員と協力し、見応えのある優れた展覧会を実施した。今後も、他の美術館等と連携協力を図ることが望ましい。</p> <p>また、展覧会の実績を分析し、入館者数を増やすよう検討する必要がある。</p>
入場者数	30,000人以上 21,000人以上 21,000人未満	16,937人(1日平均470人)(目標入場者数:30,000人)	C	
「シエナ美術展 - 絵画・彫刻・工芸の精華 - 」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>本展覧会は「日本におけるイタリア2001」年の記念事業のひとつとして企画され、その関西地区における巡回館として担当開催したものである。イタリア中部・トスカーナ地方の中心に位置する古都シエナの、初期ルネサンスから19世紀にわたる美術の展開を絵画・彫刻・陶器などの作品101点によって紹介したが、これまで同時代のイタリア美術といえば、わが国ではレオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロを代表とするいわゆるフィレンツェ・ルネサンスの成果を中心に語られてきた感が強い。そうした状況を反省する意味で、本展は、フィレンツェと並んで大きな勢力を有し、イタリアさらにはヨーロッパ美術を導いたシエナの、優雅で繊細な表現を代表する作品群をわが国ではじめて公開し、改めてイタリア美術再考の機会を提供することを意図した。</p> <p>さらに本展覧会では、出品作品すべてが、本国イタリアでも常時公開されていないモンテ・デイ・パスキ・ディ・シエナ銀行というイタリア屈指の名門銀行のコレクションから構成されていた点も貴重であった。そして美術館ではなく、一銀行が所蔵する作品によって、シエナのほぼ500年の美術の歴史が展望され得るという事実が提示されたことは、文化国家イタリアの底辺の広さを再認識できる好機となったと思われる。</p> <p>なお、当館では、東京ステーションギャラリーに続く第2会場として開催したが、事前にイタリア側とも、とりわけ会場構成については綿密な連絡をとりあい、約20点の板絵作品の保全処置や、展示台の作成さらには展示室の動線や照明効果などを含めて、イタリア側にも満足のものとなり、後に続く開催館(群馬県立近代美術館、山口県立美術館)における展示の規範となった。また当館では、シエナ美術を代表するピエトロ・ロレンツェッティの小型祭壇画が特別出品された。しかしながら、反省点としては、作品の解説パネルについての苦情が、来館者アンケートに数多くみられたことがあげられよう。これについては、シエナ美術が大多数の一般の鑑賞者にとってはじめて目に触れるものであったことから、図録の学術的な視点とは異なった角度で、たとえば作品のモチーフの初歩的な説明や図像の解説など、パネルの規格や文字の大きさ、文字情報の量なども含めて、今後配慮検討されるべき課題として残った。</p> <p>なお、アンケート調査では、本展について92%の肯定的意見があった。</p> <p>別紙「実績報告書36頁参照」</p>	B	<p>目標入館者数には届かなかったが、日本で馴染みの薄いシエナ美術館を紹介する意義のある展覧会であった。</p> <p>また、展覧会の実績を分析し、入館者数を増やすよう検討する必要がある。</p>
入場者数	40,000人以上 28,000人以上 28,000人未満	27,749人(1日平均730人)(目標入場者数:40,000人)	C	

	<p>「銅版画の巨匠 長谷川潔展」(追加実施)</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>第1次世界大戦終結後フランスに渡り、89歳で没するまで60年間、故国の地を踏む事なくパリに客死した長谷川潔(1891-1980)の回顧展である。長谷川は早くから創作版画の草分けとして知られたが、渡仏後銅版画に専念し、ピュラン、クアタント、ポアント・セーシュなどのあらゆる技法において優れた作品を残した。とりわけ、すでに忘れられていたマニエール・ノワールを近代版画の技法として復活させたことで世界的に高い評価を受けている。また長谷川はすぐれた油彩画家としても知られ、サロン・ドートンヌの会員にも挙げられている。</p> <p>本展では、当館の約190点に及ぶ長谷川作品の自選コレクションの全貌を10年ぶりに紹介した。</p> <p>本展は当館における大規模な回顧展の3回目となる。第1回展(1980)は長谷川生前の最初で最後となったもので、この展覧会により、日本では未紹介であった長谷川の画業の全貌が初めて知らされる契機となり、没後10年を記念した第2回展(1991)は長谷川ファンをより多くする機会となったが、今回はそれからさらに10年を経てその全貌を改めて見たいという多くの鑑賞者の要望に応えるものであった。会場はシンプルな構成の中に作品を浮かび上げ、要処要処に作家の言葉をパネルとして掲示し、静謐な雰囲気の中で作品の中に流れる長谷川の自然観、世界観を感じ取れるよう考慮した。この点については来館者から好評であったが、本展が追加実施した展覧会である関係上、新聞社等の共催メディアがなかったため周知広報が十分であったとは言えず、当初の予想に比して入場者が少なかったことは反省を要する。ただ、入場者の13%の人がカタログに代わる『京都国立近代美術館所蔵品目録 長谷川潔』を購入し、愛好者層の広がりを実感した。また、すべての人に所蔵作品の全貌がわかるよう作品リストを無料で配布するとともに、美術館ニュース『見る』に特集を組み、魚津章夫「長谷川潔の芸術 永遠の美を探る」、猿渡紀代子「長谷川潔作品とリズム」の二本の論文を掲載して無料配布し、好評であった。また、講演会を開催し、版画技法についての解説に聴衆は関心を持ったようで、この方面の教育普及のさらなる必要性を感じた。</p> <p>なお、アンケート調査では、本展について89%の肯定的意見があった。</p> <p>別紙「実績報告書36~37頁参照」</p>	<p>A</p>	<p>京都国立近代美術館がこれまで収集した美術作品の成果を発表したものととして、意義のある充実した内容であった。</p>
	<p>入場者数</p>	<p>8,000人以上 5,600人以上 5,600人未満</p>	<p>6,737人(1日平均198人)(目標入場者数:8,000人) (平成13年度~平成14年度:8,807人(1日平均220人))</p>	<p>B</p>	
	<p>国立博物館・美術館巡回展「かざりとかたち」</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>平成13年度から、国立博物館並びに国立美術館が独立行政法人としてスタートしたのにもなつて、平成6年度から文化庁と国立博物館・国立美術館及び各開催館との共催で開いてきた「国立博物館・美術館巡回展」も、独立行政法人国立博物館・国立美術館と各開催館との共同事業として生まれかわることとなったが、本展覧会「かざりとかたち」はそのはじめての企画として、独立行政法人国立博物館京都国立博物館とともに展示構成・内容を担当し、鹿児島県歴史資料センター黎明館及び沖縄県立博物館の2会場で開催したものである。</p> <p>これまでの「国立博物館・美術館巡回展」は「日本の美」や「絵画への招待」といった、どちらかといえば名品主義の作品編成によって、国宝や重要文化財などの国有品の紹介といった視点に比重がおかれてきたようだ。もちろん、東京や京都から遠く離れて暮らす人々にとっては、日頃目にする機会の少ない作品に触れることで、それはそれで意義はあるのだが、しかしいつまでもこうした観点からだけで「巡回展」が開催され続けたとするなら、決して開催館との共同事業だという意識が芽生えることはなかったろう。しかし今回、「巡回展」が文化庁の手を離れ、作品を所蔵するいわゆる現場サイドにその内容の全てが任されることとなったのをむしろ好機と捉え、明確にテーマを設定し、担当館同士の協議を密にして、加えて開催館にもそれぞれの館を代表する所蔵品の出品展示を依頼して積極的な共同事業としての体制がとれたことは意義深い。</p> <p>具体的には、今回京都に位置する博物館と美術館との企画という性格から、日本美術においてももっとも特色のある現象の一つである「装飾性=かざり」の問題をテーマとし、しかも開催2会場が、鹿児島と沖縄というその個性的な風土性をも考慮して、両県ゆかりの作品によって構成された「南海のかたち」という章も加え、考古遺物から現代の美術作品に至るまで計16点の出品作品によって、展覧会を組み立てた。</p> <p>当初は考古遺物から刀剣、鎧、着物などの染織品、蒔絵や陶器などの工芸品、さらには屏風、襖そして近代の日本画や洋画など、いずれもわが国の「装飾性」の概念を説明するには不可欠のものとは思われていても、展示スペースに比して、あまりにもジャンルが多岐にわたりすぎることも懸念されたが、むしろ時代を超えて異なる多様なジャンルの作品が一堂に会する「展覧会」そのものの醍醐味に、博物館と美術館とが共同して一つのテーマをつくりあげるといった新たな可能性を見いだす思いがした。また、意外にもこれまで、時代を超えてわが国の「装飾性」の問題を検討する展覧会が開催された例も少なく、その意味でも今回の展覧会は貴重な場となっていたらう。実はそれというのも、ここにこそ国宝や重要文化財を数多く所蔵する国立館の力が発揮されているといえるからで、たとえばある地方の公立館でこうしたテーマの企画を設定したとしても、出品作品には自ずと限界が生じてくるだろう。ましてや今回のように開催会場が鹿児島と沖縄という地域で、国宝3点、重要文化財14点、重要美術品2点、さらには両県の県指定有形文化財6点も含まれたこのような大型の展覧会が開催されたのも、きわめて意義深いことだといわなければならない。</p> <p>さらに本展覧会の図録も、これまでの「巡回展」の内容を超える充実したものとなったこと、そして「南海のかたち」の章に加えた、当館所蔵の河井寛次郎の「扁壺」や濱田庄司の琉球ゆかりの工芸品などにも、大きな関心が寄せられたことを最後にぜひつけ加えておきたい。</p> <p>別紙「実績報告書37頁参照」</p>	<p>A</p>	<p>公立博物館等と連携協力を図り、地方において優れた美術作品を観覧する機会を提供するものであった。今後も、開催館の要望にできるだけ応え、外部研究者と協力して学術的意義のある質の高い展覧会を開催することが望ましい。</p> <p>また、国立博物館と共催することの意義について、今後、検討する必要がある。</p>
	<p>入館者数</p>	<p>13,688人以上 9,581人以上 9,581人未満</p>	<p>鹿児島県歴史資料センター黎明館 5,725人(1日平均179人) 沖縄県立博物館 6,927人(1日平均257人) 計 12,652人</p>	<p>B</p>	
<p>(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。</p>	<p>貸与の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>収蔵品については、外部からの出品依頼が多く、その貸し出し手続きや作業はかなりの時間と労力を要するが、常設展示室が決して広くなく、当館において十分に所蔵品を紹介できないことをも考慮し、作品の保存に支障がない範囲でできる限り出品に応じた。</p> <p>また、河井寛次郎展の巡回については後援という立場で積極的に貸与活動を行って来ているし、平成15年度からは日本画の巡回展を行うべく現在その準備にかかっている。</p> <p>これらは収蔵品の有効活用を意図したものであると同時に、公私立美術館の活動を積極的に支援しようとするものであり、各館から好意的に受けとめられた。</p> <p>貸与件数 632点 98件(国内 621点 94件、海外 11点 4件) [平成13年度展覧会協力等] 「河井寛次郎の世界一熱情の陶匠」 会期:平成14年1月26日(土)~3月10日(日)(38日間) 会場:茨城県陶芸美術館 主催:茨城県陶芸美術館 後援:京都国立近代美術館、NHK水戸放送局</p>	<p>A</p>	<p>美術作品の効果的活用を図るとともに、他館との相互活用を促進するため、美術作品632点を貸与するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>今後も、貸与等の要望が増えると思われるが、収蔵品の保存状態に留意し、展覧会の趣旨を考慮しながら、幅広くその要望に答えることが望ましい。</p>

<p>3 調査研究</p> <p>(1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。</p> <p>収蔵品に関する調査研究 美術作品に関する調査研究 収集・保管・展示に関する調査研究 美術史、美術動向、作者に関する調査研究 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等</p> <p>(1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。</p> <p>(2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。</p> <p>また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。</p>	<p>調査研究の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>中期計画に基づいて調査研究をすすめたが、これらの中には 本年度のみの調査研究と数年にわたるもので本年度を最終年度とする調査研究、 さらに次年度以降に継続する調査研究が含まれる。</p> <p>については「前田青邨展」、「京都の工芸－1945－2000」展、「小松均展」の図録への研究成果の執筆及び関連書誌への執筆として発表した。ポーラ美術振興財団からの助成により追加実施した「ミニマル・アートについての調査研究」も「ミニマル マキシマル－ミニマル・アートとその展開」展の図録にその成果を発表した。これらのうち「前田青邨展」10.78%、「小松均展」9.56%と入場者の約10%の人が図録を購入し、特に「ミニマル・マキシマル」展については予想以上の12.09%という高い数値となった。しかし、「京都の工芸」展の図録は5.46%と低く、近年の現代美術への関心の高さと工芸への関心の薄さを感じさせた。ただ、これらの数値が単純に図録の質的内容と直接結び付くものとは思えないし当館として必要な調査研究は今後も積極的に取り組んで行きたいと考える。</p> <p>の「ドイツ工作連盟に関する研究」、「神坂雪佳の総合的研究」、「アメリカ現代陶芸に関する研究」、「海外所在の近代日本美術品についての所蔵美術館との調査研究」については、平成14年度以降に開催する展覧会に関連する研究であり、継続して調査研究をすすめていく予定である。</p> <p>これらの調査研究は当館において開催する展覧会に直接関わるものであるが、このようなかたちの他に、展覧会とは直接関わらないが基礎的な調査研究として不可欠のものもあり、将来的には積極的に他機関の研究助成を受けてすすめて行きたい。</p> <p>別紙「実績報告書40～41頁参照」</p>	<p>A</p>	<p>収集・保管、公衆への観覧、教育普及の事業など美術館活動の推進を図るため、近代京都の工芸に関する調査研究、ドイツ工作連盟に関する調査研究、アメリカの現代陶芸に関する調査研究等を実施するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>調査研究については、外部資金の獲得に努め、幅広く外部研究者との交流を促進するなど積極的に取り組むことが望ましい。</p> <p>なお、研究成果については、図録等の刊行物のみならず、学会等においても幅広く積極的に発表することが望ましい。</p>
<p>4 教育普及</p> <p>(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。</p> <p>(1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。</p>	<p>資料の収集及び公開（閲覧）の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>当館は以前から国内の美術館、大学、関係研究機関との資料交換に力を注いでおり、当館で開催した展覧会図録及び年報を送付し、先方からも展覧会図録、年報、研究紀要等の資料を受領している（年間約350件）。海外の美術館とは、ロンドンのテート・ギャラリー、サンフランシスコ近代美術館、ロサンゼルス現代美術館、スウェーデン国立美術館、サン・エチエンヌ近代美術館、フィラデルフィアのムーア大学図書館、スペインのアトランティック近代美術センターと毎年各館が開催した主要な展覧会図録の相互送付を継続している（年間約50冊を受領。）</p> <p>また、当館では美術図書閲覧室を新設する空間的余裕はない。従って美術資料、特に収蔵作品のデータベース化は、一般利用者の興味に対応できるきわめて有効な手段であると思われる。館内への情報端末の設置も完了した現在、所蔵作品のデータベース化の完成は急務である。入力作業は50%程度まで進んだが、専従職員がいない状況を改善するために、この分野での経験を積んだボランティア・スタッフの活用も研究課題である。より専門的な問い合わせについては学芸スタッフが対応し、図書資料を公開し個別に研究・調査の指導にあたっているが、より能率的な体制の整備が今後の課題である。内外の美術館や作家に関する問い合わせに対応するため、いままで研究員が個別に蓄積してきた情報を集積し、公開できないかを検討している。</p> <p>別紙「実績報告書41～42頁参照」</p>	<p>B</p>	<p>国内外の美術館、大学、関係研究機関と積極的に資料交換に取り組み約400冊を収集し、新たに4階フリースペースにおいて展覧会・所蔵品図録等のコーナーを設置するなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>今後も、4館の資料を登録及び検索できる現代的システムの開発や広報の強化を図り、より一層、資料を活用する必要がある。</p>
<p>(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。</p> <p>また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。</p>	<p>児童生徒を対象とした講座等の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>当館では美術館に対する社会的要請の変化を考慮し、1998年頃から美術館における教育普及活動の研究・試行を続けてきた。特に中学生を対象としたワークショップ、教育現場との協同研究では、関係方面から一応の評価を得る実績を積み重ねてきた。1998年に中学生を対象とした2週間にわたるワークショップの経験を踏まえ、京都市教育委員会と協力し、美術教育の現場教師に美術館の創造的利用を促す研究会、ワークショップを継続してきた。平成13年度も教師側が発想し運営したワークショップ（抽象絵画を題材に小学生と教師が対話し、相互の対話能力を高めようとする試み）、中学校の新たな事業である「生き方探求・チャレンジ体験」の一環として中学生に3日間の美術館業務を体験させる試みなどのプログラムが実現された。こうした教育現場からの要望によるプログラムの実施件数はまだ少ないが、これは教育現場が外部機関との協力について未成熟であることが理由の一つと考えられる。週休2日制が完全実施された今年度からは美術館への協力依頼が増加すると予想される。当館は教育現場の人々に美術館の多様な利用を促していきたい。今後も美術教育に携わる教師を対象に教育普及に関する研究セミナーを実施し、美術館の創造的利用を喚起する予定である。</p> <p>子供のためのワークショップの実施 京都市立小学校教諭グループと協力し小学1年生から6年生を対象とするワークショップを実施（平成14年2月9日(日)参加者47名(保護者17名 児童30名)）。</p> <p>「生き方探求・チャレンジ体験」事業の実施 上記計画に掲げたワークショップ以外に、京都市教育委員会、京都市立中学校と連携し、中学生を受入れ、美術館業務を体験させることにより、美術への関心を深め、社会の主体としての自覚を育成することとして事業「生き方探求・チャレンジ体験」を実施。</p> <p>(平成14年1月29日(火)～31日(木)、安祥寺中学校2年生 3名 平成14年2月26日(火)～28日(木)、神川中学校2年生 4名)</p>	<p>B</p>	<p>教育普及の取組みの充実や学校教育における美術館の活用の推進を図るため、限られた人員と予算で積極的にワークショップを実施し、平成12年度以上の実績を上げるなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p>
<p>子供のためのワークショップの開催件数</p>	<p>1回以上</p>	<p>-</p>	<p>0回</p>	<p>1回実施 (平成14年2月9日(日))</p>	<p>A</p>
<p>子供のためのワークショップの参加者数</p>	<p>8人以上</p>	<p>6人以上 8人未満</p>	<p>6人未満</p>	<p>参加者47名 (保護者17名 児童30名)</p>	<p>A</p>

<p>(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。</p> <p>それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。</p> <p>また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。</p>	<p>講演会等の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>当館では展覧会開催ごとに1,2回程度、一般入場者を対象とした内容の講演会や音楽会を開催する一方で、専門的知識を求められる講演会、シンポジウムを、大学関係者と協力して年間1回開催した。各講演会やシンポジウムはおおむね好評であり今後も継続し充実させていく。</p> <p>別紙「実績報告書42～44頁参照」</p>	<p>A</p>	<p>美術作品等の理解促進を図るため、限られた人員と予算で積極的に講演会、音楽会、シンポジウムを実施し、平成12年度以上の実績を上げるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>また、講座等については、年齢・性別・学歴を問わず、幅広い国民各層を対象とするよう配慮し、その他の業務に支障を来たさない程度に充実させることが望ましい。</p>
	<p>講演会等の開催件数 講演会等</p>	<p>2回以上</p> <p>1回</p> <p>0回</p>	<p>講演会等 12回</p>	<p>A</p>	
	<p>シンポジウム</p>	<p>1回以上</p> <p>—</p> <p>0回</p>	<p>シンポジウム 1回</p>	<p>A</p>	
	<p>講演会等の参加者数</p>	<p>766人以上</p> <p>536人以上 766人未満</p> <p>536人未満</p>	<p>参加者 984人</p>	<p>A</p>	
	<p>シンポジウムの参加者数</p>	<p>58人以上</p> <p>41人以上 58人未満</p> <p>41人未満</p>	<p>参加者 62人</p>	<p>A</p>	
	<p>講演会等に対するアンケート結果</p>	<p>80%以上</p> <p>56%以上 80%未満</p> <p>56%以上</p>	<p>有意義である旨の回答数 各講演会平均 86%</p>	<p>A</p>	
<p>(4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。</p> <p>(4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員(キュレーター)の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。</p> <p>(4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。</p> <p>(4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。</p>	<p>研修等の取組み状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>(1)公私立美術館の展覧会の充実、調査研究活動の援助のため展示指導や調査研究資料の提供などを積極的に行うとともに、公私立美術館学芸担当職員の資質の向上に貢献するため、上級キュレーター実務研修を実施した。</p> <p>また、学芸員等の人材養成に貢献するため、大学生の学芸員資格取得のための博物館実習を実施した。各大学からの要請に応え、積極的に実習生の受入を行った。</p> <p>上級キュレーター研修を実施し、公立美術館関係者2名を受け入れた。</p> <p>ア.氏名 廣田いずみ 所属 小松市立宮本三郎美術館 職名 学芸員 期間 平成13年11月1日～平成13年12月28日</p> <p>イ.氏名 小川知子 所属 大阪市立近代美術館建設準備室 職名 学芸員 期間 平成14年1月4日～平成14年2月28日</p> <p>大学生の学芸員資格取得のための博物館実習への協力 大学生を対象に学芸員資格取得のための「博物館実習」に係る学生を受入れ実習を行った。</p> <p>【第 期】平成13年8月20日(月)～8月24日(金) 5日間 計 10大学 15名</p> <p>【第 期】平成13年8月27日(月)～8月31日(金) 5日間 計 2大学 4名</p> <p>【二期間】平成13年8月20日(月)～8月24日(金)10日間 計 4大学 4名 合計15大学 23名</p> <p>別紙「実績報告書45～46頁参照」</p> <p>(2)公私立美術館・博物館等の開催する多くの展覧会に対して積極的に協力したが、特に当館所蔵品を多く貸与した「河井寛次郎の世界-熱情の陶匠」(茨城県陶芸美術館主催)では、後援という立場で作品の選定から展示に至るまで全面的に協力・支援を行った。</p> <p>別紙「実績報告書40～41頁」 他の美術館等における調査・研究に対する協力」欄参照」</p>	<p>B</p>	<p>美術館関係者等の人材育成及び人的ネットワークの形成を図るため、公私立博物館等の学芸担当職員及び博物館実習生等23名を受入れ、美術館の職場を体験する機会を提供するなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>学芸担当職員については、今後も、受入可能な人数の範囲内で積極的に取り組む必要がある。ただし、博物館実習生については、美術館側の負担にならないよう、受入れ状況を常に見直すことが望ましい。</p> <p>なお、外国美術館の学芸員との交換研修なども検討する必要がある。</p>
<p>(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。</p> <p>また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。</p>	<p>広報活動の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>国立美術館の行っている事業への理解の促進を図るため、利用者をはじめ広く国民に対し情報を提供することとし、当館で施している様々な事業を紹介する各種の刊行物、ホームページなどを利用した広報活動を行った。</p> <p>「年報」、「京都国立近代美術館概要」など当館の事業を紹介するものの発行をはじめ、「展覧会カレンダー」、「京都国立近代美術館案内リーフレット」といった一般利用者向けのもの、美術館ニュース「見る」、各展覧会の図録、収蔵品目録『京都国立近代美術館所蔵名品集[日本画]』などの調査研究、収集活動の成果をまとめたものなど、多くの刊行物を発行するとともに、「年報」は逐次ホームページに掲載し、広く研究分野への資料の提供に努めた。</p> <p>また、「国立美術館パンフレット」を発行したほか、「国立美術館ホームページ」を開設し、4館共同による広報体制の強化努めた。</p> <p>別紙「実績報告書46～51頁参照」</p>	<p>A</p>	<p>文化、美術作品及び国立美術館について国民の理解促進を図るため、展覧会図録、年報、展覧会カレンダー、リーフレット、美術館ニュース「見る」、収蔵品目録「京都国立近代美術館収蔵品名品集[日本画]」等を発行するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>より一層、国民に美術館活動が理解されるよう内容を工夫し、今後も積極的に実施することが望ましい。</p> <p>また、インターネットを積極的に活用した広報について検討することが望ましい。</p>

	<table border="1"> <tr> <td>出版件数 美術館ニ ュース 「視る」</td> <td>6回以上</td> <td>4回以上6 回未満</td> <td>4回 満</td> <td>美術館ニュース「視る」 6回発行(第394号~第399号)</td> <td>A</td> <td></td> </tr> <tr> <td>収蔵品目 録</td> <td>1回以上</td> <td>-</td> <td>0回</td> <td>収蔵品目録 1回発行『京都国立近代美術館所蔵名品集[日本画]』</td> <td>A</td> <td></td> </tr> <tr> <td>展覧会カ レンダー</td> <td>3回以上</td> <td>2回</td> <td>1回</td> <td>展覧会カレンダー 3回(種)発行</td> <td>A</td> <td></td> </tr> </table>	出版件数 美術館ニ ュース 「視る」	6回以上	4回以上6 回未満	4回 満	美術館ニュース「視る」 6回発行(第394号~第399号)	A		収蔵品目 録	1回以上	-	0回	収蔵品目録 1回発行『京都国立近代美術館所蔵名品集[日本画]』	A		展覧会カ レンダー	3回以上	2回	1回	展覧会カレンダー 3回(種)発行	A						
出版件数 美術館ニ ュース 「視る」	6回以上	4回以上6 回未満	4回 満	美術館ニュース「視る」 6回発行(第394号~第399号)	A																						
収蔵品目 録	1回以上	-	0回	収蔵品目録 1回発行『京都国立近代美術館所蔵名品集[日本画]』	A																						
展覧会カ レンダー	3回以上	2回	1回	展覧会カレンダー 3回(種)発行	A																						
(1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。 (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。 (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。 また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。	収蔵品の情報デジタル化及びその活用状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<table border="1"> <tr> <td>ホームペ ージのアクセ ス件数</td> <td>88,000件 以上</td> <td>61,600件以 上88,000件 未満</td> <td>61,60 件未 満</td> <td>約120,000件</td> <td>A</td> <td></td> </tr> </table>	ホームペ ージのアクセ ス件数	88,000件 以上	61,600件以 上88,000件 未満	61,60 件未 満	約120,000件	A		13年度当初における所蔵品約6,600点のうちこれまでに約3,000点の文字データ及び約2,850点の画像データのデータベース化を実施した。ただし、著作権の存続している作品が多数を占めるため外部への公開については、適切に対応していく。 独立行政法人国立美術館のインターネットホームページを開設、中期目標、中期計画、年度計画、業務方法書等を公表した当館のホームページ(平成8年度開設)においては、館の概要、展覧会情報、常設展示目録、年報、ミュージアムショップ喫茶室の情報などを広く館外へ発信した。	A	文化、美術作品及び国立美術館について国民の理解促進を図るため、平成13年度末までに、収蔵品約6,600点のうち、文字データ約3,000点、画像情報約2,850点のデジタル化を終了し、美術館情報についてホームページで公開するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 また、美術作品に関する情報のデータベース化にあたっては、標準化を検討するなど国民が簡便な方法でアクセス出来るシステムの開発を常に心懸けることが望ましい。 美術作品がコンテンツの素材として注目される中で、著作権について慎重に取り組むことが望ましい。 ホームページについては、さらに内容、デザイン、外国語版など充実させることが望ましい。														
ホームペ ージのアクセ ス件数	88,000件 以上	61,600件以 上88,000件 未満	61,60 件未 満	約120,000件	A																						
(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。	ボランティアの活用状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。		「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座」を主催する京都市教育委員会等と連携し、ボランティア受入れについて、討をはじめた。	B	ボランティアの受入れについては、その方針をよく検討したうえで実施する必要がある。																					
(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。	渉外活動の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。		美術館事業を充実させるためには、企業、財団等からの研究・展覧会等への助成、後援、協力を得るなど積極的な企業等と連携を図ることが必要である。そのため広く企業等に対する美術館事業への理解の促進を図り、有効な事業展開、支援を得られるよう渉外活動に努めた。 展覧会広報に関する渉外活動 京阪電鉄大阪主要駅に広報板を設置 鉄道、バス、地下鉄等との連携によるポスターの掲出・チラシの配布 市内各ホテル、観光案内所、生涯学習センターなどでのポスターの掲出・チラシの配布 各種事業所等での展覧会ポスター・チラシの配布協力の確保 京都国立近代美術館支援財団「堂本印象記念近代美術振興財団」との連携 旅行代理店とのタイアップ	B	国立美術館の業務の充実を図るため鉄道・バス・ホテル・観光案内所等と広報関係の連携協力し、旅行代理店とのタイアップするなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。 今後も、引き続き検討する必要がある。																					
5 新たな美術館施設の円滑な運営について (1) 東京国立近代美術館本館については、平成14年の開館に向けて、体制整備、展示等の実施準備を進め、開館後は円滑な事業実施に努める。特に、展示面積の増加を機に展示内容の一層の充実を図る。 (2) 国立国際美術館新館については、平成16年の移転に向けて、体制整備、展示等の実施準備を進め、開館後は円滑な事業実施に努める。具体的な管理運営のあり方等については開館までに検討を進める。	開館への準備状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。		東京国立近代美術館及び国立国際美術館で実施。		(東京国立近代美術館本館及び国立国際美術館で評定。)																					
6 新国立美術展示施設(ナショナル・ギャラリー)(仮称)の開設に向けた準備について 文化庁が平成18年を目途に開設を予定している新国立美術展示施設(ナショナル・ギャラリー)(仮称)について、文化庁と連携・協力し、その円滑な開設に向けた体制整備、展示事業等の準備を推進する。		法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。		平成14年度から実施。		(平成14年度から評定する。)																					

<p>7 その他の入館者サービス</p> <p>(1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。</p> <p>(1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。</p> <p>(1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に行い、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。</p> <p>(1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。</p> <p>(2)入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。</p> <p>(3)ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。</p>	<p>その他の入館者サービス</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>入館者サービスは観覧者の満足度を高める重要な要素の一つであるとともに、美術館におけるリピーターの増加といった面からも重要な課題と言える。</p> <p>高齢者・身体障害者等への配慮、建物のバリアフリー化については1986年の新館建設時に配慮されているが、建築後15年目を迎えた一昨年に展示場の床の改修時に更にバリアフリー化を進めるために常設展会場の床をカーペットからゴムタイルに変更し、車椅子によるスムーズな鑑賞を行えるように改善をした。また、盲導犬、介助犬による鑑賞ができるようにした。</p> <p>これにより、高齢者・身体障害者等にやさしい美術館として一歩前進したものと考えている。</p> <p>案内情報の充実、車椅子の提供等では、2000年8月から1階のエントランスホール、ロビー、喫茶、ショップ及び4階の展望ロビーをフリーゾーンとしたこととともない、フリーゾーンだけの利用者数が総入館者数の約20%あり、このシステムの利用者が相当数あることが分かる。そこで、観覧者だけでなくフリーゾーンの利用者に対しても各種の案内が必要であり1階のエントランスホールにインフォメーションを設置している。ここでは美術館内の案内だけでなく他の美術館の展覧会情報や周辺の観光情報の提供も行っているが、更に充実した機能性を持たせるよう順次取り組んでゆく必要があるものと考えている。また、高齢者、障害者等の社会参加を促進するとともに、人にやさしいまちづくりを進めるために「京都府福祉のまちづくり推進協議会」が取り組んでいるホームページに当館の施設利用案内を掲載した。これによって、事前に目的地の施設内容及び周辺情報(車椅子専用駐車場、スロープ、トイレ、利用料金の減免等)を知ることができ、安心して出かけることができるようになった。</p> <p>展示説明の見直しなど、鑑賞環境の充実等について、当館では作品展示に際して、許す限り結界を設置しないで間近で鑑賞ができるようにしており、鑑賞者からは好評を得ている。展示照明用スポットは当館の展示場にあわせた独自の器具を使用しており、むらの少ない均質な照明を可能にしている。音声ガイドについては館独自のものはないが、共催展では業者とのタイアップで実施している。また、アンケートの状況を踏まえて、キャプション等の文字表示を大きくするなど適切な改善を今後行うこととし、加えて作品リストを無料配布することにより鑑賞者の手元に展覧会資料が残るようにする。(作品リストの無料配布については常設展(日本語・英語版)、企画展(長谷川潔展(日本語・英語版))ですでに実施。)</p> <p>小中学生の常設展入場料の無料化、観覧時間の拡充については、本年2月21日より常設展観覧料を無料とし、同日から開催された「長谷川潔展」(当館単独主催)についても同様に無料の措置をした。これによって、子供の頃から美術館に親しむ環境づくりに貢献できるものと考えている。今後においても常設展に限らず当館単独主催の企画展についても同様の措置が行えるよう努力する。また、14年度以降に予定されている新聞社等との共催展においても小中学生の無料化が実現できるよう各新聞社等に理解を求めていくことも重要な課題であると考えている。開館時間については、午前9時30分から午後5時までであるが1988年より概ね4月から10月の毎週金曜日を夜間開館日として午後8時まで時間延長している。これについては観覧者からは好評を得ているが、展覧会によっては極端に利用者が少ない場合もあり、経費等の面からも効率的な運営を考慮しながら今後も継続して実施する。なお、夜間開館の時期、曜日、時間帯については、来館者のニーズに応えられるようアンケート調査等を注視して今後も引き続き検討課題とする。</p> <p>フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実については、2000年8月より1階エントランスホール、展示ロビー、4階展望ロビーをフリーゾーンとして観覧券を購入しなくてもロビーでくつろいだり、喫茶やショップなどを利用できるようにシステムを改善している。1階エントランスホールでは100インチのマルチビジョンを使用して展覧会に関連したビデオ放映を行い展覧会の概要が分かるような情報を機会あることに提供している。ミュージアムショップでは、展覧会関連グッズのほか最近一般書店ではあまり扱われなくなってきた美術関係書籍を充実させており、これは来館者の好評を得ている。</p> <p>別紙「実績報告書51～53頁参照」</p>	<p>A</p> <p>入館者に対するサービスの向上を図るため、高齢者、身体障害者のためのトイレ、エレベータ及びスロープ等の設置、床のバリアフリー化、盲導犬・介助犬に対する配慮、展示解説・キャプションの見直し、音声ガイド、小中学生の常設展の無料化、夜間開館、一階のエントランスホール等のフリーゾーン化など中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>特に、小中学生の常設展の無料化は、今後の教育普及事業との相乗効果を期待する。</p> <p>今後も、アンケート結果の分析やモニター制度を検討するなどの確に入館者のニーズを把握し、きめ細かなサービスを提供することが望ましい。</p>
---	--------------------	--	---	---

項目別評価（国立西洋美術館）

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評 定	
		A	B	C		段階的 評定	定性的評定
<p>1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。</p> <p>具体的には、下記の措置を講ずる。</p> <p>(1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>(2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進</p> <p>(3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進</p> <p>(4) 外部委託の推進</p> <p>(5) 事務のOA化の推進</p> <p>(6) 連絡システムの構築等による事務の効率化</p> <p>(7) 積極的な一般競争入札を導入</p> <p>2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。</p>	<p>効率化の状況</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>A</p>	<p>B</p>	<p>C</p>	<p>・人事記録、給与計算等の人事事務、収入、支出、保険契約等の会計事務及び保険請求事務等共済事務で各館で行っていたもののうち、共通的な事務を本部へ一元化し、業務の効率化を図った。</p> <p>国立西洋美術館では、この効率化による事務量減分の活用と従来業務の見直しを図り、鑑賞者へのサービス向上、広報・資金調達の強化、適切な情報公開などに対処できる新たなセクション（事業推進官の振替新設及び事業・企画係の新設）を設けた。また、従前の経理係と用度係を統合し会計係を新設、事務機能の効率化を図った。</p> <p>・節水、節電による省エネルギーの推進、両面コピーによる廃棄物の減量化推進、古紙の再利用によるリサイクル、OA機等のトナーカートリッジリサイクルによる再生使用及びLANの活用によるペーパーレス化を図った。</p> <p>・講堂等の積極的な利用を推進し、展覧会に関する講演会、レクチャーの他、外部団体の見学会、研修会、会議等への有効利用を図った。</p> <p>(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経団連クラブ見学会 160名 ・IPBA（環太平洋法曹協会）2001大会 259名 ・平成13年度博物館職員講習 20名 ・平成13年度美術館等運営研究協議会 151名 ・全国美術館会議教育普及ワーキンググループ会合 30名 ・美術史学会例会 100名 <p>・会場管理業務、設備管理業務、清掃業務等の業務内容の見直しを行い、外部委託を積極的に推進し、業務の効率化を図った。</p> <p>・収入、支出、財産管理等企業会計を効率的に処理するための新会計情報システムを導入し、各種伝票作成時において帳簿類への自動記帳反映がされることにより、事務処理の正確・迅速化及び、省力化が成されるよう図った。</p> <p>・館内LANの活用による職員への連絡業務の効率化、ペーパーレス化を推進し、共通情報の各種ファイルを共有化することによって事務の省力化を図った。</p> <p>・事業、契約の内容について見直しを行い、可能な事業については積極的に一般競争入札を導入し、コストに対する意識を高め、経費の削減を図った。</p> <p>・評議員会を設置し、業務の実績に関する評価を行い、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させるよう努めた。また、外部の研修等に積極的に職員を派遣し、資質の向上を図った。</p>	B	<p>業務運営の効率化を図るため給与計算事務、共済組合事務などの事務の一元化、水道等の節約、ゴミの分別等によるリサイクル、OA化によるペーパーレス化及び清掃業務の一般競争入札等を実施し、法人全体の運営費交付金の1.37%の効率化に積極的に貢献するなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>しかし、まだ改善可能な点があると思われるので、美術館本来の業務に支障のない程度に一般競争入札や外部委託を実施するなど、引き続き積極的に取り組む必要がある。</p>
	<p>効率化の達成率</p>	<p>1.5%以上</p>	<p>1.0%以上</p>	<p>1.0%未満</p>	<p>平成13年度は、独立行政法人国立美術館全体で1.37%の効率化を達成した。</p> <p>平成13年度予算 - 運営費交付債務繰越額 = 平成13年度執行予算額 (平成13年度執行予算額 - 決算額) / 決算額 = 効率化率 4,726,536千円 - 74,848千円 = 4,651,688千円 4,651,688千円 - 4,588,482千円 / 4,588,482千円 = 0.01377</p>	B	

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評 定																																																																					
		A	B	C		段階的 評定	定 性 的 評 定																																																																				
<p>1 収集・保管</p> <p>(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見を踏まえ、適時適切な購入を図る。また、そのための情報収集を行う。</p> <p>(東京国立近代美術館) 近・現代の絵画・水彩・素描・版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。 美術・工芸に関してはコレクションにより近代美術全般の歴史的な常設展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。 また、映画フィルム等については、残存するフィルムを可能な限り収集するとともに積極的に復元を図る。</p> <p>(京都国立近代美術館) 近代美術史における重要な作品など、近・現代の美術・工芸・写真・デザイン作品等を収集する。その際、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した収蔵品の充実に配慮する。</p> <p>(国立西洋美術館) 中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れの概観が可能となるように、松方コレクションを中心とした近代フランス美術の充実、近世ヨーロッパ絵画の充実及びヨーロッパ版画の系統的収集を行う。</p> <p>(国立国際美術館) 日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、主に1945年以降の日本及び欧米の現代美術並びに国際的に注目される国内外の同時代の美術を系統的に収集する。</p> <p>(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている部分を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。</p>	美術作品の収集（購入・寄贈・寄託）の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>1959年の開館以来、当館は中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れを概観できるようなコレクションの収集、また、その保管に努めてきた。とはいえ、近世・近代のヨーロッパ美術という大枠はあるものの、各時代、各地域にまたがる広い範囲を対象とする作品収集は決して容易な作業ではない。当館の出発点となった松方コレクションが19世紀フランス美術を中心とするものであったこともあり、(1)松方コレクションの補充、(2)松方に欠けていたいわゆるオールドマスターの収集、(3)版画収集の3点を、緩やかではあるが、当館の収集の指針として挙げる事ができるものである。</p> <p>絵画の分野における松方の補充とオールドマスターの収集は、両者のバランスをとりながら適宜交互に実施しているが、今年度は近代の分野にいい候補作品がなかったこともあり、最終的に17世紀ポーランドの画家グイド・レーニの《ルクレティア》を購入した。カラヴァッジオなどごく一部を除けば、17世紀イタリア絵画は日本ではまだまだ未知の領域であるが、当館では1998年にすでにグエルチーノの作品を購入している。その意味でも、レーニの作品の購入は意義深いものと言えるだろう。また、同作品が当館のオールドマスターには欠けていた女性裸体像であることも、当館のコレクションに一層の幅を与えるものである。</p> <p>版画に関しては、毎年少しずつでも購入していくことが将来の充実につながるということから、例年、10から20点程度（金額にして約2000万円程度）の版画を購入している。今年度も版画黎明期である15世紀ドイツのファン・メッケネムに始まり、デュラーの2点のエングレーヴィング、さらにはピカソの代表的版画《貧しき食事》まで10点の版画を購入することができた。</p> <p>今年度の寄贈は、旧松方コレクションの8点のピストルフィーの彫刻と、6点のタピストリーを受け入れた。 美術作品購入選考委員会及び評価員による審議のもと、美術作品27点を297,531,183円で購入し、コレクションの強化を図った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・収集した美術作品の件数・名称 別紙「実績報告書56ページ参照」 ・年代別所蔵作品（絵画） 総収蔵作品数4,201点（彫刻・版画等を含む） ()内数は、今年度収集した作品 <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>イタリア</th> <th>オランダ・フランドル</th> <th>ドイツ</th> <th>フランス</th> <th>スペイン</th> <th>イギリス</th> <th>アメリカ</th> <th>その他</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>14・15・16世紀 (後期ゴシック、ルネサンス、マニエリスム)</td> <td>14</td> <td>8</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>24</td> </tr> <tr> <td>17世紀 (バロック等)</td> <td>(1) 4</td> <td>22</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>31</td> </tr> <tr> <td>18世紀 (ロココ等)</td> <td>5</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>(1) 11</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>20</td> </tr> <tr> <td>19・20世紀 (第2次大戦前)</td> <td>1</td> <td>6</td> <td>1</td> <td>233</td> <td>1</td> <td>(1) 5</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>250</td> </tr> <tr> <td>20世紀 (第2次大戦後)</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>8</td> <td>4</td> <td>0</td> <td>5</td> <td>8</td> <td>25</td> </tr> <tr> <td>合 計</td> <td>24</td> <td>37</td> <td>2</td> <td>254</td> <td>8</td> <td>7</td> <td>6</td> <td>12</td> <td>350</td> </tr> </tbody> </table>		イタリア	オランダ・フランドル	ドイツ	フランス	スペイン	イギリス	アメリカ	その他	合計	14・15・16世紀 (後期ゴシック、ルネサンス、マニエリスム)	14	8	1	0	0	0	0	1	24	17世紀 (バロック等)	(1) 4	22	0	2	3	0	0	0	31	18世紀 (ロココ等)	5	1	0	(1) 11	0	2	0	1	20	19・20世紀 (第2次大戦前)	1	6	1	233	1	(1) 5	1	2	250	20世紀 (第2次大戦後)	0	0	0	8	4	0	5	8	25	合 計	24	37	2	254	8	7	6	12	350	A	<p>国立西洋美術館の収集方針に基づき、グイド・レーニ作「ルクレティア」など質の高い美術作品を27点購入し、新たに寄贈16点を受入れるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>特に、旧松方コレクションであるピストロフィーの彫刻とタピストリーの寄贈を受けることができたことは、大変意義のある成果であった。</p> <p>寄附・寄贈は有効な収集方法の一つであるため、文化庁と連携協力し税制問題を含めたその推進方を検討することが望ましい。</p> <p>美術作品の散逸や海外流出について、文化庁、国立博物館等との連携を図り情報収集など迅速に対応することが望ましい。</p>
	イタリア	オランダ・フランドル	ドイツ	フランス	スペイン	イギリス	アメリカ	その他	合計																																																																		
14・15・16世紀 (後期ゴシック、ルネサンス、マニエリスム)	14	8	1	0	0	0	0	1	24																																																																		
17世紀 (バロック等)	(1) 4	22	0	2	3	0	0	0	31																																																																		
18世紀 (ロココ等)	5	1	0	(1) 11	0	2	0	1	20																																																																		
19・20世紀 (第2次大戦前)	1	6	1	233	1	(1) 5	1	2	250																																																																		
20世紀 (第2次大戦後)	0	0	0	8	4	0	5	8	25																																																																		
合 計	24	37	2	254	8	7	6	12	350																																																																		
<p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動を充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。</p> <p>(2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。</p>	保管の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>当館では、会場内、収蔵庫ともに24時間空調を実施している。</p> <p>会場内では作品を良好な状態で展示するため、館内数十個所の温度・湿度、空気汚染、照明、防災対策、保安対策などの調査を継続的に実施、必要に応じた改善を行っている。また、収蔵庫の温度・湿度のデータ管理により、作品への影響を最低限とするよう空調設備の運転を行っている。</p> <p>今年度、本館展示室入口、同2階階段周りに風除扉を設置した。これにより本館空調の安定と、空調機器の負荷を下げる点で大きな効果を得ることができた。なお、この新設工事に伴う空気汚染調査も併せて実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・美術品の保護環境 温度22、湿度55±5%RH(24時間空調) ・環境モニター調査結果 「国立西洋美術館における室内空気汚染調査・対策の事例」 (『国立西洋美術館研究紀要』no.6) 	A	<p>収蔵品の保存及び管理環境の維持充実を図るため美術作品の種類、保管場所等の違いにより、温湿度や照明等を適正に管理するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>特に、専任の研究員を配置しているため、行き届いた保管がされている。</p>																																																																						

<p>(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。</p> <p>緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。</p> <p>伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。</p> <p>(3)-2 国内外の美術館等の修理、保存処理の充実に寄与する。</p>	<p>修理の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>当館では保存修復室及び保存科学室を設置している。このスタッフを中心として外部技術者を活用し、収蔵作品の適切な保存、調査及び、計画的修復を行っている。また、他機関との情報交換の円滑化、当館に寄せられる修復・保存上への協力要請への対応等、美術館等への修復保存に関する寄与を図った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・緊急性の高いものを優先して美術作品の保存修復処置及び、修復処置に伴う作品に用いられた材料の科学分析を行っている。また、収蔵品の計画的修復実施に向けて、修復計画作成、点検調書ファイル更新、保存修復設備等の整備を図った。 ・平成13年9月から11月まで、当館の主任研究官を欧米の美術館等研究機関に派遣し、最新の保存修復技術及び、保存修復技術者研修制度と養成科目等についての調査を行った。 ・平成14年2月全国美術館会議学芸員研修会「鑄造彫刻作品の収蔵・展示と鑄造管理の望ましい在り方について」(愛知県美術館)へ研究員2名を派遣した。 ・平成13年7月に、長崎県教育委員会の「美術作品の保存修復を通して美術の真髄に触れ、文化財保護を学ぶ」というテーマによる指導力向上のための派遣研修に協力し、長崎県立高校の美術教諭1名に対して10日間の研修を行った。 ・平成14年3月に、イタリア学術会議電磁波研究所から外国人研究員2名を招聘して「光ファイバーを用いた反射スペクトルとImaging Spectroscopyによる非破壊調査法」講演会を開催し、関係者による研究交流並びに、情報交換を図った。 <p>修理作品の件数・名称・修理内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クリベリ作品額縁修復 1件 <p>処置内容：歪みの矯正、補強、欠損部の充填、箔押し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・版画作品修復処置 ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ作「ティヴォリの通称トッセ神殿」他5件 <p>処置内容：ドライクリーニング、ヒンジ片の除去、洗浄及び脱酸処置、部分漂白処置、フラットニング、ヒンジ付きマット収納</p> <ul style="list-style-type: none"> ・版画作品修復処置 ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ作「牢獄」シリーズ8件 <p>処置内容：ドライクリーニング、ヒンジ片の除去、洗浄及び脱酸処置、フラットニング、ヒンジ付きマット収納</p> <ul style="list-style-type: none"> ・版画作品修復処置 漆原木虫作「木版画十選」 10件 <p>処置内容：版画図版10点の版画集からの取り外し、マット挿入・調整</p> <ul style="list-style-type: none"> ・版画作品保存処置 ルカス・ファン・レイデン作「幼子イエスを抱く聖母マリアと二天使」他26件 <p>処置内容：ヒンジ付け及び、ブックマウント収納</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新収蔵版画素描作品保存処置 ハインリヒ・アルデグレーファー作「レア・シルウィア」他11件 <p>処置内容：ヒンジの取り外し、マット挿入・調整</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前庭展示彫刻保存処置 オーギュスト・ロダン作「地獄の門」、「カレーの市民」、「考える人」 3件 <p>処置内容：洗浄及びワックス塗布</p>	<p>A</p>	<p>傷みの著しい版画、額縁、素描、彫刻等64点を修理するとともに、計画的修理を実施するために修理計画を作成するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>特に、専任の研究員を配置し、計画的に修理を実施している。</p> <p>今後も、国内外の保存修理関係者と積極的に交流することが望ましい。</p>
<p>2 公衆への観覧</p> <p>(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。</p> <p>(1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。</p> <p>(1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。</p> <p>なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。</p> <p>(東京国立近代美術館)</p> <p>本館 年3～5回程度 工芸館 年2～3回程度 フィルムセンター 年5～6番組程度</p> <p>(京都国立近代美術館)</p> <p>年6～7回程度</p> <p>(国立西洋美術館)</p> <p>年3回程度</p> <p>(国立国際美術館)</p> <p>年5～6回程度</p>	<p>展覧会の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>常設展の他、新聞社と共催の展覧会を2回、特別展を1回及び、企画展を1回開催した。また、共同企画展、巡回展等は東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立国際美術館で実施した。</p>	<p>A</p>	<p>広く国民に優れた美術作品を観覧する機会を与えるため、国民の関心に応えたものや学術的意義の高いものなどバランスに配慮しながら常設展、企画展3回を開催し、目標入館者数以上の実績を上げるなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>入館者に対するアンケート調査の結果では、概ね9割の肯定的な回答を得ており、展覧会に対する満足度は非常に高かった。</p> <p>なお、広報活動については、さらに充実を図ることが望ましい。</p> <p>海外交流展については、中期的な展望のもと企画・実施することが望ましい。</p>
	<p>常設展</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「中世末期から20世紀初頭にかけての西洋絵画とフランス近代彫刻」 ・「国立西洋美術館所蔵フランス素描名作展」 ・子供教育プログラム「水、みず、ミズ」は、4教育普及で記述 	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>来館者が常設展示の質の高い所蔵作品がいつでも鑑賞できるようにという方針のもと、当館の代表的な所蔵作品は年間を通じて展示され、展示替えは特別な場合を除いて行われていない。(貸出中の作品の代替として、普段は収蔵庫にしまわれている作品を展示することはある。)なお、12年度末に設置された版画素描展示室において、テーマをもうけて版画・素描コレクションの展示(各3ヶ月程度)を年2回開催した。</p> <p>また、今年度は、主として常設展示を利用した教育プログラム「子供から楽しめる美術展～水の誘い」を開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開催期間・陳列総件数 <p>別紙「実績報告書63ページ参照」</p>	<p>A</p>	<p>いつでも質の高い美術作品を鑑賞できるように展示に配慮しており、また、版画素描コレクションや「子供から楽しめる美術展～水の誘い」を開催するなど、魅力ある常設展とするため積極的に取り組んだ。</p>

<p>(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。</p> <p>(1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。</p> <p>(1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。</p> <p>なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。</p> <p>また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。</p> <p>(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。</p>	<table border="1"> <tr> <td>入場者数</td> <td>250,000人以上</td> <td>175,000人以上 250,000人未満</td> <td>175,000人未満</td> <td>入場者数 259,917人(1日平均912人)</td> <td>A</td> </tr> </table>	入場者数	250,000人以上	175,000人以上 250,000人未満	175,000人未満	入場者数 259,917人(1日平均912人)	A	<p>この展覧会は、1995年秋から翌96年にかけてイタリアで催された「イタリアにおける日本年」の返礼として200年に企画された「日本におけるイタリア年2001」の中心的催しとして、国立西洋美術館とフィレンツェ、ピストイアプラート美術監督局が共同で企画し、イタリアの各都市から優れた作品を集めて行われたイタリアの「ルネサンス文化」展覧会であった。その趣旨は、単にイタリアの「ルネサンス美術」を主眼においたものではなく、イタリア・ルネサンス「文化」そのものを日本に紹介し、理解を深めてもらうというのがねらいであった。この展覧会を実現するに当たってはイタリア政府の全面的な支援が得られ、出品作品は絵画84点、彫刻32点、素描4点、彩飾写本15点、タペストリー点、陶器15点、宝飾工芸品25点、武具13点、科学観測機器8点、総計196点にも上った。</p> <p>なお、本展は下記に記すとおり、多くの入館者を得ることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共催者・開催期間・陳列総件数 別紙「実績報告書59～60ページ参照」 ・社会的反響 別紙「実績報告書59～60ページ参照」 ・アンケート結果 展覧会について9割を越える肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり) 	<p>「日本におけるイタリア2001」の事業としてイタリア・ルネサンス文化の全容を紹介した、企画・内容ともに充実した展覧会であった。</p>		
	入場者数	250,000人以上	175,000人以上 250,000人未満	175,000人未満	入場者数 259,917人(1日平均912人)	A					
	<table border="1"> <tr> <td>入場者数</td> <td>360,000人以上</td> <td>252,000人以上 360,000人未満</td> <td>252,000人未満</td> <td>入場者数 375,643人(1日平均4,368人)(3月20日からの総入館者数422,721人)</td> <td>A</td> </tr> </table>	入場者数	360,000人以上	252,000人以上 360,000人未満	252,000人未満	入場者数 375,643人(1日平均4,368人)(3月20日からの総入館者数422,721人)	A			<p>同時開催されたこの二つの展覧会は、1995年1月11日に行われた日米首脳会談(村山元首相、クリントン前大統領)の際に、日本側にアメリカ側より提案された「アメリカ秀作美術展」の開催が出発点となったものである。</p> <p>当初は「アメリカン・ヒロイズム」というコンセプトのもとで一つの展覧会を組織する予定であったが、このテーマにあった「アメリカ美術の秀作」を多数借用することが困難であったため、在日アメリカ大使館の協力によってワシントンのナショナル・ポートレート・ギャラリーの所蔵品の国際巡回展“A Brush with History”を当館でも開催することにし、また当初の予定の半分の規模の「アメリカン・ヒロイズム」展を同時に開催することとなった。これにより、絵画118点にも上る作品の出品が可能となった。(肖像が語るアメリカ史展75点、アメリカン・ヒロイズム展43点)</p> <p>当初の目標からは大きくそれたものの、同時にまたそれが新たな試みとしての面白みを生み出してもくれた。基本的に「美術館」としてよりも「歴史博物館」としての性格が強いナショナル・ポートレート・ギャラリーとの共同作業によって、展覧会は、歴史や社会と美術との密接な結びつきを強調していくものとなり、それが「アメリカン・ヒロイズム」のほうにも大きく影響し、「秀作主義」に捉われない視点による企画を実現させることとなった。そのためもあって、この企画は、美術関係者や愛好家よりも、アメリカ学の研究者や学生、アメリカの歴史や文化に興味のある方々に関心をもたれ、通常とは異なる層の来館者があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共催者・開催期間・陳列総件数 別紙「実績報告書60～61ページ参照」 ・社会的反響 別紙「実績報告書61ページ参照」 ・アンケート結果 展覧会について9割を越える肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり) 	<p>アメリカ美術を紹介したものとして、その歴史や社会を浮き彫りにした、従来ない興味深い展覧会であった。</p> <p>また、日米首脳会談の合意に基づき開催したものであり、2国間の文化交流にも一役買った。</p>
	入場者数	360,000人以上	252,000人以上 360,000人未満	252,000人未満	入場者数 375,643人(1日平均4,368人)(3月20日からの総入館者数422,721人)	A					
<table border="1"> <tr> <td>入場者数</td> <td>40,000人以上</td> <td>28,000人以上 40,000人未満</td> <td>28,000人未満</td> <td>入場者数 44,020人(1日平均734人)</td> <td>A</td> </tr> </table>	入場者数	40,000人以上	28,000人以上 40,000人未満	28,000人未満	入場者数 44,020人(1日平均734人)	A	<p>世界屈指の美術館であるスペインの国立ブラド美術館の絵画コレクションを、日本において初めて大規模に紹介する展覧会である。</p> <p>ブラド美術館は、スペイン美術の比類ないコレクションを誇るとともに、16、17世紀を中心とするフランドルとヴェネツィア絵画の重要な収集によってもその名を知られている。ブラド美術館の収集のこのような広がり、美術館の前身ひとつで、収蔵品の核となっているスペイン王室コレクションの歴史と趣味を反映している。ハプスブルクとブルボンのつのスペイン王朝の宮廷は、ヨーロッパ各地の優れた画家たちに活躍の場を与え、さらに作品収集活動に情熱を注いだ。</p> <p>本展は、これら「ブラドの華」ともいべき作品群の中から5点のペラスケス、6点のゴヤをはじめとする代表的作品7点(絵画76点、彫刻1点)を選び、現在に継承されるその美の真髄を伝え、スペイン美術の流れを、王室コレクションとの関わりを通じて辿ってみたものである。</p> <p>なお、本展についても多数の入館者を得ることができた。</p> <p>本展覧会は平成13年3月5日(平成13年度)から平成14年6月16日(平成14年度)まで開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共催者・開催期間・陳列総件数 別紙「実績報告書62～63ページ参照」 ・社会的反響 別紙「実績報告書62～63ページ参照」 ・アンケート結果 <p>平成13年度末現在において開催中の展覧会であり、引き続き平成14年度も調査を実施</p>	<p>平成14年6月16日まで開催する展覧会であり、平成13年度末の時点では実績が十分に把握できないため平成14年度に評定する。</p>			
入場者数	40,000人以上	28,000人以上 40,000人未満	28,000人未満	入場者数 44,020人(1日平均734人)	A						
<table border="1"> <tr> <td>入場者数</td> <td>250,000人以上</td> <td>175,000人以上 250,000人未満</td> <td>175,000人未満</td> <td>入場者数 259,917人(1日平均912人)</td> <td>A</td> </tr> </table>	入場者数	250,000人以上	175,000人以上 250,000人未満	175,000人未満	入場者数 259,917人(1日平均912人)	A			<p>この展覧会は、1995年秋から翌96年にかけてイタリアで催された「イタリアにおける日本年」の返礼として200年に企画された「日本におけるイタリア年2001」の中心的催しとして、国立西洋美術館とフィレンツェ、ピストイアプラート美術監督局が共同で企画し、イタリアの各都市から優れた作品を集めて行われたイタリアの「ルネサンス文化」展覧会であった。その趣旨は、単にイタリアの「ルネサンス美術」を主眼においたものではなく、イタリア・ルネサンス「文化」そのものを日本に紹介し、理解を深めてもらうというのがねらいであった。この展覧会を実現するに当たってはイタリア政府の全面的な支援が得られ、出品作品は絵画84点、彫刻32点、素描4点、彩飾写本15点、タペストリー点、陶器15点、宝飾工芸品25点、武具13点、科学観測機器8点、総計196点にも上った。</p> <p>なお、本展は下記に記すとおり、多くの入館者を得ることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共催者・開催期間・陳列総件数 別紙「実績報告書59～60ページ参照」 ・社会的反響 別紙「実績報告書59～60ページ参照」 ・アンケート結果 展覧会について9割を越える肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり) 	<p>「日本におけるイタリア2001」の事業としてイタリア・ルネサンス文化の全容を紹介した、企画・内容ともに充実した展覧会であった。</p>	
入場者数	250,000人以上	175,000人以上 250,000人未満	175,000人未満	入場者数 259,917人(1日平均912人)	A						
<table border="1"> <tr> <td>入場者数</td> <td>360,000人以上</td> <td>252,000人以上 360,000人未満</td> <td>252,000人未満</td> <td>入場者数 375,643人(1日平均4,368人)(3月20日からの総入館者数422,721人)</td> <td>A</td> </tr> </table>	入場者数	360,000人以上	252,000人以上 360,000人未満	252,000人未満	入場者数 375,643人(1日平均4,368人)(3月20日からの総入館者数422,721人)	A	<p>同時開催されたこの二つの展覧会は、1995年1月11日に行われた日米首脳会談(村山元首相、クリントン前大統領)の際に、日本側にアメリカ側より提案された「アメリカ秀作美術展」の開催が出発点となったものである。</p> <p>当初は「アメリカン・ヒロイズム」というコンセプトのもとで一つの展覧会を組織する予定であったが、このテーマにあった「アメリカ美術の秀作」を多数借用することが困難であったため、在日アメリカ大使館の協力によってワシントンのナショナル・ポートレート・ギャラリーの所蔵品の国際巡回展“A Brush with History”を当館でも開催することにし、また当初の予定の半分の規模の「アメリカン・ヒロイズム」展を同時に開催することとなった。これにより、絵画118点にも上る作品の出品が可能となった。(肖像が語るアメリカ史展75点、アメリカン・ヒロイズム展43点)</p> <p>当初の目標からは大きくそれたものの、同時にまたそれが新たな試みとしての面白みを生み出してもくれた。基本的に「美術館」としてよりも「歴史博物館」としての性格が強いナショナル・ポートレート・ギャラリーとの共同作業によって、展覧会は、歴史や社会と美術との密接な結びつきを強調していくものとなり、それが「アメリカン・ヒロイズム」のほうにも大きく影響し、「秀作主義」に捉われない視点による企画を実現させることとなった。そのためもあって、この企画は、美術関係者や愛好家よりも、アメリカ学の研究者や学生、アメリカの歴史や文化に興味のある方々に関心をもたれ、通常とは異なる層の来館者があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共催者・開催期間・陳列総件数 別紙「実績報告書60～61ページ参照」 ・社会的反響 別紙「実績報告書61ページ参照」 ・アンケート結果 展覧会について9割を越える肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり) 	<p>アメリカ美術を紹介したものとして、その歴史や社会を浮き彫りにした、従来ない興味深い展覧会であった。</p> <p>また、日米首脳会談の合意に基づき開催したものであり、2国間の文化交流にも一役買った。</p>			
入場者数	360,000人以上	252,000人以上 360,000人未満	252,000人未満	入場者数 375,643人(1日平均4,368人)(3月20日からの総入館者数422,721人)	A						
<table border="1"> <tr> <td>入場者数</td> <td>40,000人以上</td> <td>28,000人以上 40,000人未満</td> <td>28,000人未満</td> <td>入場者数 44,020人(1日平均734人)</td> <td>A</td> </tr> </table>	入場者数	40,000人以上	28,000人以上 40,000人未満	28,000人未満	入場者数 44,020人(1日平均734人)	A			<p>世界屈指の美術館であるスペインの国立ブラド美術館の絵画コレクションを、日本において初めて大規模に紹介する展覧会である。</p> <p>ブラド美術館は、スペイン美術の比類ないコレクションを誇るとともに、16、17世紀を中心とするフランドルとヴェネツィア絵画の重要な収集によってもその名を知られている。ブラド美術館の収集のこのような広がり、美術館の前身ひとつで、収蔵品の核となっているスペイン王室コレクションの歴史と趣味を反映している。ハプスブルクとブルボンのつのスペイン王朝の宮廷は、ヨーロッパ各地の優れた画家たちに活躍の場を与え、さらに作品収集活動に情熱を注いだ。</p> <p>本展は、これら「ブラドの華」ともいべき作品群の中から5点のペラスケス、6点のゴヤをはじめとする代表的作品7点(絵画76点、彫刻1点)を選び、現在に継承されるその美の真髄を伝え、スペイン美術の流れを、王室コレクションとの関わりを通じて辿ってみたものである。</p> <p>なお、本展についても多数の入館者を得ることができた。</p> <p>本展覧会は平成13年3月5日(平成13年度)から平成14年6月16日(平成14年度)まで開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共催者・開催期間・陳列総件数 別紙「実績報告書62～63ページ参照」 ・社会的反響 別紙「実績報告書62～63ページ参照」 ・アンケート結果 <p>平成13年度末現在において開催中の展覧会であり、引き続き平成14年度も調査を実施</p>	<p>平成14年6月16日まで開催する展覧会であり、平成13年度末の時点では実績が十分に把握できないため平成14年度に評定する。</p>	
入場者数	40,000人以上	28,000人以上 40,000人未満	28,000人未満	入場者数 44,020人(1日平均734人)	A						
<table border="1"> <tr> <td>入場者数</td> <td>250,000人以上</td> <td>175,000人以上 250,000人未満</td> <td>175,000人未満</td> <td>入場者数 259,917人(1日平均912人)</td> <td>A</td> </tr> </table>	入場者数	250,000人以上	175,000人以上 250,000人未満	175,000人未満	入場者数 259,917人(1日平均912人)	A	<p>この展覧会は、1995年秋から翌96年にかけてイタリアで催された「イタリアにおける日本年」の返礼として200年に企画された「日本におけるイタリア年2001」の中心的催しとして、国立西洋美術館とフィレンツェ、ピストイアプラート美術監督局が共同で企画し、イタリアの各都市から優れた作品を集めて行われたイタリアの「ルネサンス文化」展覧会であった。その趣旨は、単にイタリアの「ルネサンス美術」を主眼においたものではなく、イタリア・ルネサンス「文化」そのものを日本に紹介し、理解を深めてもらうというのがねらいであった。この展覧会を実現するに当たってはイタリア政府の全面的な支援が得られ、出品作品は絵画84点、彫刻32点、素描4点、彩飾写本15点、タペストリー点、陶器15点、宝飾工芸品25点、武具13点、科学観測機器8点、総計196点にも上った。</p> <p>なお、本展は下記に記すとおり、多くの入館者を得ることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共催者・開催期間・陳列総件数 別紙「実績報告書59～60ページ参照」 ・社会的反響 別紙「実績報告書59～60ページ参照」 ・アンケート結果 展覧会について9割を越える肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり) 	<p>「日本におけるイタリア2001」の事業としてイタリア・ルネサンス文化の全容を紹介した、企画・内容ともに充実した展覧会であった。</p>			
入場者数	250,000人以上	175,000人以上 250,000人未満	175,000人未満	入場者数 259,917人(1日平均912人)	A						

	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="623 130 783 210">入場者数</td> <td data-bbox="783 130 872 210">70,000人以上</td> <td data-bbox="872 130 1032 210">49,000人以上 70,000人未満</td> <td data-bbox="1032 130 1121 210">49,000人未満</td> </tr> </table>	入場者数	70,000人以上	49,000人以上 70,000人未満	49,000人未満	<p>入場者数 120,749人(1日平均5,032人)(3月5日から3月31日までの入館者数)</p> <p>本来、ミュージアムは作品や標本などのオリジナルを収集・整理し、研究・保存し、展示する機関であり、「電子博物館」といった館種を越えた情報利用が進展しつつある。そこにはデジタル時代ならではの大きな可能性が含まれている。本企画では、当館におけるデジタル技術の利用の試みを含む国内外の20余のシステムやプロジェクトを集め、主として画像のデジタル化、蓄積、表示技術を中心として、その多様性の一端を各種ディスプレイやパネル、また関連機器、大型印刷物等で紹介した。また、それらが「複製」の歴史のなかでどういう位置を占め、ミュージアムの将来にどのような影響を及ぼしていくのかについてのシンポジウムやセミナーを行った。</p> <p>本展の企画実施は、客員研究員をはじめとする外部関係者を含む実行委員会を設置し、外部の力を導入し、資金面でも特別協力企業の資金協力を得ることにより実現可能となった。</p> <p>また、これら企業の協力により入場料を無料にすることができ、実質18日間で8,000名を越える入場者があり、予想以上の成果であった。オリジナル作品展示とデジタル画像の応用は二律背反ではなく、前者の制約を開放し、新たな可能性を探ることこそが重要であるという認識がプログラムを通じて確認されたと考え。また、フランス美術館修復研究センター関係者はもとより、コンピューター画家アaronの生みの親、ハロルド・コーエン氏、オーストリア(アルス・エレクトロニカ・センター)、韓国(アート・センター・ナビ)の関係者など海外との交流ができた。</p> <p>本展覧会は常設展示と併設 ・共催者・開催期間・陳列総件数 別紙「実績報告書62ページ参照」 ・社会的反響 別紙「実績報告書62ページ参照」 ・アンケート結果 展覧会について9割を越える肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)</p>	A	<p>美術館においてデジタル技術を活用する可能性を探るものとして注目すべき試みであり、内容的にも充実していた。</p> <p>美術作品はコンテンツの素材として注目されており、民間企業の技術的協力を仰ぎ、デジタル技術の有効活用について継続して検討することが望ましい。</p>
入場者数	70,000人以上	49,000人以上 70,000人未満	49,000人未満					
<p>(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。</p>	貸与の状況	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p> <p>所蔵品の有効な活用をめざし、保存状況を勘案しつつ、国内外施設機関への積極的な貸出に努めている。</p> <p>貸出点数 22点(絵画8点、彫刻5点、版画8点、書籍1点)</p> <p>貸出先 (国内)東京国立近代美術館、名古屋市美術館、静岡県立美術館、愛知県美術館、奈良県立美術館、府中市美術館、岐阜県美術館、兵庫県立近代美術館 (海外)メトロポリタン美術館(アメリカ)、グラン・パレ(フランス)、ゴッホ美術館(オランダ)</p>	B	<p>美術作品の効果的活用を図るとともに、他館との相互活用を促進するため、美術作品22点を貸与するなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>ただし、貸与条件について、柔軟な対応を検討し改善する必要がある。</p>				
<p>3 調査研究</p> <p>(1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。</p> <p>収蔵品に関する調査研究 美術作品に関する調査研究 収集・保管・展示に関する調査研究 美術史、美術動向、作者に関する調査研究 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等</p> <p>(1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。</p> <p>(2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。</p> <p>また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。</p>	調査研究の実施状況	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p> <p>当館は、西洋美術史、情報資料、美術館教育、保存修復・保存科学に関する調査・研究を行っている。その成果は、展覧会カタログ、年報、紀要等の当館刊行物および学会誌や専門誌、一般刊行物等に文章として発表され、あるいは学会発表や講演などの口頭による発表もなされている。これらは、専門家に対してのみならず、教育普及活動や広報活動への利用を通じて一般の方々の西洋美術や美術館についての理解にも貢献することを目的としている。「実績報告書」に詳細が記されており、平成13年度においても十分な成果の発表がなされた。</p> <p>・客員研究員11名との調査研究・研究交流を実施。 ・外国人研究員5名を招聘し、積極的な研究交流を推進した。 ・国内外の美術館等研究機関との連携を行った。(3回) ・研究の件数・テーマ 別紙「実績報告書65～71ページ参照」 ・他の博物館等との連携等件数・内容・機関名 別紙「実績報告書72ページ参照」 ・招聘者の名前・所属機関名・受入期間・研究内容・成果 別紙「実績報告書72ページ参照」 ・公開している刊行物名・印刷部数・配布先 当館刊行物は本館フリーゾーンに設置する美術情報エリアで公開している他、国内外の美術館等機関にも配布し、広く情報発信を行っている。</p> <p>平成13年度刊行物名：別紙「実績報告書80ページ～86ページ参照」 発行部数：『国立西洋美術館年報』(発行800部)、『国立西洋美術館研究紀要』(発行800部)、『国立西洋美術館ニュース』(発行2,500部)、『展示予定』(発行100,000部、入館者へ無料配布) ・学会発表件数・研究テーマ(講演13件、研究発表3件) 別紙「実績報告書65～71ページ参照」 ・シンポジウム等の回数・内容(シンポジウム1回、セミナー3回) 別紙「実績報告書76～78ページ参照」</p>	A	<p>収集・保管、公衆への観覧、教育普及の事業など博物館活動の推進を図るため、松方コレクション全体に関する調査研究、中世末期から20世紀初頭の西洋美術に関する調査研究及び西洋美術作品の保存修復に関する調査研究等を実施するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>調査研究については、外部資金の獲得に努め、幅広く外部研究者との交流を促進するなど積極的に取り組むことが望ましい。</p> <p>なお、研究成果については、図録等の刊行物のみならず、学会等においても幅広く積極的に発表することが望ましい。</p>				

	客員研究員招聘人数	6人以上	4人以上6人未満	4人未満	客員研究員招聘人数 11名	A	
4 教育普及 (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。 (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。	資料の収集及び公開（閲覧）の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	国内外の美術館等との交換図書等による資料の積極的収集を図った。また、美術情報エリア及び、研究資料センターにおいてレファレンス機能の充実を図っている。 ・交換件数468件（国内219件、海外249件） 「研究者や専門家を対象とした活動」として、過去40年以上にわたって収集してきた西洋美術史研究のための文献資料（約24,000冊）やマイクロフィッシュ（約37,000枚）を、広く外部の専門家や研究者に公開し、西洋美術史研究および美術館活動の振興に資することを目的として、3月に研究資料センターを開設した。 ・収集した資料の件数・内容 美術館における研究を推進するための図書資料、写真資料等の収集蓄積を図った。 図書資料2,913冊（データ入力済冊数）、マイクロフィッシュ190枚、写真原板43枚、マイクロフィルム22本	A	新たに美術作品に関する図書2,913冊を収集し、美術情報エリアや研究資料センターにおいて公開するなど、中期目標に向かって着実に成果を上げている。 研究資料センターを研究者等に対する西洋美術研究の中心的な資料室として整備することが望ましい。 今後も、4館の資料を登録及び検索できる現代的システムの開発や広報の強化を図り、より一層、資料を活用することが望ましい。		
(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。 また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。	児童生徒を対象とした講座等の実施状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	「子どもを対象とした活動」としては、「子どもから楽しめる美術展 - 水の誘い」を実施した。所蔵作品を中心とするプログラムで、本年度は美術・工芸作品に表現された「水」に注目し、芸術表現の多様性に目を向けてもらうことを目的として、他館からも幾つかの作品を借用してより幅広い表現を紹介した。さらに、展覧会の会場（新館2階版画素描室）以外の常設展示室に展示されている作品についても、水の表現に注意を促すためのガイダンスと、2点の作品の横に無料の解説カードを設置した。さらに、このテーマに興味を持った子どもや大人が、より深い体験や知識を得られるように多くの関連プログラムを実施した。特に、音楽というジャンルからの水の表現へのアプローチとなるコンサートは、今回初の試みであった。展覧会期間中の平日には、学校の団体に対してギャラリートークも実施した。 また、美術館という施設とそこで働く人々や仕事への関心から、毎年多くの中学校では、修学旅行時に社会見学として、様々な職場を訪問し、インタビューを行っている。当館でも春と秋にこうした要請に対応し、美術館の機能について紹介を行った。 「教員を対象とした活動」として、企画展開催時に1回ずつ、教員を対象とする観賞プログラムを試行した。日頃、多忙な教員に、展覧会を楽しんでもらうことが目的のこの試みは、まず近隣地区の小・中・高等学校を対象にして実施した。 ・児童生徒を対象とした講座等の実施回数・内容 別紙「実績報告書73～74ページ参照」 ・先生（小・中学校教員）のための鑑賞プログラム実施回数・内容 別紙「実績報告書74～75ページ参照」 ・「子どもから楽しめる美術展 - 水の誘い」アンケート結果 展覧会について9割を越える肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）	A	教育普及の取組みの充実や学校教育における美術館の活用の推進を図るため、限られた人員と予算で積極的に「子どもから楽しめる美術展～水の誘い」を実施し、平成12年度以上の実績を上げるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。		
	子どものための美術（創作体験プログラム）件数	3回以上	2回	2回未満	子どものための美術展（創作体験プログラム）件数 4回 子どものための美術展（コンサート） 件数 1回	A	
	子どものための美術（創作体験プログラム）参加者数	40人以上	28人以上40人未満	28人未満	子どものための美術展（創作体験プログラム）参加者数 51人 子どものための美術展（コンサート） 参加者数 150人	A	
	先生（小・中学校教員）のためのプログラムの開催件数	2回以上	1回	0回	先生（小・中学校教員）のための鑑賞プログラム開催件数 2回	A	
	先生（小・中学校教員）のためのプログラムの参加者数	140人以上	98人以上140人未満	98人未満	先生（小・中学校教員）のための鑑賞プログラム参加者数 148人	A	

<p>(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。</p> <p>それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。</p> <p>また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。</p>	講演会等の実施状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			「一般を対象とした活動」としては、企画展開催時に講演会、スライドトーク、ギャラリートークなどを実施し、オーディオガイドや無料の簡易なブリーフガイドを用意した。	<p>A</p> <p>美術作品等の理解促進を図るため、限られた人員と予算で積極的に講演会、スライドトーク、ギャラリートークを実施し、平成12年度以上の実績を上げるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>また、講座等については、年齢・性別・学歴を問わず、幅広い国民各層を対象とするよう配慮し、その他の業務に支障を来たさない程度に充実させることが望ましい。</p>	
	企画展における講演会等の開催件数	3回以上	2回	1回	企画展における講演会等の開催件数 17回		A
	企画展における講演会等の参加者数	770人以上	539人以上770人未満	539人未満	企画展における講演会等の参加者数 2,860人 (「プラド美術館展」小中学生無料化広報周知のための特別講演会 1,522人含む)		A
	スライドトーク等の実施件数	5回以上	4回	4回未満	スライドトーク等の実施件数 17回(スライドトーク6回、ギャラリートーク11回)		A
	スライドトーク等の参加者数	700人以上	490人以上700人未満	490人未満	スライドトーク等の参加者数 1,065人(スライドトーク768人、ギャラリートーク297人)		A
講演会等に対するアンケート結果	80%以上	56%以上80%未満	56%未満	すべての講演会等に対するアンケートの結果については、概ね90%以上が肯定的回答であった(詳細は別紙のとおり)	A		
<p>(4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。</p> <p>(4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員(キュレーター)の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。</p> <p>(4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。</p> <p>(4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。</p>	研修等の取組み状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			美術館関係者等の資質、専門性を高めるため、文化庁と協力、あるいは大学との連携等による研修・教育事業を実施した。	<p>B</p> <p>美術館関係者等の人材育成及び人的ネットワークの形成を図るため、他の機関が実施する研修等へ協力し、東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学専攻と連携・協力に関する協定を結ぶなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>今後も、受入可能な人数の範囲内で積極的に取組む必要がある。</p>	
<p>(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。</p> <p>また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。</p>	広報活動の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。			西洋美術史、情報資料、美術館教育、保存修復・保存科学に関する調査・研究を行い、その成果は、展覧会カタログ、『国立西洋美術館年報』(発行800部)、『国立西洋美術館研究紀要』(発行800部)、『国立西洋美術館ニュース』(発行2,500部)、『展示予定』(発行100,000部、入館者へ無料配布)等の当館刊行物及び、学会誌や専門誌、一般刊行物等に文章として発表され、あるいは学会発表や講演などの口頭による発表もなされている。これらは、専門家に対してのみならず、教育普及活動や広報活動への利用を通じて一般の方々の西洋美術や美術館についての理解にも貢献することを目的としている。なお、当館刊物は本館フリーゾーンに設置する美術情報エリアで公開している他、国内外の美術館等機関にも配布し、広く情報発信を行っている。	<p>A</p> <p>文化、美術作品及び国立美術館について国民の理解促進を図るため、研究紀要、展覧会図録、シンポジウム報告書、国立西洋美術館ニュース等を発行するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>より一層、国民に美術館活動が理解されるよう内容を工夫し、今後も積極的に実施することが望ましい。</p> <p>また、インターネットを積極的に活用した広報について検討することが望ましい。</p>	
	「国立西洋美術館ニュース」出版件数	2回以上	1回	0回	『国立西洋美術館ニュース』出版件数 1回		B
	展示予定表出版件数	2回以上	1回	0回	『展示予定』出版件数 1回		B

<p>(1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。</p> <p>(5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。</p> <p>(5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。 また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。</p>	<p>収蔵品の情報デジタル化及びその活用状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>美術館活動を積極的に広報し、より多くの人々が美術館を利用しやすくすることを目的として、また、美術館の情報の改善を図るためホームページの改訂を行った。ホームページでは、日本語及び英語により、コレクション、展覧会情報、講演会・スライドトーク等のイベント、交通・利用案内、館内施設案内などを常時掲載し、適時更新を行っている。 当館が収蔵している作品のデータ・画像入力を行い、データベース化を推進している。デジタルギャラリーでは、今年度22点の追加により204点の公開を行っている。 ・デジタル化件数 絵画155点、素描24点、版画10点、彫刻15点 合計204点</p>	<p>A</p>	<p>文化、美術作品及び国立美術館について国民の理解促進を図るため、平成13年度末までに、204点のデジタル化を実施し、美術館情報についてホームページで公開するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。 また、美術作品に関する情報のデータベース化にあたっては、標準化を検討するなど国民が簡便な方法でアクセス出来るシステムの開発を常に心懸けることが望ましい。 美術作品がコンテンツの素材として注目される中で、著作権について慎重に取り組むことが望ましい。 ホームページについては、さらに内容、外国語版など充実させることが望ましい。</p>
<p>(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。</p>	<p>ボランティアの活用状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>ボランティアについては、その導入のあり方について検討を行っている。 ・今年度は「子供から楽しめる美術展 - 水の誘い」を実施するにあたり、大学生等ボランティアの参加を得た。</p>	<p>B</p>	<p>「子供から楽しめる美術展 - 水の誘い」において、ボランティアの受入れを試みており、今後も、更にボランティアの導入の可能性を広く検討する必要がある。</p>
<p>(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。</p>	<p>渉外活動の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>展覧会を開催するに当たり、新聞社、企業、メセナ財団より企画等の協力及び、財政支援を得て、企画運営、渉外、利用者サービス等の充実を図ることができた。 また、展覧会への支援協力を得た企業等に対し、特別鑑賞会を開催した。 ・企業との連携 別紙「実績報告書86～87ページ参照」</p>	<p>B</p>	<p>国立美術館の業務の充実を図るため新聞社等より企画・運営・広報・輸送等の協力を得るなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。 今後も、引き続き検討する必要がある。</p>
<p>5 新たな美術館施設の円滑な運営について</p> <p>(1) 東京国立近代美術館本館については、平成14年の開館に向けて、体制整備、展示等の実施準備を進め、開館後は円滑な事業実施に努める。特に、展示面積の増加を機に展示内容の一層の充実を図る。</p> <p>(2) 国立国際美術館新館については、平成16年の移転に向けて、体制整備、展示等の実施準備を進め、開館後は円滑な事業実施に努める。具体的な管理運営のあり方等については開館までに検討を進める。</p>	<p>開館への準備状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>東京国立近代美術館及び国立国際美術館で実施。</p>	<p>-</p>	<p>(東京国立近代美術館本館及び国立国際美術館で評定。)</p>
<p>6 新国立美術展示施設(ナショナル・ギャラリー)(仮称)の開設に向けた準備について</p> <p>文化庁が平成18年を目途に開設を予定している新国立美術展示施設(ナショナル・ギャラリー)(仮称)について、文化庁と連携・協力し、その円滑な開設に向けた体制整備、展示事業等の準備を推進する。</p>		<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>平成14年度から実施。</p>	<p>-</p>	<p>(平成14年度から評定する。)</p>

<p>7 その他の入館者サービス</p> <p>(1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。</p> <p>(1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。</p> <p>(1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的を実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。</p> <p>(1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。</p> <p>(2)入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。</p> <p>(3)ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。</p>	<p>その他の入館者サービス</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>入館者サービスの充実を図るため、エントランスロビーには英語対応も可能な案内カウンターを設置し、来館者への案内、質問への対応、情報の提供等を行っている。また、サイン、休憩室の整備、会場内各所への休憩用椅子の配置、美術館情報、広報印刷物等の無料配布を実施し、特に高齢者・身体障害者等の利用については、車椅子や杖の貸出サービスを行うとともに</p> <p>今年度は本館地下（トイレ・休憩室）階段のノンスリップ化及び手すりを増設する改修工事を施工した。</p> <p>展示については、展示説明・構成・動線等を適宜見直し、音声ガイドの実施（3 展覧会においてイヤホンガイド実施）及び、国立西洋美術館ガイド、展覧会案内チラシ、展示予定パンフレット並びに、展示作品リストの無料配布を実施している</p> <p>また、従来より毎週金曜日夜間開館（20時まで）及び、常設展については毎月第2・第4土曜日と文化の日に無料観覧を実施している。</p> <p>来館者の声を聞くために館内に意見箱を設置し、また、展覧会ではその都度来館者調査を実施し、今後の事業運営並びにより良いサービスの提供についての資料としている。</p> <p>当館は施設・景観を共同で構成する上野文化ゾーンのなかにあつて、それにふさわしい開かれた空間を提供することとしロダンの彫刻を配する前庭及び本館1階部分のレストラン、ミュージアムショップ、情報エリアなどを上野公園来園者、来者にフリーゾーンとして広く開放し好評を得ている。</p> <p>今年度、新たな試みとして、常設展および共催者の協力が得られた場合には、企画展についても小中学生の観覧料を無料し、ゴールデンウィーク期間中は無休とした。また、展覧会の混雑緩和策として、状況に応じて閉館時間の延長、開館時間早める措置を講じている。</p> <p>・入館者サービス 別紙「実績報告書87～88ページ参照」 ・金曜日夜間開館（20時まで） 無料観覧日（毎月第2・第4土曜日及び、文化の日）実施</p> <table border="1" data-bbox="1121 829 1498 955"> <thead> <tr> <th></th> <th>実施日数</th> <th>利用者数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>夜間開館日</td> <td>47日</td> <td>25,172人</td> </tr> <tr> <td>無料観覧日 (常設展のみ)</td> <td>24日</td> <td>12,309人</td> </tr> </tbody> </table>		実施日数	利用者数	夜間開館日	47日	25,172人	無料観覧日 (常設展のみ)	24日	12,309人	<p>A</p>	<p>入館者に対するサービスの向上を図るため高齢者、身体障害者のためのトイレやエレベータ等の設置、小中学生の常設展の無料化、休憩室の整備、広報物の無料配布、音声ガイド、夜間開館、無料観覧日、柔軟な開館時間の変更、前庭のフリーゾーン化など中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>特に、小中学生の常設展の無料化は、今後の教育普及事業との相乗効果を期待する。</p> <p>今後も、アンケート結果の分析やモニター制度を検討するなどの確に入館者のニーズを把握し、きめ細かなサービスを提供することが望ましい。</p>
	実施日数	利用者数												
夜間開館日	47日	25,172人												
無料観覧日 (常設展のみ)	24日	12,309人												

項目別評価（国立国際美術館）

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評価	
		A	B	C		段階的評価	定性的評価
<p>1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。具体的には、下記の措置を講ずる。</p> <p>(1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>(2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進</p> <p>(3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進</p> <p>(4) 外部委託の推進</p> <p>(5) 事務のOA化の推進</p> <p>(6) 連絡システムの構築等による事務の効率化</p> <p>(7) 積極的な一般競争入札を導入</p> <p>2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。</p>	効率化の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評価を決定する。			<p>1</p> <p>(1) 平成13年度独立行政法人移行時において、本部組織を構築し会計関係の概算要求関係、職員給与、共済組合関係などの一元化を行い効率化を図った。</p> <p>(2) 省エネルギー 管理部門の室温を年間常温（夏季27度・冬季25度）とし、また廊下、階段などは消灯することにより、電力量の省エネルギー対策を講じている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・廃棄物減量化 ゴミの分別収集を行い、用紙・新聞は売り払いをすることにより、廃棄物減量化を行っている。 ・リサイクルの推進 グリーン購入法に基づく商品を購入し、不用となった折りには、廃品回収業者に引き渡すことにより、リサイクルの推進を図る。 ・ペーパーレス化の推進 管理部門の通知文書などはグループウェアで行うことにより、ペーパーレス化の推進を図っている。 <p>(3) 施設として講堂があり、講演会、ワークショップ、各種委員会の利用に供している。</p> <p>(4) 外部委託業務については、平成14年度より看士委託業務を新たに導入する。</p> <p>(5) Webベースのグループウェア（サイボーズOffice4）を導入し、情報の共有による業務の効率化を図っている。</p> <p>(6) メールアドレスをグループピングすることにより、外部からの通知などの連絡や担当者不在時の対応などが速やかに見え、事務の効率化を図っている。</p> <p>(7) 独立行政法人国立美術館会計規程第23条のより、随意契約を行っている。ただし、複数業者に仕様説明を行い、見積書を徴収することにより、経費の軽減を図っている。</p> <p>2 外部委員による評議員会を年1回開催し、予算、事業、組織などの前年度報告及び次年度計画の承認を行っている。評議員会で聴取した意見は、館運営に反映させることとしている。</p> <p>平成13年度は各館において勉強会の実施を行ったが、平成14年度においてはそれに加え、公認会計士やシステムエンジニアによる講演会、講習会を実施し、より一層の職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図る。</p>	B	業務運営の効率化を図るため給与計算事務、共済組合事務などの事務の一元化、室温の管理、廊下・会談の消灯、ゴミの分別等によるリサイクル、OA化によるペーパーレス化及び看視業務の外部委託等を実施し、法人全体の運営費交付金の1.37%の効率化に積極的に貢献するなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。しかし、まだ改善可能な点があると思われるので、美術館本来の業務に支障のない程度に一般競争入札や外部委託を実施するなど、引き続き積極的に取組む必要がある。
	効率化の達成率	1.5%以上	1.0%以上 1.5%未満	1.0%未満		平成13年度は、独立行政法人国立美術館全体で1.37%の効率化を達成した。 平成13年度予算 - 運営費交付繰越額 = 平成13年度純予算額 (平成13年度純予算額 - 決算額) / 決算額 = 効率化率 4,726,536千円 - 74,848千円 = 4,651,688千円 4,651,688千円 - 4,588,482千円 / 4,588,482千円 = 0.01377	B

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評価	
		A	B	C		段階的評価	定性的評価
<p>1 収集・保管</p> <p>(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な購入を図る。また、そのための情報収集を行う。</p> <p>（東京国立近代美術館） 近・現代の絵画・水彩・素描、版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。 美術・工芸に関してはコレクションにより近代美術全般の歴史的な常設展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。 また、映画フィルム等については、残存するフィルムを可能な限り収集するとともに積極的に復元を図る。</p>	美術作品の収集（購入・寄贈・寄託）の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評価を決定する。			<p>特筆すべき成果としては、洋画においては、菅井汲の初期の代表作《侍》（1960年）及び中西夏之の70年代初頭の貴重な作品である《山頂の石蹴りNo.7》（1970年）等を購入し、戦後日本の絵画作品が充実するところとなった。</p> <p>また版画においては、泉茂《深夜のセロ弾き》（1954年）他8点や駒井哲郎《海底の祭（1951年）》他12点など1950年代の現代版画の代表作を多数購入するとともに、阿部芳文と瀧口修造による《妖精の距離》（1937年）をはじめとする詩画集の収集にも力を注いだ。日本の戦後美術に多大な影響を与えた詩人・美術評論家であった瀧口修造関連の作品は、これまでも継続的に収集を行っており、今年度も先の《妖精の距離》以外にも《デカルコマニー》（1963年）及び《漂流物・標本函》（1974年）を購入し、収集の欠を補うことができた。</p> <p>彫刻の代表的な収集品としては、三木富雄の代表作であり、強化プラスチックに銅メッキを施した堂々たる作品である《EAR》（1967年頃）を購入するとともに、他の同時期の作品3点も併せて購入し、三木の「耳」作品の体系的な収集ができた。</p> <p>工芸においては、当館がすでに所蔵している《岩の聖書》（1993年）以前の荒木高子の仕事を押さえる意味で《黒い聖書》（1980年）を購入するとともに、関西在住で現代陶芸の先駆者である林康夫による近年の陶芸作品3点を購入し、工芸作品の充実を図った。</p> <p>写真においては東松照明の50年代から近年の作品まで14点をまとめて購入する機会に恵まれた。</p> <p>また、当館で開催した展覧会の出品作家たちの作品を購入し、展覧会と連動する形で同時代の美術作品に努めている。今年度は、それぞれ個展形式で展覧会を開催した田中信太郎及び宮崎豊治の彫刻作品、ローリー・トビー・エディソンの写真作品の他、特別展「主題としての美術館」展に出品したカンディエーダ・ヘーファー及びヴィック・ムニースの写真作品、企画展「アフター・イメージ」展に出品した高谷史郎の映像インスタレーション作品等を購入することができた。</p> <p>*購入作品等については、別紙実績報告書106の1～106の13頁参照</p>	A	国立国際美術館の収集方針に基づき、菅井汲作「侍」など質の高い美術作品を167点購入し、新たに寄贈10点、寄託25点を受入れるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。寄附・寄贈は有効な収集方法の一つであるため、文化庁と連携協力し税制問題を含めたその推進方を検討することが望ましい。

<p>(京都国立近代美術館) 近代美術史における重要な作品など、近・現代の美術・工芸・写真・デザイン作品等を収集する。その際、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した収蔵品の充実にも配慮する。</p> <p>(国立西洋美術館) 中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れの概観が可能となるように、松方コレクションを中心とした近代フランス美術の充実、近世ヨーロッパ絵画の充実及びヨーロッパ版画の系統的収集を行う。</p> <p>(国立国際美術館) 日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、主に1945年以降の日本及び欧米の現代美術並びに国際的に注目される国内外の同時代の美術を系統的に収集する。</p> <p>(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている部分を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。</p>																								
<p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。</p> <p>(2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。</p>	保管の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>展示場内では、作品を安全に展示するために展示場内数十箇所の温度・湿度、空気汚染、照明、防災対策、保安対策などの調査を継続的に実施し、必要に応じた改善の実施を行っている。</p> <p>また、収蔵庫の温度・湿度のデータの管理により、作品への影響を最小限とするよう空調設備の運転を行っている。</p> <table border="1" data-bbox="1172 766 1795 871"> <thead> <tr> <th></th> <th></th> <th>空調稼働時間</th> <th>温度</th> <th>湿度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">展示場</td> <td>夏期</td> <td>9:30～17:00</td> <td>25</td> <td>50%</td> </tr> <tr> <td>冬期</td> <td>9:30～17:00</td> <td>20</td> <td>50%</td> </tr> <tr> <td>収蔵庫</td> <td>夏期、冬期</td> <td>9:30～17:00</td> <td>22</td> <td>55%</td> </tr> </tbody> </table>			空調稼働時間	温度	湿度	展示場	夏期	9:30～17:00	25	50%	冬期	9:30～17:00	20	50%	収蔵庫	夏期、冬期	9:30～17:00	22	55%	A	<p>収蔵品の保存及び管理環境の維持充実を図るため美術作品の種類、保管場所等の違いにより、温湿度や照明等を適正に管理するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>今後も、年間を通して適正な温湿度の管理をすることが望ましい。</p> <p>また、保存カルテを作成するとともに、長期的に保存環境を整備することが望ましい。</p>
		空調稼働時間	温度	湿度																				
展示場	夏期	9:30～17:00	25	50%																				
	冬期	9:30～17:00	20	50%																				
収蔵庫	夏期、冬期	9:30～17:00	22	55%																				
<p>(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。</p> <p>緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。</p> <p>伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。</p> <p>(3)-2 国内外の美術館等の修理、保存処理の充実に寄与する。</p>	修理の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから計画的に修復を行った。</p> <p>今年度は下記の作品の修復を実施。</p> <p>ジャン＝ピエール・レイノー《木の葉》(1975年)</p> <p>剥落した葉の接着、額装</p>	B	<p>傷みの著しいジャン＝ピエール・レイノー作「木の葉」21点を修理するなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>修理報告書を作成しデータベース化することは、美術作品を再修理する際の貴重な記録となるため、積極的に取り組むことが望ましい。</p> <p>また、多くの美術作品が修理を必要とする中で、中・長期的な修理計画を立てる必要がある。</p>																			
<p>2 公衆への観覧</p> <p>(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。</p> <p>(1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。</p> <p>(1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。</p> <p>なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。</p>	<p>展示会の状況</p> <p>平成13年度常設展示</p> <p>入場者数</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>平成13年度は、現代美術を中心に、日本美術の成立と発展が世界の美術のそれと密接な関係を有することを美術作品の展覧を通じ、系統的具体的に明らかにするため下記のとおり展覧会を実施した。特別展及び企画展については、8回実施した。</p> <p>また、その他地方巡回展も実施した。</p> <p>なお、各館の連携による共同企画展等については、検討中である。</p> <p>当館の常設展示は、作品の収集方針に沿って、主として第二次世界大戦後から今日に至る世界の美術の動向を紹介している。</p> <p>展示作品は、受託品を含む館蔵品から選び、年に4回の展示替えを行った。展示場所は、企画展等の使用会場との兼ね合いで、地階、1階、2階を充てた。ロビー、屋外展示場など、屋内展示場以外のスペースには、主に彫刻を展示した。また、地階に映像芸術(ビデオ・アート)を自由に鑑賞できるコーナーを設け、年に4回程度、展示替えを行った。</p> <p>可能な限り多くの所蔵品を紹介すべく努力しているが、展示スペースに限界があり、残念ながら十分に紹介できる機会を持ち得ていないのが現状である。今後も引き続き工夫していかなければならないと痛感している。</p> <p>入場者数 118,567人</p>	<p>B</p> <p>A</p> <p>A</p>	<p>広く国民に優れた美術作品を観覧する機会を与えるため、国民の関心に応えたものや学術的意義の高いものなどバランスに配慮しながら常設展、企画展8回、地方巡回展2回を開催し、目標入館者数以上の実績を上げるなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>現代美術中心のため、作品が難解で集客に結びつけることが難しいが、より多くの人々に現代作品を紹介できるよう企画・内容を工夫する必要がある。なお、広報活動については、さらに充実を図る必要がある。</p> <p>1945年以降の日本及び欧米の現代美術等を紹介するため地下、1階及び2階において常設展を実施しており、年間を通して4回の陳列替えを行うなど、魅力ある常設展とするため積極的に取組んだ。作品が難解なことや立地条件等から入館者数は伸び悩んでいるが、積極的に広報等に取組み、より多くの人々に観覧してもらえるよう努力する必要がある。なお、平成13年度は「エジプト文明展」の影響で多くの人々が観覧した。</p>																			

<p>(東京国立近代美術館) 本館 年3～5回程度 工芸館 年2～3回程度 フィルムセンター 年5～6番組程度</p> <p>(京都国立近代美術館) 年6～7回程度</p> <p>(国立西洋美術館) 年3回程度</p> <p>(国立国際美術館) 年5～6回程度</p> <p>(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。</p> <p>(1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。</p> <p>(1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。</p> <p>なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績 以上の入館者数となるよう努める。</p> <p>また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。</p> <p>(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。</p>	<p>「世界四大文明 エジプト文明展」</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>「世界四大文明 エジプト文明展」は、NHK大阪放送局との共催展であり、平成12年の夏に東京と横浜の四つの博物館・美術館で同時に開催された「世界四大文明展」の全国巡回展の一つである。</p> <p>ナイル河の上流からもたらされる河水と肥沃な土壌により、紀元前3000年頃、エジプトでは農耕文化の開花とともに、偉大な文明が形成された。巨大なピラミッドや壮麗な神殿が数多く造られ、それらは栄華を誇った古代エジプト文明の遺産として今も残されている。神殿や墳墓には、色鮮やかな絵画やレリーフ、彫刻や道具などが数多く副葬された。それらから古代エジプト人の生活や精神世界を垣間見ることができる。</p> <p>本展には、エジプト考古庁との交流によって実現した協力関係により、カイロ博物館から貴重な所蔵品75点が出品された。中でも《プセンネス1世の黄金のマスク》は第21代王朝3代目の王プセンネス1世のミイラが被っていたもので、ツタンカーメン王のマスクに次ぐものとして評価の高いものである。これら貴重な品々が出品されたことは、日本とエジプトとの国際交流の大きな成果である。</p> <p>古代エジプト文明は、美術あるいは文化の原点の一つであり、その精緻な技巧や独特な表現方法は近代以降の美術にも多大な影響を与えていると同時に、人類の英知、文明の在り方を探るうえでも重要な研究対象でもある。21世紀を迎えるにあたり、カイロ博物館の秘宝に触れ、改めて数千年にも及ぶエジプト文明の歴史を振り返ることで、人類にとって「文明」「文化」とは何かを問いただす貴重な機会となった。</p> <p>本展では、観覧者の理解を助けるために多種多様な解説パネルを設置するだけでなく、各コーナーごとにハイビジョン映像による解説を上映した。同時に主要展示物を解説する音声ガイドも実施した。また、コンピュータ端末による展示物検索コーナーを設け、観覧者のより深い理解の助けとした。これらの試みは、多彩な情報提供により、展示品の制作背景も含めてわかりやすく紹介され、深く理解ができた大変好評であった。</p> <p>また、入館者数は40万人以上にのぼり、大盛況となった。老若男女を問わず多くの来館者に貴重な機会を提供できたことは、大阪における主要文化施設としての当館の役割を十分に果たしたと言える。</p>	<p>A</p>	<p>展覧会の内容については申し分ないが、活動の中核に現代美術をおく国立国際美術館において、エジプト文明展を開催することに違和感を感じる。しかし、これを開催することにより、入館者を常設展へと導き、現代美術に接する機会を与えるきっかけとなったことに意義があった。</p>							
	<table border="1"> <tr> <td>入場者数</td> <td>34,000人以上</td> <td>23,800人以上 34,000人未満</td> <td>23,800人未満</td> <td>13年度入場者数 80,962人(平成13年4月1日から4月8日)</td> <td>A</td> </tr> </table>	入場者数	34,000人以上	23,800人以上 34,000人未満	23,800人未満	13年度入場者数 80,962人(平成13年4月1日から4月8日)	A	<p>企画展「ドイツにおけるフルクサス 1962-1994」</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>「流れる、広がる、変化する」を意味するラテン語からの造語である<フルクサス>は、1960年代初頭にニューヨークで始まり、世界中に波及した前衛芸術のムーヴメントである。それは、従来の芸術観について改めて考え、芸術を定義し直そうとするものだった。ジャンルの枠組を越えて、美術、音楽、舞踏、詩の境界を横断するその活動は、実験的かつ根元的であり、フルクサスの名のもとに展覧会、コンサート、パフォーマンス、また出版活動や、作品の販売も行っている。このようにフルクサスは、現代文化について多くの重要な問題を投げかけ、ここ40年間の芸術の展開に大きな影響を与えてきた。とりわけパフォーマンス・アートや、インスタレーションなどの新しい表現形式を発展させたり、ビデオのような新しいメディアを使っている点で見逃せない。さらにその国際性は、我が国の芸術家をも巻き込み、多くの者の参加をうながした。</p> <p>本展では、国際的なフルクサスの活動の中でも、特にドイツに焦点を当てた。内容は豊富で、ドイツの諸都市での30年以上にわたる活動を、28名のさまざまな国からの芸術家たちによる約350点の作品と、歴史的な催し物の記録をとおして振り返った。</p> <p>日本におけるフルクサス関連の展覧会としては最大となった本展は、ドイツにおけるその全体像を知るまたとない機会となった。ひいては、我が国の芸術家にも多大な影響を与えたフルクサスについて、その当時を知る人にも知らない人にも改めて考える契機となった。また、関連行事として企画した2つのパフォーマンスは、大盛況となり、多くの方々へフルクサスの精神を再確認していただけたものと考えられる。</p> <p>アンケートを行った結果8割の肯定的意見があった。</p>	<p>A</p>	<p>国際的な広がりを見せた前衛芸術の運動をドイツに焦点を当てて紹介したものとして、企画・内容ともに充実した展覧会であった。</p> <p>特に、パフォーマンスは好評であった。</p>
	入場者数	34,000人以上	23,800人以上 34,000人未満	23,800人未満	13年度入場者数 80,962人(平成13年4月1日から4月8日)	A					
<table border="1"> <tr> <td>入場者数</td> <td>4,000人以上</td> <td>2,800人以上 4,000人未満</td> <td>2,800人未満</td> <td>入場者数 8,825人</td> <td>B</td> </tr> </table>	入場者数	4,000人以上	2,800人以上 4,000人未満	2,800人未満	入場者数 8,825人	B	<p>企画展「宮崎豊治 - 眼下の庭 - 」</p> <p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>鉄を素材に、自らの身体や身边を題材とした特異な立体作品の制作で知られる彫刻家宮崎豊治。この展覧会は、宮崎の主に1980年代以降の作品を紹介したものである。</p> <p>宮崎豊治は、1946年石川県金沢市生まれ。金沢美術工芸大学美術学部彫刻を卒業後、神戸に拠点を移し、以後現在にいたるまで関西を中心に制作、発表を続けている。1970年代の後半から「身辺モデル」と題する、鉄を素材とした彫刻作品の制作を開始。作家自身のさまざまな身体部位のサイズを作品のサイズに組み込んだり、自らを取り巻く環境や風景など、私的な記憶や感覚をもとにした作品で注目を集めた。</p> <p>1980年代の後半からは「眼下の庭」のシリーズが開始され、主観的な時空間感覚によって変容された、より深い作品世界が出現する。本展覧会では、これら従来の制作の延長上に位置付けられることとなる新作とドローイング作品、鉄の作品に移行する以前の木による作品もあわせて彫刻49点とドローイング約50点を展示。宮崎の創作活動の全体像がバランスよくまとめられ、わかりやすく展示されていたとして好評を得た。</p> <p>また、会期中には、大阪教育大学教授の田中恒子氏を招いての対談を開催するなど、多角的な視点から作品を取り上げることで、現代彫刻に対する来館者の関心を高めることができた。</p> <p>アンケートを行った結果9割の肯定的意見があった。</p>	<p>B</p>	<p>最近、注目を集めている作家を取り上げた国立国際美術館ならではの展覧会であった。</p>	
入場者数	4,000人以上	2,800人以上 4,000人未満	2,800人未満	入場者数 8,825人	B						
<table border="1"> <tr> <td>入場者数</td> <td>2,800人以上</td> <td>1,960人以上 2,800人未満</td> <td>1,960人未満</td> <td>入場者数 2,137人</td> <td>B</td> </tr> </table>	入場者数	2,800人以上	1,960人以上 2,800人未満	1,960人未満	入場者数 2,137人	B					
入場者数	2,800人以上	1,960人以上 2,800人未満	1,960人未満	入場者数 2,137人	B						

近作展26「ローリー・トビー・エディソン - からだへの瞑想 - 」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	ローリー・トビー・エディソンは1942年ニューヨーク生まれ、サンフランシスコ在住の写真家である。30代に入ってからフェミニズム運動と関わりはじめ、ファット・フェミニズム（肥満受容）運動を中心に活動を展開。太った女性をモチーフにしたモノクロームの彼女の写真は大きな話題を呼んだ。 女性の非現実的な体型が理想として意識的、無意識的に刷り込みが繰り返されており、このため、拒食症、過食症といった心の病を起こしてしまったり、という不幸な事例は後を絶たない。エディソンの写真は、「太った女性は美しい」というテーマを掲げながら撮影された。ゆったりとくつろぎ、堂々とした女性達の姿からは彼女たちの勇気と威厳とが感じられ、人間としての「美しさ」が発せられる。 また『親しい男性』シリーズでも、やはりメディアに流通する理想的な男性ではなく、現実の身近な男性達がヌードで登場する。「男らしさ」という人工的な規範に縛られ、その虚構性自体に恐らく気づいていない男性たちが、職業などの社会的属性を示す衣服を脱いで、裸体のモデルとなった。 幼少期を第二次世界大戦後まもない時代に送ったエディソンの記憶には、戦後明らかにされ、メディアで盛んに報道された大量虐殺による犠牲者達のうず高く積み上げられた裸の屍体が焼き付いており、裸体への彼女のこだわりは、この記憶に由来するのかもしれない。彼女の写真は、知らず知らずのうちに固定された「見るもの - 見られるもの」という支配的な関係を解体してみせる。 本展では、『大きな女性』シリーズから19点、2001年に完結したばかりの『親しい男性』シリーズから73点、2000年から開始された『日本の女性』シリーズから8点、計100点を、写真モデルによるコメントと共に紹介したが、彼女の作品のイメージの持つ喚起力とテキストの力強さとがあいまって、会場を訪れる多くの人々に深い感銘を与え、話題となった。 アンケートを行った結果9割の肯定的意見があった。	A		
入場者数	2,800人以上	1,960人以上 2,800人未満	1,960人未満	入場者数 3,716人	A

馴染みの薄い作家であるが、人間の意識構造に鋭い批判的な目を向ける女性写真家を取り上げた意義のある展覧会であった。
また、作家が子供のためのワークショップに協力したことも意義があった。

企画展「田中信太郎 - 饒舌と沈黙のカノン - 」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	本展は、日本の現代美術界で重要な役割を担ってきた中堅の作家を紹介する展覧会であった。 戦後日本で現代美術が展開を始めた場として「読売アンデパンダン展」という無鑑査の公募展があった。特に1958年の第10回展以降、篠原有司男や工藤哲巳等の廃物や日用品を利用したような作品によって社会的な注目を集めた。東野芳明が「ガラクタの反芸術」と名付けたその動きは、1960年に入り、篠原が中心となり赤瀬川原平や荒川修作等によって「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」として結集し、展覧会の他に街頭パフォーマンスやハプニングをも行った。本展でとりあげた田中信太郎が、美術界に登場してきたのはそのような日本の現代美術が熱を帯びた時期であった。高校を卒業して日立から東京に出てきた田中は、その読売アンパンやネオ・ダダに参画し、東野のような美術評論家に早くから注視された。 ネオ・ダダ解散後、田中はジャンクオブジェによる作品から、1965年の初個展でミニマルな表現へと大きな変革を遂げた。そして1968年には「点・線・面」と題された個展を開催した。点としての光源、線としてのピアノ線、面としてのガラス板によるその展示は、インスタレーションという用語が生まれる以前の日本で最初のインスタレーション作品であり、田中の新たな展開の起点となる作品だった。その後、田中は、その禁欲的でミニマルな表現と、ネオ・ダダで培った過剰とも言える表現主義的な要素の間を往還しながら、独自の展開を遂げた。 本展では、上記の《点・線・面》の再構成作品から、今年初めの「インド・トリエンナーレ」出品作品に至るまで、田中信太郎の代表的な作品34点によって、内外のムーヴメントから隔絶し、独自の活動を続ける作家の芸術をはじめて本格的に紹介した。 本展を通じて70年前後に胎動していた日本の現代美術の重要な作品を再検討することが可能となり、現在の田中の仕事を考える上で重要な機会となった。 アンケートを行った結果9割の肯定的意見があった。	A		
入場者数	2,800人以上	1,960人以上 2,800人未満	1,960人未満	入場者数 2,982人	A

1960年以降の日本の現代美術の動きに寄与した田中信太郎の業績を再確認させる地道な取り組みであった。

特別展「主題としての美術館 - 美術館をめぐる現代美術 - 」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	美術館のテーマとして「美術館」を対象とすることは、日本人にとって奇異に聞こえるかもしれない。そもそも日本では、美術館のような社会的で公的な性格のものが芸術表現の主題になることは多くはない。しかし欧米では、遅くとも20世紀の初めから、美術館が批評の対象として取り上げられてきており、今日ではアーティストたちの主要な関心事の一つになっている。 当館では2000年に当美術館の空間を活かした作品を集めた「空間体験」展を開催し、美術館空間の特性について考える機会を提供した。それに対し本展では、美術館の展示方法について考えさせるもの、美術館の建築や歴史に想を得たもの、美術館をめぐる人々をモチーフにしたものなど、美術館との関わりから生まれた作品をなるべく網羅的に集め、15組（17名）の作家達による作品66点を展示した。周知のように、2001年4月から国立美術館・博物館は独立行政法人化されたが、実際、日本の美術館は変革期にある。そのような現在にあって、美術館について改めて広く考える機会を提供することが出来たものと考えられる。 またテーマとの関係上、海外のアーティストを中心とした国際的な展覧会となったが、その多くは日本に未紹介の、しかし海外の第一線で活躍中のアーティストたちであり、国際交流の良き舞台となった。 アンケートを行った結果8割の肯定的意見があった。	A		
入場者数	6,000人以上	4,200人以上 6,000人未満	4,200人未満	入場者数 6,241人	A

芸術家が制度、展示空間及び展示方法など美術館に対する批判を投げかけたものとして、価値のある企画であった。
ただし、入館者が、作品を通じてその意図を理解することができたか疑問である。

企画展「《現代美術へのいざない》アフター・イメージ-残像-」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>本展は、現代美術をより多くの人々に触れていただくことを目的とした展覧会であった。展覧会のテーマは、現代美術における主要な関心事の一つである「イメージ」の在り方に置いた。とりわけ抽象絵画の全盛期を過ぎた1960年代以降に頻りに現れることとなる現代的な「イメージ」の特質を紹介することを主旨とした。</p> <p>展示作品は当館の所蔵品を中心として構成されたが、本展覧会のテーマをより十全に鑑賞者に伝えるべく、他美術館、作家、個人の所蔵家の所有する作品も数点展示した。</p> <p>現代美術における「イメージ」の在り方とは、近代までの「具象」の在り方とは根本的に異なっていると言える。それは知覚し認知した対象を忠実に再現するという「再現芸術」の在り方から、そのような認知から再現表象へと至る一連のプロセスそのものの問い直しへと力点が移行していると言い換えることができる。我々が何かを見て認識するという行為は、白紙の状態ではなされるわけではない。それは常に、それまで網膜上に焼き付けられ記憶化されてきた様々な「残像」との関係において、つまり蓄積された「イメージによって(アフター)」なされているのである。このような、対象と再現、作品と鑑賞者の視線、といったイメージをめぐる一連の回路の在り方は、現代美術において様々な形で問われてきた。特に1960年代以降、対象とそこから生まれるイメージとの関係に着目し、時間の推移による変化や、視線や記憶が介在することによって生じる「ズレ」を明確化させる試みが多く登場するようになった。</p> <p>この展覧会では、そのような「ズレ」を意識させる絵画、彫刻から映像インスタレーションまで、22名の作家による約60点の作品を展示し、現代美術における「イメージ」の在り方を検証した。展示は「イメージ」にまつわる「時間」「記憶」「既成イメージ」という三つのテーマに沿って、軌跡を追って「記憶とイメージ」「イメージ・アフター・イメージ」のセクションに分けて行い、それぞれのセクションには解説パネルを設けたが、上記のようなテーマを設定することで、現代美術を鑑賞する新しい視点が提供でき、日頃現代美術に慣れ親しんでいない来館者からも、このような企画の継続を望む声が聞かれるなど好評を得た。</p> <p>アンケートを行った結果9割の肯定的意見があった。</p>	A	国立国際美術館の収蔵品を活用した企画展であり、現代美術を取り上げたものでありながら解説パネルを設けるなど、その理解の促進に積極的に努力した。
入場者数	2,000人以上 1,400人以上 2,000人未満 1,400人未満	入場者数 2,737人	A	
近作展27「0 JUN」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>「近作展」は、現在活躍の中堅の美術家を紹介する個展で、毎回、新作を含む過去数年に制作された作品を中心に展示している。今回は、0 JUNの作品を紹介した。</p> <p>0 JUNは、1956年東京生まれ。1982年に東京芸術大学大学院美術研究科油画専攻修士課程修了。当初、絵を描くことを無条件に習慣化してしまうことに疑問を感じ、ほとんど制作を止めた時期があった。また、1980年代後半には自作の合金ペンを使って実験的なパフォーマンスを試みたり、1990年から1994年まで滞在したドイツでは写真による作品を手がけた。</p> <p>しかし、この数年、紙にグワッシュやクレヨンあるいは鉛筆で、人物、家、痣(あざ)、校章、衣類などを簡潔かつ平板に描く独特の作品によって注目を集めている。</p> <p>また、個展のタイトルに「性的人々」「彼女の軍隊」「感情教育」といったテーマをそのつど設定すると同時に、作品制作の動機や経緯を短編小説風の不思議な物語に仕立てて発表するなど、描くことと書くことの両面に深い関心を寄せた制作活動を展開している。</p> <p>0 JUNのこうした絵と文章は、無意識のうちに容認され、慣習化される常識や図式をさりげなくしかし根源的に問いなおすものである。本展では、1996年以降の主な連作に最新作を加えた約100点を、自作の文章とともに紹介した。</p> <p>公的な美術館での本格的な紹介は、今回が初めてで、知名度が低かったにもかかわらず、異色の画風と自作の文章が来館者の興味を引き、若い世代を中心に反響が大きかった。</p> <p>アンケートを行った結果8割の肯定的意見があった</p>	A	国立国際美術館ならではの現代作家を取り上げた展覧会であり、特に若い世代に受け入れられた。また、入館者の年齢など展覧会の実績を分析し、今後の企画に役立てることが望ましい。
入場者数	3,600人以上 2,520人以上 3,600人未満 2,520人未満	入場者数 7,277人	A	
国際交流展「安斎重男展」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	ポーランド国は経済状態の混乱期であり、先方美術館が、予算の削減をされてしまったため、海外の共催事業は次年度に延期されることになった。なお、当館長宛に開催館のブンケル・シュトゥーキ館長からの謝罪の手紙が届いている。		〔共催者の都合により、開催が平成14年度に延期されたため、来年度、評定する。〕 なお、海外交流展については、共催者との連絡調整を綿密に行い、中期的な展望のもとに企画・実施することが望ましい。
入場者数	1,150人以上 1,150人以上 805人未満 805人未満	-	-	
国立博物館・美術館巡回展「信仰と美術」	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>地方巡回展の実施</p> <p>本展は、独立行政法人国立博物館奈良国立博物館と当館の共同事業として企画された展覧会で、和歌山県立博物館及び徳島県立博物館で開催された。</p> <p>日本には原始・古代から近代に至るまで、さまざまな信仰があり、それらを背景に独自の文化や美術作品を生み出してきた。本展はそのような「信仰と美術」を主題として、「古代の信仰と美術」「日本の仏像美術」「近代美術と信仰」の三部門で構成し、日本人の信仰に基づく美術の展開を紹介したものであった。</p> <p>信仰という普遍的なテーマを仲介として、古美術から現代美術までという広範な時代にわたる、国宝を含む国立博物館・国立美術館所蔵の重要な美術作品を、地方に在住する人々に紹介するよい機会となった。</p>	B	公立博物館等と連携協力を図り、地方において優れた美術作品を観覧する機会を提供するものであった。今後も、開催館の要望にできるだけ応え、外部研究者と協力して学術的意義のある質の高い展覧会を開催する必要がある。また、国立博物館と共催することの意義について、今後、検討する必要がある。
入場者数	12,296人以上 8,607人以上 12,296人未満 8,607人未満	総入場者数7,971人	C	
(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。	貸与の状況 法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施した。 13年度貸出先総数27件 貸出作品総数117件	A	美術作品の効果的活用を図るとともに、他館との相互活用を促進するため、美術作品117点を貸与するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。優れた現代美術を収蔵する国内の美術館に限られているため、貸与等の要望が増えると思われるが、収蔵品の保存状態に留意し、展覧会の趣旨を考慮しながら、幅広くその要望に答えることが望ましい。

<p>3 調査研究</p> <p>(1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。</p> <p>収蔵品に関する調査研究 美術作品に関する調査研究 収集・保管・展示に関する調査研究 美術史、美術動向、作者に関する調査研究 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等</p> <p>(1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。</p> <p>(2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。</p> <p>また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。</p>	<p>調査研究の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>当館では年度計画に基づき、6項目の調査研究を計画的に実施し、当館の展覧会図録、当館の月報、研究紀要、学会誌等を中心に研究結果として29件の論文、講演等を報告し、確実な成果を得ることができた。</p> <p>また、一部の研究については引き続き研究を継続している。</p> <p>(1) 欧米の現代美術に関する調査研究 5名-12件の報告があった。当館で開催された「フルクサス」展に関する報告を中心にアメリカ、イタリアの現代美術に関する論文、講演等が発表された。 *別紙実績報告書98、99頁参照</p> <p>(2) 日本の現代美術に関する調査研究 3名-8件の報告があった。当館で開催された現代美術作家、0 JUN、田中信太郎、宮崎豊治に関する論文が発表された。 *別紙実績報告書99頁参照</p> <p>(3) 日本及び周辺領域の現代美術に関する調査研究 2名-3件の報告があった。アートと情報、思想、自然科学との学際的な関わりについての論文が発表された。アートと情報の関わりに関しては継続して研究が為される予定である。 *別紙実績報告書99、100頁参照</p> <p>(4) 絵画・版画等に関する調査研究 2名-5件の報告があった。当館館蔵品の調査研究を中心に、日本の戦後から現代にまでいたる絵画・版画作品の論文が発表された。 *別紙実績報告書100頁参照</p> <p>(5) 彫刻・インスタレーション等に関する調査研究 3名-4件の報告があった。当館館蔵品の調査研究に基づく彫刻作品の調査研究、戦後日本の美術運動に関してその設置形態(インスタレーション)に関する論文が発表された。 *別紙実績報告書100頁参照</p> <p>(6) 他の美術館等における調査研究に対する協力 1名-1件の報告があった。千葉市美術館他で開催された『日本の版画』展カタログに1920年代の創作版画に関する論文が発表され、高岡市美術館における『南桂子・宮脇愛子展』に関する作品調査協力が為された。 *別紙実績報告書101頁参照</p>	<p>A</p>	<p>収集・保管、公衆への観覧、教育普及の事業など美術館活動の推進を図るため、欧米の現代美術に関する調査研究、日本の現代美術に関する調査研究及び彫刻・インスタレーション等に関する調査研究等を実施するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。また、科学研究費補助金の獲得に努め、調査研究の充実を図った。</p> <p>調査研究については、今後も幅広く外部研究者との交流を促進し、積極的に取り組むことが望ましい。</p> <p>なお、研究成果については、図録等の刊行物のみならず、学会等においても幅広く積極的に発表することが望ましい。</p>																								
<p>4 教育普及</p> <p>(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。</p> <p>(1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。</p>	<p>資料の収集及び公開(閲覧)の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>図書に関しては、近現代美術を対象とする基本書籍の収集と整理を継続して行った。当館で催す展覧会出品作品、新収蔵作品の撮影、その写真の整理等も行われている。</p> <p>なお、その蓄積データをもとに、テレフォンサービス、情報コーナーの設置により、展覧会案内、美術館情報、収蔵作品の情報等広く公開するべく検討した。</p>	<p>B</p>	<p>新たに近現代美術に関する図書を収集し、情報コーナーにおいて一般に公開するなど、中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>研究者等に対する現代美術研究の中心的な資料室を整備する必要がある。</p> <p>今後も、4館の資料を登録及び検索できる現代的システムの開発や広報の強化を図り、より一層、資料を活用する必要がある。</p>																								
<p>(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。</p> <p>また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。</p>	<p>児童生徒を対象とした講座等の実施状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>「子どものためのワークショップ」は、年度計画通り4回実施した。実施時期は、子どもが参加しやすいよう、学校の夏休みと春休み期間に合わせて設定した。当館における「子どものためのワークショップ」の特筆すべき点は、現存作家を多く扱う美術館であるという当館の特性を生かし、現役の作家と子どもたちが直接交流することができるということである。平成13年度は展覧会の出品作家であるローリー・トビー・エディソン氏と画家の野田裕示氏、美術家の徳田憲樹氏に講師をお願いした。一回の参加人数は、講師の目が行き届く人数の限界である20名ほどに限った。これは、会場となった講堂の広さの問題もあるが、子どもたちが十分にワークショップに参加し、楽しんでもらえるよう配慮したためである。</p> <p>また、この「子どものためのワークショップ」は、子どもに美術への関心を持ってもらう機会を作るだけでなく、教育に関心のある大学生の実地体験の場ともなっている点も特筆しておかなければならない。平成13年度は近隣大学の学生や大学院生など延べ39名が参加、準備から当日の進行補助まで協力して行った。</p> <p>他に「子どものためのビデオ上映」も行った。 *別紙実績報告書101、102頁参照</p>	<p>A</p>	<p>教育普及の取組みの充実や学校教育における美術館の活用の推進を図るため、限られた人員と予算で積極的にワークショップ等を実施し、平成12年度の開催回数以上の実績を上げるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>特に、作家を招いた子供のためのワークショップは、現代美術への理解を深めるうえで有意義であった。</p> <p>また、公市立美術館等に良い刺激を与えるため、海外における優れた実践例を紹介することが望ましい。</p>																								
	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="626 1967 774 2058">子どものためのワークショップの開催件数</td> <td data-bbox="774 1967 863 2058">4回以上</td> <td data-bbox="863 1967 1012 2058">3回</td> <td data-bbox="1012 1967 1101 2058">3回未満</td> <td data-bbox="1101 1967 2383 2058">開催件数4回</td> <td data-bbox="2383 1967 2504 2058">A</td> </tr> <tr> <td data-bbox="626 2058 774 2058">子どものためのワークショップの参加者数</td> <td data-bbox="774 2058 863 2058">188人以上</td> <td data-bbox="863 2058 1012 2058">132人以上 188人未満</td> <td data-bbox="1012 2058 1101 2058">132人未満</td> <td data-bbox="1101 2058 2383 2058">総参加者数97人</td> <td data-bbox="2383 2058 2504 2058">C</td> </tr> <tr> <td data-bbox="626 2058 774 2058">子どものためのビデオ上映の開催件数</td> <td data-bbox="774 2058 863 2058">3回以上</td> <td data-bbox="863 2058 1012 2058">2回</td> <td data-bbox="1012 2058 1101 2058">1回</td> <td data-bbox="1101 2058 2383 2058">開催件数4回</td> <td data-bbox="2383 2058 2504 2058">A</td> </tr> <tr> <td data-bbox="626 2058 774 2058">子どものためのビデオ上映の参加者数</td> <td data-bbox="774 2058 863 2058">30人以上</td> <td data-bbox="863 2058 1012 2058">21人以上 30人未満</td> <td data-bbox="1012 2058 1101 2058">21人未満</td> <td data-bbox="1101 2058 2383 2058">総参加者数53人</td> <td data-bbox="2383 2058 2504 2058">A</td> </tr> </table>	子どものためのワークショップの開催件数	4回以上	3回	3回未満	開催件数4回	A	子どものためのワークショップの参加者数	188人以上	132人以上 188人未満	132人未満	総参加者数97人	C	子どものためのビデオ上映の開催件数	3回以上	2回	1回	開催件数4回	A	子どものためのビデオ上映の参加者数	30人以上	21人以上 30人未満	21人未満	総参加者数53人	A				
子どものためのワークショップの開催件数	4回以上	3回	3回未満	開催件数4回	A																								
子どものためのワークショップの参加者数	188人以上	132人以上 188人未満	132人未満	総参加者数97人	C																								
子どものためのビデオ上映の開催件数	3回以上	2回	1回	開催件数4回	A																								
子どものためのビデオ上映の参加者数	30人以上	21人以上 30人未満	21人未満	総参加者数53人	A																								

<p>(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。</p> <p>それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。</p> <p>また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。</p>	講演会等の実施状況	法人による事後点検評価の結果をふまえつつ、各委員の協議により評定を決定する。	<p>展覧会に合わせた教育普及事業としては、講演会や対談やシンポジウムなどを積極的に実施した。特に現存作家を扱う展覧会では、作家自身による講演会や対談、シンポジウムなどは出品作家の生の声に触れることができる貴重な機会となった。また展覧会ごとにギャラリートークを必ず行った。このギャラリートークは、担当学芸員が展示場内で実際に作品を見ながらわかりやすく解説を行うもので、来館者が実際に感じた疑問や感想などを学芸員にフィードバックしてもらう格好の機会ともなっている。</p> <p>平成13年度の展覧会関連の教育普及事業として特筆すべきものは、「ドイツにおけるフルクサス1962-1994」展に合わせて実施された二つのパフォーマンスである。この展覧会で扱われた「フルクサス」という運動は、パフォーマンスを中心としたものであり、展示作品だけでは本来のフルクサスの活動を十全に紹介できない。そのため、フルクサスの活動をより直接的に体験してもらうため、フルクサスのメンバーである齊藤陽子氏（ドイツ在住）と塩見允枝子氏（日本在住）にパフォーマンスをお願いした。反響は予想以上に大きく、講堂で行われた塩見氏の《フルクサス裁判》では、観覧希望者が会場内に入りきらなかった。そのため、会場に入れなかった観覧希望者には、展示場に設置したモニターで、会場内に持ち込んだビデオカメラの映像を観覧してもらった。</p> <p>*別紙実績報告書102～104頁参照</p>	A	<p>美術作品等の理解促進を図るため、限られた人員と予算で積極的に講演会、ギャラリートーク、シンポジウム、パフォーマンスを実施し、平成12年度の実施回数以上の実績を上げるなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>特に、パフォーマンスは入館者の関心に応えた。</p> <p>また、講座等については、年齢・性別・学歴を問わず、幅広い国民各層を対象とするよう配慮し、その他の業務に支障を来さない程度に充実させることが望ましい。</p>	
	講演会	4回以上	3回	3回未満	開催件数5回	A
	講演会の参加者数	2,201人以上	1,541人以上	1,541人未満	総参加者数570人	C
	ギャラリー・トーク	7回以上	5回以上7回未満	5回未満	開催件数7回	A
	ギャラリー・トークの参加者数	358人以上	251人以上	251人未満	総参加者数392人	A
	パフォーマンス	2回以上	1回	0回	開催件数2回	A
	パフォーマンスの参加者数	400人以上	280人以上	280人未満	総参加者数600人	A
	ビデオ上映	4回以上	3回	3回未満	開催件数5回	A
	ビデオ上映の参加者数	4,347人以上	3,043人以上	3,043人未満	総参加者数111人	C
講演会等に対するアンケート結果	80%	56%以上	56%未満	用紙によるアンケートは行っていないが、口頭による確認を行った。内容的には、80%以上の肯定的意見があった	A	
<p>(4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。</p> <p>(4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キューレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。</p> <p>(4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。</p> <p>(4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。</p>	研修等の取組み状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>中級学芸員実務研修として愛媛県美術館学芸員1名を受け入れた。</p> <p>また、他の機関が実施する研修への協力として、文化庁が実施する中級学芸員研修（45機関45名受入）及び大学生の学芸員資格取得のための博物館実習（15大学21名受入）を実施した。</p> <p>*別紙実績報告書104頁参照。</p> <p>公私立美術館の展覧会等に対する協力としては、高岡市美術館に対して南桂子作品及び文献の調査協力を行った。（南桂子・宮脇愛子展）</p>	B	<p>美術館関係者等の人材育成及び人的ネットワークの形成を図るため、公私立博物館等の学芸担当職員や博物館実習生等22名を受入れ美術館の職場を体験する機会を提供し、中級学芸員研修を実施するなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>学芸担当職員については、今後も、受入可能な人数の範囲内で積極的に取り組む必要がある。ただし、博物館実習生については、美術館側の負担にならないよう、受入れ状況を常に見直すことが望ましい。</p> <p>なお、外国美術館の学芸員との交換研修なども検討する必要がある。</p>	
<p>(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。</p> <p>また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。</p>	広報活動の状況	法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。	<p>年報、概要、図録、展覧会に伴うリーフレット、ジュニアガイドブック、月報、展覧会案内を発行し、広報活動を展開した。</p> <p>さらに児童むけにわかりやすく解説したジュニアガイドブックを発行するなど、幅広い年齢層に広報普及活動を行った。また、ホームページを積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行った。</p> <p>*別紙実績報告書104、105頁参照</p>	A	<p>文化、美術作品及び国立美術館についての国民の理解促進を図るため、年報、展覧会図録、リーフレット、ジュニアガイドブック、月報等を発行するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。特に年報が優れていた。</p> <p>より一層、国民に美術館活動が理解されるよう内容を工夫し、今後も積極的に実施することが望ましい。</p> <p>また、インターネットを積極的に活用した広報について検討することが望ましい。</p>	
	ジュニアガイドブック	1回以上	-	0回	出版件数1件	A
	月報	12回以上	8回以上12回未満	8回未満	出版件数12件	A
「展覧会案内」出版件数	1回以上	-	0回	出版件数1件	A	

<p>(1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。</p> <p>(5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。</p> <p>(5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。</p> <p>また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。</p>	<p>収蔵品の情報デジタル化及びその活用状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>収蔵作品について、文字データは179点の作品データの入力を行った。これにより、平成13年度の新購入・寄贈作品も含めて全収蔵作品のデータ入力完了している。今後も新たに作品が収蔵されれば遅滞なくデータ入力を行い、データベースの整備を推進する予定である。画像データについては、現代美術作品を収集するという当館の特色上、各作品につき著作権のクリアをしなければならないため、著作権者の了承が得られた作品から順次データ化を行っている。平成13年度は100件の画像データを入力し、現在まで総数1305件の入力完了している。画像データについても文字データと同様、できるだけ速やかに入力を行っていく予定である。</p>	<p>A</p>	<p>文化、美術作品及び国立美術館について国民の理解促進を図るため、平成13年度末までに、収蔵品の文字情報については全て、画像については1,305件のデジタル化を終了し、美術館情報についてホームページで公開するなど中期目標に向かって着実に成果を上げている。</p> <p>また、美術作品に関する情報のデータベース化にあたっては、標準化を検討するなど国民が簡便な方法でアクセス出来るシステムの開発を常に心懸けることが望ましい。</p> <p>美術作品がコンテンツの素材として注目される中で、著作権について慎重に取り組むことが望ましい。</p> <p>ホームページについては、さらに内容、デザイン、外国語版など充実させることが望ましい。</p>
<p>(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。</p>	<p>ボランティアの活用状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する</p>	<p>現在の状況で導入は難しいが、新館移転に向け検討中</p>	<p>B</p>	<p>ボランティアの受入れについては、その方針をよく検討したうえで実施する必要がある。</p>
<p>(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。</p>	<p>渉外活動の状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>今後企業からの寄付金の受入れ及び経済界等の団体との懇親会を持つ等、方策を検討中</p>		<p>平成13年度は、実績がないため評定しない。</p> <p>なお、国立美術館の業務の充実を図るため引き続き検討する必要がある。</p>
<p>5 新たな美術館施設の円滑な運営について</p> <p>(1) 東京国立近代美術館本館については、平成14年の開館に向けて、体制整備、展示等の実施準備を進め、開館後は円滑な事業実施に努める。特に、展示面積の増加を機に展示内容の一層の充実を図る。</p> <p>(2) 国立国際美術館新館については、平成16年の移転に向けて、体制整備、展示等の実施準備を進め、開館後は円滑な事業実施に努める。具体的な管理運営のあり方等については開館までに検討を進める。</p>	<p>開館への準備状況</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>平成16年の新館移転に向け学芸課、庶務課メンバーによる新館部会を設立し、新館の管理運営の在り方等についての検討を行っている。具体的には、移転タイムスケジュール表を作成し、毎月の定例会議にて移転に係る検討課題等の事項について進捗状況を報告することにし、準備を進めている。</p>	<p>B</p>	<p>平成16年度の新館移転に向けて、体制整備、展示等の実施準備を進めるため、管理運営の在り方について部会を設け検討を始めるなど中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p>
<p>6 新国立美術展示施設（ナショナル・ギャラリー）（仮称）の開設に向けた準備について</p> <p>文化庁が平成18年を目途に開設を予定している新国立美術展示施設（ナショナル・ギャラリー）（仮称）について、文化庁と連携・協力し、その円滑な開設に向けた体制整備、展示事業等の準備を推進する。</p>		<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>平成14年度から実施。</p>	<p>-</p>	<p>（平成14年度から評定する。）</p>
<p>7 その他の入館者サービス</p> <p>(1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。</p> <p>(1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。</p> <p>(1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。</p> <p>(1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイド等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。</p> <p>(2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。</p>	<p>その他の入館者サービス</p>	<p>法人による自己点検評価の結果を踏まえつつ、各委員の協議により、評定を決定する。</p>	<p>高齢者に配慮して、拡大鏡（ルーペ）を受付に配置し、希望者に貸し出した。</p> <p>当館は、展示空間の在り方が展示作品に大きく反映する現代美術を扱うため、展示場内に解説パネル類を掲示できない。これは、作品自身を十全な状態で鑑賞してもらいたいという配慮からであるが、同時に来館者からは解説パネルを望む声や作品キャプションを大きくして欲しいなどの声も聞かれる。そのような声に答えるため、当館では5つの展覧会で、展示作品リストを含めたリーフレットを無料配布し、鑑賞環境の充実をはかった。また館内にビデオテークを設置し、情報提供を行っている。</p> <p>当館は、公園内にあるという特殊事情のため、入園時間が延長される公園行事（紅葉狩り等）にあわせて夜間開館を行い、入館者サービスに努めた。</p> <p>* 別紙実績報告書105, 106頁参照</p> <p>ミュージアムショップについては、現代美術をより親しく感じてもらえるよう、販売しているグッズの内容を検討し、充実させた。</p>	<p>B</p>	<p>入館者に対するサービスの向上を図るため高齢者に配慮した拡大鏡の貸出、リーフレットの配布、夜間開館、ミュージアムショップの充実など中期目標に向かって概ね成果を上げている。</p> <p>今後も、アンケート結果の分析やモニター制度を検討するなどの確に入館者のニーズを把握し、きめ細かなサービスを提供する必要がある。</p> <p>なお、新館移転後は、より積極的に入館者サービスに取り組む必要がある。</p>

(3)ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。					
---	--	--	--	--	--

* A B C 評定

- A : 中期計画を十分に履行し、中期目標に向かって着実に成果を上げている。
- B : 中期計画をほぼ履行し、中期目標に向かって概ね成果を上げている。
- C : 中期計画を十分には履行しておらず、中期目標達成のためには業務の改善が必要。
- : 評定しない。

